

私、ツインテールが好きですか？

空魔神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

津辺愛香の妹【津辺好香^{よしか}】。髪型がツインテールの次姉やツインテールが好きすぎるお隣のお兄さん、最近はもうツインテールツインテールと騒ぐ怪人たちまで見かけるけれど、ツインテールじゃない小学生。

彼女がとあるヒーローと邂逅した時、物語が動き出す——!!までが遅い。

オリキャラ絵をもう少しキャラ付けしようと、ブログで見切り発車している【マグニフィセントツインテールお試しs】なんて俺ツイsを微修正、正式タイトル決定してこちらに出すことにしました。……見切り発車なのでどこまで続けられるかは正直

に言つて未定です。

目次

私、ツイントールが好きですか？

1

第2話

15

第3話

31

第4話

46

第5話

62

第6話

75

第7話

91

第8話

108

第9話

130

番外編・ちよつと昔の、とあるとある並行

世界のこぼれ話

147

第10話

163

第11話

179

第12話

197

第13話

218

第14話

234

番外編・ちよつと昔の、とあるとある並行

世界のこぼれ話その2

256

第15話 私、名前は何ですか？

269

第16話

285

第17話

304

第18話

327

第19話

348

私、ツインテールが好きですか？

春の始めから、地球は変態な侵略者の脅威にさらされていた。人々の笑顔が奪われそうになった時、遙か遠い異世界の科学者痴女から力を授かり、彼女らはやってきた。ツインテールと呼ばれる頼もしいヒーロー達が。そして今――

私はツインテールが……きらい。他人がツインテールにするのは気にならないよ。けど自分でツインテールにしようとは思わない。子供っぽいからってゆるいでもないよ、興味無いだけだもん。

『―思い出すんだ。』

TVでかつこよく活躍するツインテールの主人公ヒーローを見ても、ツインテールが可愛いとは思わない。きょーみが無いんだもん。

『—思い出してくれ。』

私はツインテールがきらい——のはずだもん。

『キミの本当の属性きもちを。』

「……………なんか変な夢見てた気がする」

「お、起きた？ 変な夢か知らないけどまだ寝てるんだったら頼った爪を掴って起こしたわよ？」

誰かに呼ばれ続けてたよーなそーでもないような夢から覚めて最初に見たのは、自分の部屋の天井——じゃなくて、歳が近い方のおねーちゃんの顔だった。近いって言うても6つも離れてるんだけど。

「ちい姉はもうちよつと優しくなつてもいーんじゃない？」

「優しく起こしてる間に起きたから問題無いでしょ。ほら、さつさとベッドから出て顔洗ってくる」

起きたばつかに聞かされる実力こーしが寸前だった宣告は、私のほっぺに触れている自分よりも大きなちい姉の手がしょーこだ……妹にやること？

その手を軽くつかんで小さくこーぎしてみたけど完全にスルーされて、おでこをつつかれるだけだった。まったく、妹の意見を聞けちい姉め。

まだ眠い目をこすってしつかり開けてみると、ちい姉はすつかり朝の準備を終えている様子。制服のスカートと頭から伸びるふたつの髪―ツイントールが揺れてる。

―これが私のちい姉・津辺愛香15歳。

いろいろとくちよーはあるけど、目立つとこだとおじーちゃんから武術習つてめっちゃ強い怒つたらめっちゃ怖い人。見た目でもある意味、目立つとこあるんだけどそこ言ったら怒るからそのうちね。

もう1人、大きいおねーちゃんがいるから愛香おねーちゃんはちい姉なの。

―で、私が津辺好香。ツイントールはきらいな9歳。

見た目はおねーちゃん2人の下位互換よ。いずれはちい姉以上のスタイルになるってこつそり思ってるけどね、ふふん。

なんだけど、その揺れるツイントールを見てるとつい、妹わたしを起こすという役目を果たして扉へ向かおうとするちい姉の背中に抱きついちゃった。うむむ、きつと変な夢のせいだ。

「んー……まだ眠いからちい姉が下まで運んでー。怪力だしらくしよーでしよー？」

「はあ？何よいつもより起きるの遅い上に甘えてくるじゃない。でも残念。お姉ちゃ

んに頼む態度じゃ無かったので却下よ」

背中に寄りかかっている私を軽く抱き上げたちい姉は（やつぱりらくしよーだ）ベッドの上に立たせてしまうと、寝ぐせで跳ねに跳ねた私の髪を一つまみ。

「寝ぼけてんじゃないわよ。急がないとこのぼさぼさの頭で学校いくことになっちゃうわよ」

なんて私の鼻をくすぐって、可愛い妹のめずらしいお願いを聞くことなく部屋を出て行った。はくじよーもの。

ツインテールは好きじゃない。でも、ちい姉のツインテールだけは……別かもね。

で、本格的に起きた私は顔洗って着替えて……大慌てで朝食を食べてる。

髪？ちい姉の忠告通りぼさぼさのままよセミロングの筈がぴんぴんに跳ね上がって、ショートヘアかっつてくらいになってるわ。しようがないじゃん時間ないんだもん。

いや、小学校の時間にはまだまだ間に合うよ。でもちい姉は高校生だから、私より始業時間が早い。一緒に家を出ようと思ったらギリギリなんだよね今。

「だから言ったでしょうが」

食卓の向かいに座って、あきれ顔してるちい姉に何か言い返したい。けどその時間も惜しい。その前に口いっぱいにトースト詰め込んでるせいでしゃべれないけどね。

「はいはい。まだ待っててあげるから落ち着いて嘯みなさいよ。だいたい初等部はもうちよつと時間あるんだからそんなに慌てなくてもいいじゃない」

気遣いと意地悪が混ざった言葉をちい姉が言う。どこが意地悪かって？私が慌てる理由を知ってるクセに言ってるんだから意地悪なの！頬杖と失笑のコンボで私を見ているのも証拠だしよーこ。

「好香は愛香と一緒に登校したいんだから仕方ないのよねー好香？」

と、私の後ろから助け船が来る。いや、こつちも意地悪が混ざってるから助け船かちよつと怪しいけど。うぬぬ、こつちの方も笑ってるのが見なくても分かる。おねーちゃんまで可愛い末妹をおちよくって楽しむとは何事かええい。

——津辺恋香19歳。

ストリートロングヘアがキレイな私のいちばん上のおねーちゃん。性格スタイル諸々、私とちい姉の進化系みたいな人……腕つぶしだけはちい姉がいちばんだけど。

あ、進化系って言ったけどちい姉がおねーちゃんみたいになれるとは……。私？私はおねーちゃんみたいになれるよなってみせるもん。言ったでしよちい姉以上のスタイルになるって、ふふん。

そんなおねーちゃんは、忙しなく朝食を詰め込む私の髪を梳いてくれている真つ最

中。今日は朝の授業が無いので、いちばん時間によゆうがあるんだって。大学生はそんな時間割もあるらしい。私だったらもつと寝てられるのになあ、ちよつとうらやましい。

「お姉ちゃんそこで好香に聞いちやダメでしょ」

「じゃあ愛香も分かつてて言つちやダメじゃない。ね、好香？」

身支度を手伝ってもらつて、それを待つてもらつてる立場だけど、前と後でニヤニクスクスと笑いながらからかわれるのは納得いかない。……私のほつぺたが膨れているのもうトースト詰め込んでるからじゃないからね、おねーちゃん達め。

「でも、今日はなんで待つてくれたの？総二兄のどこ行かないで」

どたばたと準備を済ませて、ちい姉が一足先に待つてる玄関まで走ると気になることができた。ちい姉は身支度を済ませると、お隣の喫茶店に行くことが多い。高校生になつてからは特に。お目当ては喫茶店じゃなくそこにいる幼馴染。

——観東総二一五歳。ちい姉と同じ年で、私にとつてはおにーちゃんのような人。

そして超超重度のツイントール好き。どのくらいかつて、ツイントールさえあればご飯食べなくても生きてそう……とかちよつと思つちやうくらいだよ。その点については私と合わない、というかちよつと引いてる、かな。

ちい姉って見本があるからか、何度かツイントールを勧められたこともあったんだよ。別に無理強いてきたりなんかしないよ総二兄は。でもちい姉効果でやんわり布教はしてくるから、一応きっぱり「ツイントールなんかやだ」って言ったんだ。……その時はこの世の終わりみたいな顔された、解せぬ。おねーちゃんだってツイントールしてないのに。

とにかく。ちい姉は、ツイントールに頭を染められてそうなこの総二兄が好きなんだって。

おねーちゃんに聞いたところ、ツイントールも総二兄の為に磨き続けているとか。私が生まれる前からしーけど、それでいて現在も進展なさそうなのは、総二兄がツイントール以外に鈍感すぎるのかちい姉が情けないのか……そのどっちもか。

「あ、あたしだって毎日毎日そーじのここに行ってないわよ！大体、今朝はあんたの様子が変だったからでしょ」

朝、いつしよに家を出る回数が目に見えて減ったのに、まだいらぬ見栄を張ったりしてるから進展ないんじゃない？と思ったけど、頭に置かれた優しい手に何も言えなくなった。よく覚えてない夢のせいでめずらしいことをしちゃったのを、スルーしてたよ。うで気にかけてくれるのがちい姉なので。こーゆーちい姉だから好き。

「……ありがとう。それはだいじよーぶだから」

とはいえ、はつきり心配されるとそれはそれで気恥ずかしいとゆうか。よし、ぱぱつと靴を履いて、いつでも逃げられるようにドアノブを回して。

「でも、私に気を回してるとちい姉じゃ誰かに総二兄あつさり取られちゃうんじゃないかなー？知らないよー？」

舌を出して、ぷふーつと笑って誤魔化した。ここから、ちい姉がぼかんとしてる間にドアを開けて一歩踏み出すスピード勝負だ。理解して「あ、こんのチビスケ！」って怒るちい姉を振り返らずにドアを閉めてダッシュ

——しようとしたら空から銀色のカーテン？が落ちてきた。

「おはようございませす！今日も全身ペロペロしたいほど可愛いですネ好香ちやあごお
おおばああつ!!!」

「ふんっ！」

カーテンじゃないお隣の二階から一直線に飛び込んできた銀髪のおねーさんだ。

「ひいつ!？」

そしておねーさんは、一瞬で私の背後から飛び出したちい姉に勢いそのまま二階へ殴り返された。乗り物を使わない人身事故に悲鳴を上げた私ってまちがってないよね。……もう何度目かって光景なんだけど、まだ慣れないなあ。

ねーさん。

総二兄の家にホームステイしてる。初対面の時から凄く元気で何かと私に優しい……けど何か鼻息が荒い時が多くて、だいたいちい姉にボコボコにされてるのに何度でも立ち上がってくる凄い人。あと、頭もすごくいいみたい。なんか凄そーな道具をちい姉に投げてるの見たことある。……ちい姉は素手で壊してトウアールさん殴り倒してただけ。

「ちよつとお隣の可愛い幼女おんなのこに朝の挨拶をしようとしただけで何故に殴られなければならぬんですか!?!」

「年端のいかない妹に向かってよだれ垂らしてダイブしてくる変態がいたら始末するでしょ」

「あんな可愛い妹さんに愛香さんがすぐ会わせてくれなかったからブレーキが緩んじやったんですよ!!私がつかり路上で見境なく幼女に飛びついてしまう前に責任とって好香ちゃんをペロペロさせるべきです!!!」

「だから近寄せたくなんじやボケエエエエエエエ!!!」

「ああああああ畜族には殺意のブレーキが無い!!!」

今もなんか言い合ってる、ちい姉がトウアールさんを顔から地面に落とす。

ちい姉は私がトウアールさんと会うの渋ってるけど、美人で頭も良くて何度倒れても

立ち上がってくるなんて、ヒーローみたいでかっこいいし憧れるんだよね。前にそれ言った時は、ちい姉に熱でもあるのかとめっちゃめっちゃ心配された、解せぬ。

「そういやそーじの部屋から飛び出してきたわね……あたしが家に戻ってる間、何もしてないでしょうね？」

「ほーほーほー」

地面にめりこんだままのトゥアールさんに探りを入れ？脅しをかけ？ているちい姉。

（なーんだ。毎日行つてないとか言つたくせに、今日も先に総二兄の家に行つてたんじゃん）

私に対しての無駄なごまかしをぼろつと自白しているちい姉はさておき。

私にとってトゥアールさん最大の特徴といえばやはりこれ。今年になって現れた「ちい姉の恋のライバル」とゆうーこと。

知り合つていちばん日が浅い私にもわかる程に、トゥアールさんは積極的に総二兄へアピールしてる。そのアピールの内容は私にはよくわからないんだけど……ともあれ、ずっと進展のないちい姉にはけっこうな強敵だと思う。

私としては、かっこいいトゥアールさんも応援したい、んだけどこの機会にちい姉に頑張つてほしい。ツインテールがきらいな私なんかでもちよつといいかも、つて思つちやうツインテールを総二兄の為にずっと磨いてるちい姉を知ってるだけに肩を持ち

たくなるんだよね。

それに、トウアールさんが積極的って言ったけど、そのアピールにも総二兄は一切気付いてない様子なのでまだまだちい姉にチャンスはある……はず。その鈍さで私が生まれる前から気付かれてないのがちい姉だからね……でも、まあそこはトウアールさんが刺激になつてくれればワンチャンつてやつをさ……。

「おはよう好香。愛香が心配してたけど大丈夫か？」

「おはよう総二兄。ちよつと寝ぼけてただけだからへーき。」

トウアールさんを相手にしたちい姉の蛮力の嵐から目を逸らした総二兄が挨拶してくる。ちい姉つてば、総二兄にまで私のこと喋ったのか寝ぼけてただけなのに。

「それにちい姉が睨んだらちよつとしたびよーきくらいは逃げちゃうつて」

「はは、いくら愛香でもそこまでは……あるのかなあ」

私の言葉を笑い飛ばそうとして遠い目になる総二兄。

やつぱり私よりも長い付き合いだけに、私がまだ知らないちい姉の女子力マシバワーを思い出してあながち冗談とも思えないんだね。だいじょーぶ、言った私だつて半信半疑だよ総二兄。

ちなみに私たちの視界の端では、トウアールさんに鮮やかなフィニッシュアップを決

めるちい姉がいる。そんなだからじよーだんがじよーだんに思えなくなってくるんだよちい姉。

「愛香と一緒に登校したいんだろうけど、身体に悪いことはするなよ?」

ぬぐぐ、おねーちゃん達だけでなく総二兄にまで見抜かれているとは……

「でも、初等部と高等部じゃいちばん校舎離れて別れるの早くなつたし、ちい姉も前より朝から総二兄の家に行くこと多くなつたし、ちよつとくらい早起きしないといつしよに家出られないじゃん……まあ今日は寝坊したけど」

(総二兄の家に行くのはトゥアールさんのけんせーだと思うし仕方ないけどね)

しかし、ちい姉に直接言いづらいことをいちばん話せるのは総二兄だ。何でつて? おねーちゃんでも未春総二兄のおかーさんおばさんでも喋つたら面白がつて絶対にちい姉にばらすからだよ!!

総二兄は隠し事は下手だけどちゃんと黙つてようとしてくれる分、2人よりずーっと信用あるよ。

「この、この世の理不尽……!なんで愛香さんみたいな蛮族にあんなお姉ちゃん大好きオーラ隠せない可愛い幼女いもつとが……!?私に欲しいイイイイ……!!!」

「ほんつともーあのチビスケめ、照れくさいのはこつちよ。こんな近くで話してて

あたしに聞こえないと思ってるのが抜けてるのよねー。あんたみたいなロリコンにだけは渡せないわよ危ないわね」

「会話中に当たり前のような目潰しがああああ!!」

もつとも殴り終えたちい姉と短時間でリカバリーしてるトゥアールさんにばっちり聞かれてみたいんだけど、私は知る由もなかった。

第2話

繰り返し言うけど、高等部と初等部はそこそこ離れてるから、ちい姉たちといっしょに歩いていられる時間って短い。ほんと、同じ【陽月学園】なんだからもっと近くに校舎建ててもいいと思うんだよね。

でもね……ちよつと寂しいけど、トウアールさんが総二兄へのアピールと私を構おうとしてくれる度にちい姉にピンボールのように跳ね回されているのを何度も見ると短くてもいいかな……という気になったりもするんだよね。

トウアールさんがお隣に来てからちい姉の人間離れがもつとはつきりわかるようになってないかなあ。トウアールさんが来るまでは総二兄がよく殴られてたけどよく無事だったよね。けど最近はトウアールさんのやられっぷりに引いたのかちい姉をからかうことが減ってるね総二兄。

それにしても、ちい姉は何で私とトウアールさんがいっしょにいる時までトウアールさんを目の敵みたいにするんだろう……？

「あーもしかして可愛い妹を友達に取られたくないってゆー〴〵しつと〴〵？えー私も罪作りかなー」

だったら、ちい姉には妹のフトコロが深いところを見せなきゃだめかなー？私はトウアールさんもちい姉も大好きだよーって。ふふん。

わ、トウアールさんこっち見て勢いよく跳ね起きた。もう回復したんだ。

「好香にはトウアールの為にもそのまま置いて欲しいような自衛の為にも真実を知って欲しいような……複雑だよ俺は」

あれ総二兄、今何か言ったかな？遠い目しながら、また殴られてるトウアールさんを見てるけど。

ちい姉たちと離れて初等部の校舎に入れば……景色の半分はツイントールで埋まっちゃう。「アルティメギル」とかいう怪物の見た目をした不審者たちとそれをやっつけてくれるヒーロー「ツイントイルズ」が現れてから周りのツイントールが日ごとに増えること。増えること。

「相変わらず右も左もツイントールだよね」

クラスメイトは当然、両隣のクラスに上級生、果ては先生たちまでツイントールの人が増えてる。ツイントイルズ効果はわかるけど、こっちとしてツイントールばかりでちよつと滅入る。他人がツイントールでも気にしないって言ったけど、きらいはきらいだからね。滅入るくらいはあるんだって。

「好香ちゃんはまだツインテールにしないの？」

「うーん……私はまだいいかな」

友達から不思議そうに尋ねられるくらいには、今ではツインテールにしてない私の髪型の方が女子の中で浮いちゃってる。こうなるとツインテールにできない男子がちよつとうらやましいって時があるよ。そのせいか男子の集団を目で追うことが増える気がする。いつの間にか男子が目の保養になってきたような……いいのかなーこれ。

うっかり目が合っちゃった男子に誤魔化すように笑ったら慌てて顔をそらされた。はて？

「えー？テイルレッドちゃんとお揃いだよ？」

話題独占のヒーロー、ツインテイルズの人気はほぼリーダーのテイルレッド一強。それは驚くことに私たちと同じくらいの女の子。そしてあの赤いツインテールがまた凄いい。さつき滅入るとか言っただけどみんなが憧れてツインテールにするのも分かってしまふ。

でも分かるんだけどそれはそれ。

「もーだから私はテイルレッドに、てゆーかツインテールそこまで興味はないんだっ

てばー。同じテレビに出てる子なら私は善沙いすなあんじ闇子の方が……」

食い下がってくるクラスメイトにぶらぶらと手を振って否定する。ホンモノのヒーローなんだし、あの火の剣振り回す必殺技とかはめっちゃかっこいいんだけど。それでもツインテールがきらいなせいかなあ？ 私にはそこまでテイルレッツドが響いてないんだよね。凄いののはわかるんだけど、同じツインテールにしたい？ ってゆーのはなんかちがうんだよねえ。

それよりも善沙闇子の方が好きかな。あつちはヒーローじゃなくてアイドルだけど。眼鏡アイドルとでも言えそーな眼鏡推しの姿勢に、ぐつと来ちゃって。それで、おねーちゃんに伊達眼鏡とかもらったりしてるんだよね……ちい姉、怒らせてぼっしゆーされただけ。眼鏡ちい姉を見て、つい「うわ、ちい姉がクール美人に見えるなんて詐欺アイテムだね」とか大笑いしたのがまずかった。その日はトウアールさんにも笑われてたみたいで完全にタイミング悪かったんだよね。「それじゃあバカのアんたにも詐欺アイテムよねチビスケ！」つてもんどーむよーで取り上げられちゃった……。そーゆーところじゃないちい姉め。

おつといけないいけない。

やっぱり私がちよつとでも気になるツインテールって言えるのはちい姉のだけ——
のはずだ。

「別に隠すことないだろー」

「自分でツインテールに出来るクセに贅沢だぞ」

「私は好香ちゃんのツインテール見たいなー」

むむ。話が聞こえているだけの男子まで参加してきた。隠してなんかいないというのに信じない気か。で、善沙闇子についてはスルーなの私はそっちがいいって言ったじゃん。てゆうか、ぜーたくとかなんなの。

「ぜーたくとかぬかしたやつはツインテールくらい髪の毛伸ばしてしなさいよ。ハリウッドでテイルブルーの役、男じゃん」

ふん、男子は一人だまらせたけど。ええい、ひとがきらい興味ないってゆうのに好き勝手なこと並べてくれちゃって。いいわ、わかった。どうしても、あくまでどうしてもツインテイルズから選べって言われるなら――

「くぬぬ、みんなして疑り深い！わーかーりまーしたー！選べばいーんでしょツインテイルズから!? ツインテイルズから選ぶんなら私はテイル――」

――そして放課後。私はぶんすか怒りながら下校することになった。

「もうっ何よ！みんなが言うから選んだのにあんな反応ってある!? 失礼しちゃう!!」
あまりにクラスメイトが問い詰めてくるから私はしょーじきにギリギリ気になって

いるツインテイルズを答えた。そしたら、そーしたら！みんなして有り得ないものを見た顔するんだよ!?

冗談きついと頬を引きつらせる男子やすぷらったー？映画が好み？と尋ねてくるやつ。ほんつともうちよつとで蹴つ飛ばすところだったよ！仲のいい女子にいたってはさー……!!

「なーんで『体調悪いなら保健室行こ？先生呼んだ方がいい？』よ！私はけんこーそのものよ!!」

ついつい声が大きくなる。何をそこまで心配されなきやなんないの。テイルレッド以外が気になるのがそんなに驚くこと!?!……TVじゃ怪獣より怖がられてるし実際怖くもあるけど。

「【テイルブルー】が気になったっていーじゃない」

——テイルブルー。テイルレッドに続き登場した2人目のツインテイルズ。

情けよーしゃのない戦いぶり我を忘れる大暴れ模様からTVで全然ヒーローと思われてない人。とゆーかニュースとか見るとアルティメギルからも怖がれてる気がする。

私もちよつと……ううん、めっちゃ怖い時ある。いえまだ嘘でした初めてTVで見た時から怖かったです。あれは怖いって。

——でも怖さ以上に、力の限り暴れ回る青いツインテールが目にとまったの。テイルレットとはちがうかつこよさで、学校や街で見かけるツインテールともちがうツインテール。

私が気になるツインテールなんて、ちい姉のだけだと思ってた。思ってたのに、ちよつと。ほんとにちよつとだからね！ちよつとだけど、まさかあんな力強いツインテ「幼子よ、テイルブルーが気になるぞ?」というのはいささか……」

「きゃあああああああああ!!!」

足元から野太い声で怪物が顔を見世^{!!}て腰を抜かした。尻もちをつく前に柔らかい感触があつて、そのまま抱きとめられたんだけど……なんで私は怪物なんかにお姫様抱っこされるの!?

「おつといかん。これは驚かせてすまん。君の愛らしい膨れっ面を後ろからずつと見守っていたのだが、テイルブルーが気になるなどと幼子らしからぬ言葉に、つい声をかけてしまったリス」

なにその急にとつてつけたよーな語尾。そこに引つかかると顔が、とゆるか全体的にリスっぽい怪人なのに気付いた。私を抱きとめた手も指が開かないリスみたいだし、太くて丸いしっぽもある。そっか最初の柔らかい感触ってこのしっぽだ……。

「なな、なんなのアンタ!」

「え、こんな幼い女児から名前聞かれるなんて夢か……ゴホン。我が名はスクウエレルギルデイ！偉大なるアルティメギルの戦士よ！リス」

何を勘違いしてんの、顔紅くしながら堂々と名前言われたけどそーゆーことじゃない。変質者集団アルティメギルの一員なのは見ればわかるよ。それが私の前に出てくる、つてゆーかそれに私が抱っこされてるのが意味不明ってこと。

「それでだ。姿を見せてしまった以上は頼みがある。幼子よ私の腕の中でさっきのような愛らしい膨れっ面を見せてくれ!!リス」

「やだー！よくわかんないけどきもい!!」

怪物から真顔（だと思う）におっさん声で意味が分からないお願いされたら怖いよりもきもいが先に来る。

こーなるとリスっぽい見た目で顔膨らませて見せてるのも逆効果になってもつときもい。

「きもい?!いやいや、怯えることは無いのだ幼子よ。私は腕の中で膨れっ面が見たいだけなのだ、ツインテールにしてくれると尚のこと良い！礼には手作りのカスタードプリンもつけよう！リスとプリンの組み合わせは人気だろう？リス」

顔膨らませたまま器用に早口でなんか言ってくる。しれつと要求ふやしてんじやないよ。おまけにニチアサのキューティピュアと自分を並べてるのが腹立つ。ちっさく

て可愛いピュアカスタードがプリン持つてるのとリス面のおっさん声した変質者がプリン差し出してくるのが同じと思わないでよ厚かましい。

「ピュアカスタードに乗つかろうとしないですよあつちのイメージが汚れちゃうじゃない!! ーから早く放してよお化けリス!!」

「おおう予想外にきつい物言いの幼子よ……地味に心が辛い! リス。だがそれも元気の印よ。そんな少女の膨れっ面が見たくて私は通学路を見守っていたのだリス。その願いを叶えてはくれぬか!?! リス」

シヨック受けてるよーで全く引かないじゃんこのお化けリス。ちよつとずつ顔近づけてこないでよきもすぎて怖くなってくる。

「あーもー!! どっか行つて……よっ!!」

鼻息で前髪が揺らされて、反射的に手が出た。トウアールさんに会ってからなんでかちい姉が教えてくれた普通より痛いっていうビンタ(※好香が知らないだけで愛香が教えたそれは格闘術の骨法なのだが)。ちい姉は危ないからトウアールさん以外は不審者変質者にしか使っちゃダメって言ってたけど、もう無理がまんできない。変質者だしーでしょ!! これでもくらえお化けリス!!

『それではダメだ。思い出せー』

「だけど振り込んだ手は本物のリスみたいに膨らませてる頬に当たったら、ぽよんと跳ね返った。うそでしょ……」

「元気があつていいぞう。そんな元気つ娘が不満げに頬を膨らます……それは素晴らしい景色なのだ。さあ怖がることはない……」

「何言ってるの!?!」

『思い出すんだ。本当のきもちを——』

「先程に吐き出していた不満も私にピンタが通じなかつた不満もすべて膨れっ面にしてみせてくれえええいリス……ふしゅー」

「ひいつーやだ、どんどんきもい——」

『思い出してくれれば私は君の力となれる——』

夢で聞いたような声が頭に響いてるような気もするけど、それどころじゃない。どんだん息を荒くして迫ってくるお化けリスの顔に、とうとう私は気が遠くなつて——

『ダメだ、仕方ないこうなつては——』

「ちよ、ちよつと待て私は怪我をせぬよう抱き留めただけ」

「そう言つて触つたのねわかつたわ死ね」

「おべつへええええ!!」

——自動車がぶつかり続けるようなすごい音と野太い悲鳴で私は目を覚ました。

周りを確認しようとして首を動かすと、頭の上に大きな胸と黄色いツインテールがあった。隣は私と同じくらい背の赤いツインテールが。

「う……んう、あれ……?」

漏らした声に気付いた赤と黄色のツインテールが私を見て揺れた。

「あ、気が付きましたわ!もう大丈夫ですわよ!」

「よかつた目が覚めたんだな!来るのが遅くてごめん。怖い思いをさせてしまつて……」

頭がはつきりしてじよーきよーが分かつてきた。心配そうな顔で優しく抱きかかえてくれるのはテイレイエローで申し訳なさそうな顔で手を握つてくれたのはテイイレッドだ。足元にはモケーモケーとしか言わないアルティメギルの戦闘員—モケー(※

悲しいかな一般人の好香には正式名称アルテイドが浸透していない）がいっぱい倒れてる。

つまり

「ツインテイルズだ……！」

世界を守るヒーロー
ツインテイルズが私を助けてくれたんだ。

「ぐああああ!!私、私はただ幼子の愛らしい膨れっ面を腕の中で心行くまで鑑賞した後に私の膨れっ面とでにらめっこしたいという長年の望みを叶えたかっただけで、お前のような悪鬼に睨まれたかったわけでは無い——」

「やかましいっ!おらあああああ!!!」

「ひいひいひい悪魔あああああ!!!」

「その汚いツラをあの子に擦り付けたうつつたかあ!?!望み通り膨れっ面にしてやるわ
おとおおらあああああ!!!」

「そ、そんなことしてなあべえええええええええええ……!!!」

テイルレッドはさり気なく私の視界から目の前の光景をせめて遮ろうとしてるんだけど、お化けリースクスウエレルギルデイだっけーの命乞いと悲鳴、それを上げさせてる人の怒号の音声はミュートできずにずっと響き渡ってる。

なによりレッドの小柄な体じゃ隠しきれない青いツインテールが勢いよく目の前で

びゅんびゅん動いてるのがぼっちり見える。

もう何をどう言ってもカバーできない光景だと思うよ。要はテイルブルーがスクウエレルギルデイをボッコボコにした。

いつもTVで見るよりもすごい怒ってるように見えるけど、ブルーにも何か言ったのかなスクウエレルギルデイ……

「うっわあ、生で見ると迫力が違う……!」

私からはほぼブルーの後ろ姿しか見えないけど、凄まじさがびびしびし伝わってくる。ちらちら目に入るスクウエレルギルデイの手足としっぽがどんどん動かなくなっていく怖い。やっぱりアルティメギルとは別の意味で怖い震えてくるわこんなの。

でもそのツインテールは凄く――

「怖い思いして起きたばかりでこんな光景で本当にごめん……でもブルーは君の為に怒……って、今一際すごい音したぞ!?おいブルー!好香は目を覚ましたからあんまり刺激の強そうな光景は――だめだ怒りで聞いてねえ。ほんっと、ごめん……!」

「あ、うん。レッドがあやまることじゃないと思うから……」

気付けの映像に選んじやうと逆にまた気が遠くなりそうなシーンを披露してる仲間をどうすることもできずにレッドがばん、と手を合わせてあやまってくる。

……でもその向こうじゃ

「うおらあつ!!」

「……………」

何も言わなくなつたスクウエレルギルデイが空中まで蹴り上げられて、テイルブルーの必殺技―確かエグゼキュートウエイブが炸裂してた。上に放られたせいで顔一面をボコボコに腫れあがらせてぐったりしたスクウエレルギルデイばかり見ちゃつた…………。

投げた槍をキャッチしたテイルブルーは一仕事終えたみたいな爽やかな笑顔を私に向けてくれた。

「もう安心よ。怖い変態は私がやつけたから」

「いや安心っていうか、変態の恐怖をお前の恐怖が上塗りしてないか心配なんだが…………」

対してテイルレッドは生の大迫力すぶらつた―映像による私の精神ダメージを気にしてくれてるのかなんとも言えない顔をしている。ありがと。でもそれは多分だいいじよーぶ。

「あの、だいいじよーぶです。確かにめっちゃ怖、じゃないちよつと、そう多分ちよつと

びつくりしたけど」

自分に言い聞かせるようにブルーのフォローをする。けど、上手く言えないせいでブルーがしまった、って感じの表情になってきた。ちがうんだって、ほんとに怖いとかじゃ無いの。いや怖かったけどそーじゃなくてその。言葉が出てこない間にブルーの表情がまた暗くなってきた。ええい、こーなったら勢いだ。私はイエローの腕の中から飛び降りてブルーの手を握る。たしかにブルーの戦う姿は怖かったんだけど

「か、かつこよかったです、すつごく!」

それ以上にかっこいいと思った。テイルブルーの力強さのままに揺れ動く青いツインテールに目を奪われてた。

「大暴れしてかつこよくて……なんか私の大好きな人みたいで、ちよつと悔しいけど」私が好き、かもしれないツインテールはちい姉だけだと思ってたのに。テイルブルーのツインテールは、まるでちい姉のツインテールみたいに心を揺さぶってきた。私がちよつとでもブルーが気になってた理由。それを生で見せつけられた。ツインテールも生で見たら迫力がちがった……ちい姉に負けないツインテールがこの世にあるなんて……!それがちよつと悔しい……いやでも、ちい姉のがちよつとくらいブルーよりもすごいはずだもん!うん!」

「へ、へえ。そ、そんなにかっこよかったかあ私」

いろいろある気持ちをうまく言えなくて、でも何とかさいしよーげんはお礼を伝えられたかな、と心配してたらブルーの声が震えてきた。あ、顔もニヤけるのかくそうとしてるけどできなくて震えてる可愛い。わあ、テイルブルーのこんな顔初めて見ちゃった。

「ねえレッド。あの子、途中からしっかり声に出てましたわね」

「ああ。しっかりしてそうで抜けたところあるんだよ好香は。でも不意打ちにあんな褒め殺しされたらブルーもああなるんだな。でも、あの光景からブルーのツインテールをちゃんと見れるなら、やっぱりツインテールの素質あると思うんだけどなあ好香は」

あれ？なんかレッドとイエローがこっち見てる。変なことしたかな私？

第3話

「ねえレッド。あの子、途中からしつかり声に出てましたわね」

「ああ。しつかりしてそれで抜けたところあるんだよ好香は。でも不意打ちにあんな褒め殺しされたらブルーもああなるんだな。でも、あの光景からブルーのツインテールをちゃんと見れるなら、やっぱりツインテールの素質あると思うんだけどなあ好香は」
ブルーと好香、2人から少し離れた場所でイエローと俺は小声で話している。好香はともかく普段のブルーなら気付きそうなのだが、その様子はない。

エレメリアンと戦う際は敵からもギャラリーからも恐れ戦かれることが常となつていたティルブルー。それがまさかのティルブルーと津辺愛香の両面から褒め称えられてしまい、完全に表情が弛緩している。正しくにやけ面つてやつだ。

『あの蛮族の舞を見た上でその様子なら本物のティルブルーファンなんですわー好香ちゃん。いや奇特な幼女……でもそうでないと愛香さんは妹に恐怖を植え付けたことになりそうで流石に目も当てられないんですが』

トウアールからの通信に同意する。

例によってエレメリアン出現を感知して出動した俺たちが見たのは巨大なリスース

クウエレルギルデイにお姫様抱っこされている好香の姿だった。

いくらエレメリアンが極力、人間を傷つけないとわかっているとしても、鼻息荒い怪物が気絶している幼女を持ち上げていたら話は別だ。変態の現行犯すぎた。しかも対象がこつちの身内だったんだから始末に負えねえよ。

妹分に手を出されて俺の怒りにも火が付いたのだが、当然ながら隣のブルー^{愛香}はそれ以上だった。

急降下からの蹴りでスクウエレルギルデイの頭を地面に埋めて好香をキャッチしたのがほんの助走。眠る好香をイエローに預けて埋まった怪物リスを引きずり出して、そこから恐怖の本番。普段以上に容赦なく相手を血祭りにあげ出したので、俺はもちろんイエローも何も手が出せずじまいのまま終わってしまった。

とうか俺とイエローはスクウエレルギルデイと言葉を交わした覚えすらない……相手の名前を知ることができただけでも奇跡のような惨状だった。

「正体は知らなくても身内に怖がられるのは堪えるだろうしな。それも普段懐かれる相手だと」

その怒りは正当なものであったのだが、表現方法が如何せん過激すぎだったのも事実。しかも小学生児童の視聴お断りな残酷シーン実演真つ最中のタイミングで好香が起きてしまったので、俺もヒヤヒヤしたんだよ。しかし、好香のキラキラした目でテイ

ルブルーの手を握ってる様子からするに杞憂だったようだ……これも奇跡だと言われたら否定しづらいのが困るが。

「不安があるとすればティルブルーを【愛香みたいにかっこいい】って思ってたそうなどころなんだけどな……」

「あ、そうですね。今の様子を見る限りだとブルーを津辺さんだと気付いてはいないようですけれど」

『確かに。【身近な人間】と【ツイインテイルズ^ロ】を直ぐに結び付けて考えるのは難しいとは思いますが、いえ好香ちゃんくらいの幼女^となら逆にすんなりも……?ふむ。すぐにどうこうはならないと思いますが、何かのはずみで認識攪乱装置^{イマジンチャフ}を突破する可能性は考えられますね。おいおい考えていきましよう』

ツイインテイルズの正体を秘する認識攪乱装置^{イマジンチャフ}。文字通り俺たちツイインテイルズを観束総二、津辺愛香、神堂慧理那だと認識させないテイルギアの機能だが、文字通り人物認識を歪ませる効果であり、例えば最初から正体を知る者には効果が無い。もしかして……?と疑いをもたれるとバレてしまう可能性がある。

俺は最初から母さんにバレていたとか盗み聞きされて自ら嬉々として参加されるという悪夢だったが、愛香と慧理那は家族には明かしていない。それを思うとつかティルブルーの素顔に辿り着いてしまいそうな好香の様子に不安がある。

ティルブルーが受け入れられてるのは喜ぶべきことなのだが難しいもんだ。願わくば好香にはこのままティルブルーにはしやぐだけで済んでほしい。

ただトウアールの言う通り、すぐにばれることもないはずだから対応を練る時間は十分にあるだろう。

『あ——いえ、やはりここは愛香さんにティルブルーとして身も心も鬼になってもらい好香ちゃんを怖がらせてもらいましよう。お姉さんとヒーローのイメージを完全に剥離させ！且つ怯え切った幼女をお隣に住む白衣のおねーさんが優しく癒して憧れの対象を変える!!コード【私色に染め上げろトウアール!】これが完璧です!!!じゅるる』
「なるほど帰ったら身も心も鬼にしてあんたを血の色に染め上げるわ」

『私の声にだけの確に反応した抹殺宣言!?!』

それにトウアールが急がなければならぬのは30分以内に真つ赤な染物と化す己の運命への対策であろう。

「それじゃ今日は寄り道せずには帰らなきや駄目よ!で、しつかり休むこと。わかつた?」

褒め殺しから我に返ったブルーは、帰っていく好香を手を振り返して見送っている。

この様子を見れば世間の評価も少しは変わりそうなのだが、悲しいかなそういう時に

限ってギャラリーもTVカメラも不在での戦闘だった……もつとも、少女への優しい対応の前に過剰殲滅する一幕もあつたので結局は世間に晒されていない方がよかつたのかも知れないが。

『反りの合わない属性で同士討ちにでもなつたんですかね。その場合は指揮官の采配が雑ということになりますが。反応の消失が倒されていたのならそれでよし、逃走していたとしてもスクウエレルギルデイに劣る相手ならツインテイルズが助けた対象を即座に狙うようなことはできないと思います』

更に小さくなっていく好香の背中を見届けながら、トウアールの言葉に俺たちは真剣な表情に変わる。——俺たちが出動した時点では、探知した属性力^{エレメーラ}反応は「2つ」あつた。だが到着した時にいたのはスクウエレルギルデイと既に倒されている大量のアルテイロイドだけだつた。

「エレメリアン同士で戦つたのか……?」

「敵組織の内部争い——ヒーローものでよくあるやつでしょう?」

イエローは特撮ヒーロー知識か推測するが、アルティメギルの内情までは知らないとはいえ今までのやつらを見ているとそういう気配を感じることは無かつた。ダークグラスパーという処刑人はいるが、表立つて権力争いのようなことが起きる連中にも思え

ない。それに――

「でも内部争いに関わりそうなほどの強さでもなかったしなあ」

ブルーの容赦なしを差し引いてもスクウエレルギルデイはそれほど強いエレメリアンではなかった。そのせいで、というとスクウエレルギルデイが哀れだがティルブルーの残虐シヨーが若干ちよつとだけ、より過激に映っていたという面もあった気がする。

「好香に絡んだ変態連中がまだ生きてるっていうならそいつも見つけて血祭りにするだけよ……やつぱり追いかけて一緒に帰ろうかな。偶然会ったふりすれば大丈夫じゃない？」

『いえ愛香さん。心配なのはわかりますが止めた方がいいでしょう。好香ちゃんはいルブルーに好意的ですから、このタイミングで接触すると偶然を装っても蛮族と蛮族をイコールで捉えてしまい正体に気付くかもしれません。異形の変態に絡まれた直後に姉が世間に名立たる人型の暴力と知ってしまうのはあまりに酷です』

「アンタ相手にしてるのと違って優しい姉で振る舞ってるわよあたしは！」

正体バレの可能性を否定するブルー。しかしまだ見ぬ相手の抹殺準備として既にバキバキ腕を鳴らす姿と毎日のようにトゥアルで実演する破壊の衝撃映像を見学させていることが優しい姉のイメージだけでフィルターが保持されているかは怪しいんだよな……。

そもそも「優しい姉」というだけの認識なら愛香より恋香の方が強いような気がする。むしろ愛香は「強い姉」であって「優しい姉」のカテゴリに入っているんだらうか？当の好香自体はどう捉えてるかは分からないが……

『とにかく。念のため、家に着くまでは好香ちゃんを人工衛星よっしよで追跡していますので心配ありません。万が一、不明のもう一体が現れたならすぐ分かります』

「そっか。ありがとう」

『仲間の妹、まして幼女の安全に気を配るのは当然ですよ。あ、今も楽しそうにテイルブルーの真似して飛び跳ねてますね。いやー可愛い』

ブルーの素直な感謝に、トゥアールが冗談めかしてふふんと鼻を鳴らしているのが通信越しでもわかる。やはり普通の（一方的な）殴り合いは信頼の証だというのが、こういう時にわかる。

——だというのに人は何故、過ちを犯すのか。

「グフフ、スカートなの忘れてジャンプする少女サイコーですね。最高画質にして保存しましょううへへトゥアールさんが見守ってますからね好香ちゃんげへへへ」

基地に帰った俺たちが見たのは、幼子を見守るはずの人間が血走った眼でよだれを垂

らしながら超科学の粋を集めて一心不乱に盗撮している現場だった。

「不要なデータは削除しないとねええええ!!」

「スマホ世代にあるまじき物理的な削除おおほあああああ!!」

俺は画面に映る好香妹の比ではない大ジャンプから繰り出される愛香姉の本物の蹴りでコンピュータと人間のデータ記とモニター機を据え物割りされてしまうのを見届けるしかなかった……。

ツインテイルズに助けられて無事、家に帰ると私一人。小学生の私がいちばん早く学校終るんだから当然だけど。リビングに入るなりランドセルを思いつきりソファーに投げ置いても叱られない私だけの時間、けっこー好き。

さて、どうしようか。いつもならTV見たりゲームしたりといろいろ忙しいんだけど、なんかそんな気分じゃない。宿題?もつとそんな気分じゃないよ。

自分の部屋に入ってベッドに転がる。ほんの少し前のいろいろ信じられない出来事をすぐに思い出しちゃう。

「ツインテイルズ……ティールブルーか……」

口について出てくるのはきらいな髪型ツインテールをしてるヒーロー達。だからビジュアルとし

ては好きなヒーローじゃない。

「うふ、うふふふ……」

そのはずなのに思い出すだけで笑っちゃう。ティルブルーを思い出していると特に。誰もいないけど、恥ずかしくなって顔をかくそうと枕に押し付けたら足が勝手にバタバタしてきた。

「かつこよかつたあ……！はっ、いけないいけない！」

また無意識に呟いたセリフに慌てて首を振る。直接見ちゃったからテンション上がったけど、私のちよつと例外はちい姉のツインテールだけ！ちい姉に比べたら他のツインテールなんかどれも同じようにしか見えないんだから!!うん！

「そうよ、ティルブ、ツインテイルズはヒーローだからかつこいいの！いちばんはちい姉!!」

自分に言い聞かせてちい姉とティルブルーを思い浮かべてしつかりと比較する。れいせーに比べればちい姉の方がすごいに決まってるんだから！

（ほら、やつぱりちい姉……でもあんな強そうに見えるツインテール……でもトウアールさんボコボコにしている時はちい姉だって！総二兄がさわってる時ならデレデレして可愛いし！でもティルブルーだってもし総二兄がさわったら……!?）

うぐぐ比べる程にしょーはいが見えない。これがこーおつつけがたし、というやつな

の!?!うう……ティルブルーがかっこいいのは確か。でもちい姉には私がずっと見てきたポイント高いんだよかっこいい以外だともあるもん。でもTV越しでは何度か見てたとは言え直接の一目でそのちい姉のツインテールくらいのインパクトを見せられるとティルブルーが……

「ううう……かっこよかったけどやっぱり悔し……いいいい……いいいい!!!」

いろいろ言ったけど、この一言につきるの!助けてくれた上にちい姉くらいかっこいいとかティルブルーはすごい。

自分の部屋だと落ち着かなくなった私は、今度はちい姉の部屋の前にいる。……ティルブルー本人の前であれだけはやいでした以上、もう遅い気もしてきたけど、何かちい姉が負けてないかくじつな証拠がほしくなったというか。

勝手に入るのはいけないしちよつとドキドキするけど……これも家に1人だけの時しかできないことだ。用心してそつとドアを開ける。そりゃ家には誰もいんだけど。

「ちい姉だと家にはいないのに気付いても不思議じゃないんだよね……」

昔からちい姉を驚かそうとして成功したことがない。最初は私が分かりやすいのかと思っただけど、ちい姉がおかしいだけってすぐにわかったんで細心のちゅーいが必要だ。ちい姉が野生どーぶつだって気付かせてくれたの総二兄も最近はずいぶん

気配がどうか言ってるの聞いたしあれだけ……

「と、そんなことよりも……うーん、なに探したらいんだろ？」

さてどうしよう。ここそと勢い込んで入ってみたものの、これ以上することがないや。ちい姉〉ティルブルーだとしよーめいできるアイテムとはいったい……？

「窓の向こうが総二兄の部屋つてことと、ちい姉が何か所か素手で壁凹ませてるくらいしか変わったところつてないよね……」

それでどうティルブルーと比べればいいのか。もつとガサガサーつと探したいけどあんまり置いてあるもの動かすと勝手に入ったのちい姉にバレちゃうし。怒ったちい姉と怒ったティルブルーを比べてみる、なんてゆーのは人間ができることじゃないからね。

手詰まりで部屋をぐるぐるしていると、姿見に映った自分が目についた。私は髪を結んでないからどっちつてゆーと、おねーちゃんに似てるなんて言われるけど、ちい姉にだつてちゃんと似てるんだよ。おもかげがあるつてやつだ。

「ちい姉とティルブルー……どっちもかっこいいんだよね」

私がかっこいいと思つた人はどっちもツインテールだ。そういえばどうして私はツインテールがきらいつて思うようになったんだけ？

「私も……ツインテールにしてみたら」

——ちい姉やテイルブルーみたいになれるかな？

ほんの気まぐれだと思う。左右で髪をつまんでみた。鏡に映るツインテールもどきの私は……テキトーに作ったのを抜きにしても2人のようには見えない。

「ま、そうだよね」

また似合わない真似しちやつた。そう思つて髪から手をはなそうとしたら

「わ、なに？」

ポケットで何かが光つた。服ごしだけど虹色の光がもれてきてる。

「なんだろ前に映画館でもらつたライトとか出し忘れてたのかな……？」

正体を確かめようと手を入れたら堅いものに触れる。手ですっぽりにげいれそう、大きさはそんなでもない。やつぱり映画でもらつたライト？

「トウアールール!!私部屋に忍び込んで何して——あれ!」

「ひやあああああああ!!」

どかーん、つて勢いよく開け放たれたドアと怒鳴り声にびつくりしてポケットから手を引つ込めちやつた。ちい姉、帰つてきたの!?

「な、ななによちい姉!?!ノックもしないで入つて来て!」

私はちい姉とちがつて気配なんかわからないんだからね。部屋に入る時はれーぎつてゆーのを守つてよ!!

「あ、ごめん。気配を感じたからってつきり小細工しにきたトウアールだと——そうよあたしの部屋じゃない!!」

びつくりしてちい姉に文句言っただけそうだ、ちい姉の部屋だったここ……やつべ。

「好香あくあんたまさか誰もいない時、いつもあたしの部屋に……う？」

うわ、こつち見るちい姉の目がちよつとキツくなってきた。今日だけじゃないじよーしゅーはんだと勝手に判断されてるまづい。……じよーしゅーはんなだけどね。

どーやって切り抜けようこれ。

「えへ☆」

「つまりあたしの勘違いじゃないのねわかった」

もーちよつと信じてよかわいい妹でしょ、ちい姉のはくじよーもの。のしのしと近づいてくるちい姉にごまかすように妹スマイルしてみたけどダメだこれ逃げなきや。

(逃げ道……ドアはちい姉のうしろだし……落ちつけ落ちつけ。すれ違いにちい姉の手をよけられたらいいける!)

「はあ、ほんつと人の気も知らないでこのチビスケはく〜」

じりじりと後ずさりしながら逃げるさんだんを整える。その間にもちい姉は近づいて、いよいよ手を伸ばしてきた……ここだ!

「お」

頭を下げてダツシユ。ちい姉の手は空振り。ちらつと目を丸くしているのが見えた。ふふん、どんなもんよ！ゆだんたいてきだちい姉。

「ふん、十年早いわよ」

「ふぎやー！」

鼻で笑って足引つかけられた……体がふわつと浮いたと思つたら転ぶ前に捕まつて脇に抱え込まれました。手足をばたばたと動かしてもがいてみたけどダメだ。それに見下ろしてくるちい姉の顔見たら動けなくなつた。

うう、ちい姉相手でむぼーだつた。テイルブルーの大暴れ生で見たせいで自分も逃げるくらいならできると思つたのが間違いだつた……

「度胸は買うけど、これは往生際が悪いつてのよばーか。つたく何してたか知らないけど散らかしてないでしょうね？」

「ごめんなさい……」

ちい姉の手が顔に近づいてくる。うう、ちい姉のデコピンめちやめちや痛いのに……

「……………」

目をつむつて痛さに備えてると何も起きない。そーつと目を開けたら構えたままでちい姉の手が目の前で止まつてる。上を見るとなんかちい姉がじつとこっち見てた。

「いいわ。今回はあの事でチャラにしてあげる」

「へ？」

溜息ついたちい姉は私の頭をぽんぽんと撫でるだけだった。なんで？ちい姉がお咎めなしにするとか珍しすぎて変な声が出ちゃった。なんかファンサがどうかかぶつぶつ言ってるのも聞こえたけど何のことだろう？とにかく助かったけど。

「ちい姉、変なものでも食べた？」

「気を付けないと追加分がチャラにならなくなるわよ。あーそうだ今日はベッドに放り込んで夜更かし許さないから、ちゃんと休みなさいよ。もし起きてたら今度こそキツイのお見舞いするからね」

部屋から運び出されて夕食になったら呼ぶから寝てろ、って自分のベッドに投げられて、次に私のランドセルまで運んできてくれた。

「なんか今日のちい姉優しい……？」

——この日はツイーンテイルズに会ったこと、いつもより優しいちい姉の方が気になって、ポケットのの中身についてはすっかり忘れて寝ちゃった。

第4話

——誰？

『——か。』

『——し……か。』

——誰か呼んでる？

『——好香。』

——私が呼ばれてる。

頭は少しぼんやりとしてるけど、目を開けた私はよく知ってる場所にいた。お隣の総二兄のお家、喫茶店『アドレシエンツァ』。その席のひとつに座ってる。そしてテーブルを挟んだ向かいの席にも誰かいる。

【誰か】って言ったけど私の目には人の姿は映ってない。目の前にいるのは、ふわふわ浮いてる虹色に光る球だった。

「私を呼んだのはあなた？」

でも私はそれとお話してる。

『そうだ。』

うなづく代わりみたいに光がちかちかと明るさが変わった。聞いたことのあるような声。知ってる、最近も夢で聞いた声。どこか温かさのある声。

『好香が少し思い出してくれたから、ここまで繋がる事ができた。』

「ずっと『私のきもちを思い出して』って言ってたよね。でもまだ何のことなのかわからない」

『そうか……だがあまり時間は無いんだ。』

光から聞こえる声が少しさびしうになって——すぐにキリツとした調子に変わった。

『私は好香の力になる為に来た。キミの住むこの世界を、多くの世界と同様の静かな滅びを与えない為に。』

話ながら光が座席から離れていく。追いかけて手を伸ばしたけど届かない。

——待って

声も届かなくなってる。

『キミがしてくれたことは忘れない。そして侵略者と戦うことは私の使命でもある。』

——ねえ待って

光の声もだんだん遠くなつていく。

『好香の世界を守る為に戦いたいその為に——』

言葉の最後は聞こえなかった。ただ、虹色の光の中に銀の人影が見えた気がした。

『まだ夢の中では言え、元気な姿のキミと話せて嬉しい。』

——あ、私、服着てないや

「まだ行かないで！」

「いったあ!!」

「ふえ?」

手を伸ばしたらなんか堅いものに当たった感触と、さつきまでと違うはつきりした声
が聞こえた。てゆうかさつきまでの声じゃない。今度は誰?

「あれ?ここどこ……?なに話してたんだっけ……?」

体を起こしたら私のベッドだった……ちい姉がおでこ押さえてもだえてる私の部屋
だここ。じゃあ誰かと話してた気がするの夢……?なんか大事そうな話のよーな感
じも残ってるけど、うむむ?

……あれ、今、部屋に変な景色なかった?

「えっ？」

確認するより先に私の顔の前が暗くなった。中指丸めたちい姉の右手？

「このチビスケええ……さっさと夢から覚める！」

ゴツンって絶対デコピンじゃない音が私のおでこからして、衝撃でベッドに引っくり返った。

「いつっ………たあああああああああああ〜〜〜〜〜い！！！！！」

頭が割れるかと思うほどめちやめちや痛い。馬鹿じゃないのちい姉！！！！！！

「痛いのはこつちよ……とつと起きて顔洗ってきなさい！」

いきなりひとのおでこにこんな真似してその言い草はなんなの!? おでこがじんじりする……泣きそう。

「いたあいいい〜……いきなり何するのちい姉のばか!! うう、おねーちゃんーん！ちい姉がひどいんだよ〜〜〜!!!!」

リビングにいるはずのおねーちゃんのとこに走る。昨日はなんか優しいと思つたのに！朝からひどい!! おぼえてろちい姉めえ。

「いつつ………なによ、こんな一発打ってドタバタ騒げるなら元氣そうね」

なんかおでこ押さえたちい姉が言つてる気がしたけどそんなの知らない。階段かけおりにきた私に目を丸くしてのおねーちゃんに飛びつくのが先だもん。

「それでそんなむくれてんのか好香。どれどれ……うわ、まだ赤いな。どんだけ力いれたんだよ愛香」

「人聞きの悪いこと言わないでよ、トウアール相手じゃあるまいし割れないように加減してるわよ。こつちだつて不意打ちでおでこにちようど掌底もらつてまだ赤いんだから。あーもう学校行くの憂鬱……」

総二兄とちい姉が、私の赤くなつたおでこを見ながら話してる。ちい姉はジト目で私を見下ろしながらゲンナリしてるけど、それは私も同じだもん。ううん、私の方がぜつたい赤くなつてるし。ちい姉の方がどれだけ力強いと思つてんの。

「私だつてゆううつだよ。私はわざとじゃないのにちい姉、私より力入れたでしょ。スーパーゴリラ」

すね蹴つてやる。これくらいやつて同じくらいだよ、ぜつたい。やった、きれーに入つてちい姉が跳ねた。ふふん、たまには思い知つたかちい姉め。

「あいたあつ！こんの、昨日の今日だから優しくしてたら調子乗つて……」

「ふんだ。優しいつてゆうのは、おねーちゃんみたいな人だもん。ちい姉なんか服着たゴリラでじゅーぶんですよーだ」

ちい姉が厚かましいこと言ってる。寝起きにデコピンしただけのちい姉と、ちゃんとおでこ冷やしてくれたおねーちゃんと同じや、どっちが優しいかなんて一目りよーぜんじょ！

やっぱりもう一発くらい蹴ってやるちい姉め。あ、よけられたゴリラのくせに。

「よーし、もう一発お見舞いされたいわけねこのチビスケー！」

私を捕まえようと伸ばしたちい姉の手を飛び退いてよけた。ふふん、広い外なら昨日の夜みたいになんか捕まったりしないもんねーゴリラちい姉。

「ナマイキな……」

「まあ待ってって愛香。寝起きにぶたれたら好香だって不機嫌にもなるさ。だろ？ちよつとくらいは手加減してやれって」

追いかけてこようとするちい姉の前に総二兄が立った。ほーら見ろちい姉め。総二兄だって私の味方だぞーうらやましいでしょ。

「そーじまで好香に甘いんだから。子供相手なんだから、じゅうぶん手加減してるってば。本気だったら割れてるわよ」

「割れなきやセーフって、お前の優しさの基準はどこなんだよ……好香も、面白くないのはわかるけど愛香を怒らせるな。偶然でも愛香の顔打ったのは悪い、だろ？今だって蹴りつけるのはどうかと思うぞ。わかるだろ？」

むぐ、私にもおせっきよーするのにか総二兄。わかるけど、そう言われてもモヤモヤするものはするでしょ！私はまだこーせんするんだから！

総二兄がちい姉をなだめてる隙にトウアールさんの後ろに隠れた。目には目、ちい姉にはトウアールさんだ。揺れる白衣からちい姉に向かって顔だけ出した。

「べーっ！」

「よーし。トウアールが盾になると思ったんなら、盾の脆さを教えてあげるわチビスケ」

「ちよ、好香ちゃん蛮族の盾にしないででもこんな可愛い幼女にしがみつかれたらこの身を懸けて立ち向かってしまう！」

私をつまみ上げようと迫ったちい姉の手を、トウアールさんが華麗に白衣で受け流した。その一瞬に私も抱き上げて、わ！後ろ向きに宙返りしてちい姉の手が届かないところまで離れた。やっぱりトウアールさんも凄い人だ。

「トウアールさんやっぱりかっこいいいいーっ！大好き!!」

「ひいえええ朝から幼女が抱きついてくれるご褒美!!紛れもなく今日は吉日ですよラツキデー!!そうですとも好香ちゃんの為ならトウアールさんはゴリラの突然変異した蛮族には負けませんよ!!」

トウアールさんに抱きしめられたら、やわらかくていいニオイがする。さすがちい

姉のライバル。このおねーさんも好き。抱かれたままハイタッチしてたら、ちい姉が悔しそーにギリギリと歯ぎしりしてる。

お、総二兄がちい姉を落ち着かせようとツインテールをさわってる。直ぐおとなしくなってきたちよるい。

「ふへへ幼女から飛びついてくれるとか何時ぶりですか……しかもこんな極上のやつがよお……抑えろ抑えなさい私……とりあえずちよるい赤くなってるおでこペロペロしてあげて気持ちを鎮めて……」

「そのツラを妹に近づけてんじやねえええええ!!」

「ごああああああああああ幼女から頼られたのに悪党扱いされる理不尽ん!!!」

「トウアールさー……ん!!!」

なんてことだトウアールさんが何かぶつぶつと息荒くしてつぶやき始めたと思ったら、ちい姉の膝蹴りで地面に3回バンブドしてからくずれ落ちちゃった。膝蹴りの威力で人間が3バンブドするってどうやればいいの……ゴリラなんてもんじやないでしよちい姉。

私は、にぎってたトウアールさんの白衣に引つ張られて空中に飛ばされた瞬間に襟首つかまれて、ちい姉に持ち上げられます。なにこれ格ゲーの浮かし技みたいなのをなんで普通にできるのちい姉。そーつとちい姉の顔色うかがってみたら……見るん

じゃなかった。ちい姉は殴った分だけちよつとスッキリしたようにさわやかな顔して怖い。その笑顔のまま持ち上げた私に目線合わせてくる怖い。

「さーて可愛い好香ちゃんに優しい優しいちい姉から質問です。10数えるまでに謝れば許してあげる。どうする？」

めっちゃ怖い。総二兄はあきらめた表情で首を横にふつて、抵抗するなとうったえてくる。うん、これ以上はやばいのわかつてる……ここからちい姉に本格的に喧嘩売れる度胸は無いよ怖すぎて泣きそう。

「……………めんなさい」

ちい姉が数えだすより先に謝るしかなかった。だって仕方ないでしょ本気で怒ったちい姉めっちゃめっちゃ怖いんだからね!!

初等部の昼休み。

おでこ赤くして学校行けば、それについてきかれるのは当たり前なわけで。時間のある昼休みには自然と詳細を聞きたがる友達との会話になる。私だって、こーなったら友達にぐらいはちい姉の文句言ったっていいでしょ。

昼食の話題に今朝の出来事を話せば、返ってくる答えはだいたい2つ。

「好香ちゃんのお姉さんってあのツインテールの人でしょ？そんな怖い人に見えないの
に意外〜」

という知らない意見。

「津辺のお姉さんって伝説の【小魔王姫】サタンプリンセスだろ。それに蹴り入れたとか正気かよ津辺
……」

私の行動を勇氣ではなくむぼーだと引いてしまう、知ってる意見。

どっちも正しいんだけど私としては

「ちい姉は動かないと美人なのに荒っぽすぎるの！私はちい姉とちがつて熊とかやつ
つけられないんだから、同じレベルで考えないでほしーと思わない!?そんなかつこいい
のちい姉くらいなんだから！ねえ！ふっーそうでしょ!？」

という腹立たしー所業についていろいろつみ重ねがある。今日だけじゃないんだか
ら。ちい姉は美人で強くてかつこいいくせに妹の扱いが雑なんだもん。こーぎしたつ
ていいでしょ!？」

「姉自慢か」

「不満なのか惚気たいのかどっち」

「好香ちゃん怒ったテンションでよくそれ言えるね」

だというのに、この周りの声はなに解せぬ。

ちい姉への愚痴をクラスメイトに褒めてるとしか受けとつてもらえないまま午後になった。私の友達はやんとひとの話聞いているの？まったく。

こそつとスマホを見ると、ツイントイルズが海外で戦つてるなんて速報。めずらしく海外にエレミアンが出たのかな。

ま、そんなことは関係なく私は掃除の時間。面倒なことに今週はゴミ捨て担当なのでゴミ袋持つて移動中。

『好香、それ以上、進んではいけない』

「え？」

声が聞こえた。

『気を付けるんだ。この先には危機が迫っている！』

また聞こえる。今朝、夢で……その前にも聞こえたのと同じ声。今まででいちばんはつきり聞こえる。

「ねえ、あなた誰なの？どこにいるの!？」

声は先に進むなど言ってるけど、声の正体が気になる私は足を進めてしまった。ここ
の校舎の角を曲がればグラウンドが見えるゴミ捨て場が続く道。

「あ……」

そこには——エレメリアンがいた。

体つきは人間みたいだけど、もつと大きくて白くて羽のある鳥っぽいやつが立って
る。上を向いてるけど空か校舎の上の階見てるのかな？

なんで二日続けて会うのとかツイントイルズは海外ってニュースで言ってたのにな
んでこっちだけ初等部の校内にいるのとか疑問はあるけど、いちばん気になることは

「あなたが私に話しかけてたの？」

ずっと私に話しかけていた人？かどうかってこと。声をかけたら、そのエレメリアン
はゆっくりとこっちを向いた。

「ム……このあたりの女兒はほぼツイントール属性が拡散されたと思っていたが珍し
いな」

私が聞いてた声じゃなかった。人？ちがいつてことはエレメリアンだし防犯ブザー、
はランドセルにつけたままだしスマホから通報……まず先生呼ぶ方がいいのかな。

「騒がれると面倒なのでな——お前の属性力エレメリアからいたただこうか」

『いけない！走るんだ好香！』

ポケットからスマホを出してたら、鳥エレメリアンの声と探してる声が聞こえて——景色が回って、次の瞬間は私の目に映るのは空だけになった。

「下から眺めるのも悪くはないが……やはり空と風の中で見るのが絶景よな」

右足をつかまれて逆さまに空を運ばれてる。自分の状態を理解するころには学校は見えなくなってた。

「——っ！——っ！！」

スカートめくられてじっとパンツ見られてる気がするけど、ものすごいスピードで飛ばれて声が出せないし体が痛いし高すぎの速すぎで怖くてそれどころじゃない。なんかしゃべってるのもよく聞こえない。

「アルティメギルに見つかると面倒なんですぐに属性力を食わせてもらうから案ずるな。直に恐怖も感じなくなる」

風でよく聞こえないのに言ってる事もよくわからない……でも、なんか怖いことされるのはわかった。昨日のスクウエレルギルデイはきもかったけどそれとは全然ちがう怖さ。向かい風に関係なく体が震えてきた。

(やだ、怖い……！助けて誰か……！テイルブルー……ちい姉!!)

頭に浮かぶのは強くてかっこいいと思った2人。でもどっちもいないしこんな空の上で——もう駄目だ。こんなことならちい姉に意地悪するんじゃないやなかった。

「そうはさせん！」

ぎゅつと目をつぶってたら、すぐそばであの声が聞こえた。そしたら昨日ポケットにいたまま確認してなかったライト？が昨日よりも強く光りだしてた。

(これ、夢で見た光と同じ……)

夢に出た光の球と同じ虹色の光。それに驚いた鳥っぽいエレメリアンが移動を止めた。

「なんだこの属性力は……グオオツ!!?」

「トオツ！」

光から銀と赤2色の脚が飛び出してエレメリアンの顔を蹴り飛ばした。思わずエレメリアンが手を放して私は自由になったけど、これってつまり空の上に放り出されたわけ。

「お落ち、ひいつ——あれ?」

でも、身構えてどうにもできなくて、落ちていく前に受け止められてた——銀と赤2色の腕に。

虹色の光から出てきたのは銀色に赤色が混じったロボット？ 鎧？ みたいな人間らしいの何か。私を支えてくれてる腕も体をあずけてる胸も金属ぽくて硬い。

「でも温かいなあ……」

「もう大丈夫だ好き。」

温かい体と声が安心させてくれる。

「キサマアアア……よくもこの【ロックチョウデリット】の顔を……たかがアルティメギルのエレメリアンの分際で!!」

鳥のエレメリアン—ロックチョウデリットが睨みつけてる。おもいつきり顔蹴られてものすごく怒ってそう。

「私はアルティメギルではない。そしてエレメリアンでもない。」

でも私を優しく抱いてるエレメリアン？ は相手が怒ってるのにはまるで反応しないでエレメリアンじゃないって訂正した。そして自分が誰なのか堂々と名乗った。

「私はマグニフィセントエージェント。属性勇者エレメリオン!!」

……………助けて

もらった。助けてもらったんだけど、あとから思い出すとね。なんか全然わけわかんない

いのが出てきてたんだなあって気がする。

第5話

ツインテイルズの——トウアールの開発したエレメリアの探知システムは基本的には活性化した属性力を捉えて反応している。それ故に、本格的に活動していないエレメリアなどは属性力が抑えられている状態ある為、探知が難しくなる。そう、例えば陽月学園初等部の校内でただ突っ立っていただけのエレリアンなどは——

『ヴォルテックジャツジメント——————ツツ!!』

「いやーイエローの完全脱衣は見事ですな。……これが小さい慧理那さんのままだったら最高でしたよねえふへ……慧理那さんが使うと分かっていれば。分かっていけば！ 巨乳属性なんかテイルブレスに組み込まなかったの!! どうせ愛香さんが巨乳になるわけもなし理論的にも見込み薄だったしテキストに組み込んだふりして他の属性玉にすればよかったあああ!!」

全ての武装を束ねた合身巨大砲の威力をその身を押しされたテイルイエロー必殺の蹴りがエレリアンを粉碎する光景をモニターしながらトウアールは己の過ちを悔いる。

『聞こえてんのよこらああああああ!! 帰ったらあんたを薄切りにしてやろうかああ!!!!』

「おああああああマイク切るの忘れてたああああああ!!」

そしてコンソールをがんがんに叩いて嘆いて過去自分を恨んでいると数分後の未来の自分が殺意に晒されて椅子から転げ落ちた。

いかなる属性だったか今回のエレメリアンは夜の海外に現れたというだけで実力的にはさして特筆することのない相手だったので割愛される。

トウアールが仲間の殺意とは別で驚愕することになるのはこの直後であり――

――その棒立ちで小学生のスカートの中をガン見していたエレメリアンーロックチヨウデリットが自身を目撃した幼女^{好香}を獲物と定めて動き出したのは、ちょうどツイインテイルズが海外であるエレメリアンを撃破した頃。

「他の場所にもエレメリアン反応!? こんな立て続けに……なんですこの移動速度!」

そして白い怪鳥を活性体^{シルエット}とするその変態は並の飛行型エレメリアンをもつしな

い高速飛行を可能とする存在だったがゆえに、探知システムが2つの大きな属性力反応を捉えた場所は陽月学園からかなり離れた上空だった。

春の始めから、地球は変態な侵略者の脅威にさらされていた。人々の笑顔が奪われそうになった時、遙か遠い異世界の科学者^{痴女}から力を授かり、彼女らはやってきた。ツインテイルズと呼ばれる頼もしいヒーロー達が。

そして今——異世界から新たに一人の勇者が地球へと現れた。その名は…

「私はマグニフィセントエージェント。属性勇者エレメリオン!!」

エレメリオン。そう名乗った赤と銀の超人？は好香^{わたし}を抱えたまま白い鳥のエレメリオン——ロッククチョウデリットと向き合ってる。

(ちい姉とはぜんぜんちがうけどかっこいいなあ……!)

何が起きてるのかよくわかんないけど、こんな高い空の上で怪物がいるのに不思議ととつても安心する。

「アルティメギルだけでなくお前たちまでこの世界に現れるとは。属性力^{エレメーラ}より生まれ

し魔獣よ。この私が好きにはさせん！」

「属性勇者あ？小賢しい、キサマの属性力エレメーラも纏めて食らうまでよ!!」

エレメリオンの迫力にも怯まないでロックチョウデリットは両手とくつついてる翼をバサツと広げるとすごいスピードで向かってきた。

「好香、私にすっかり掴まっているんだ。」

「う、うん」

けど、改めて私を抱えたエレメリオンは飛んでくるロックチョウデリットにも焦らない。

「トオツ！」

「ヌウ！」

ぶつかると思って私は目をつむったけど、エレメリオンは空の上でまたジャンプしてきれいに避けちゃった。すごいすごい！

「では、こちらからもいくぞ!!さらばだ！」

「え」

私とロックチョウデリットの声が重なった。エレメリオンは私を抱えて、ロックチョウデリット置いて飛んで行っちゃう。なんで!?!今のつてやつつける流れじゃないの!?!

「おのれこの私を愚弄する気か……っ!!逃がさんぞくくくくくッッッ!!」
 後ろから凄いい怒ってそんな声が聞こえる。どーするのあれ。

エレメリオンは私をすっぽり包んだ大きな光の球になって飛んでる。夢でお話してた光の球がもつと大きくなつたみたいなやゆだ。そのせいかすごいスピードなんだけど全然苦しくない。でも今はそれよりも言わなきやならないことがあるよね。

「なんで!?なんでなんで!?あいつやつつける感じじゃなかったの!?!」

さっきのぜったい怪物やつつけてくれる感じの言い方と態度だ!たじゃん。なんで逃げてるの。

「残念だが私の活性体シルエツトは22秒しか結晶しない。」

「ぜんぜんダメじゃんそれ!!」

言葉の意味はよくわかんないけど、あんなかつこいいこと言っちゃダメな感じなのわかった。ぜんぜん、大丈夫じゃないよね!?

「スカーーーーーッッッッッッ!!」

なんか変な叫び声が後ろから聞こえて振り返ったらロックチョウデリットがめっちゃ怖い顔で追いかけてきてる。さつきめちやめちや馬鹿にされたと思ってそうだったも

んね。

「めっちゃ怒って追っかけてきてるよ!!どうするの!？」

「スピードはヤツの方が上だ。近く追いつかれるだろう。」

「普通に言わないでよー!!!」

エレメリオンが当たり前のようにダメなこと言うからさつきからツツコンでばかりだ。うう、こういうツツコミは総二兄だと思つてたのに……

「好香、これを握るんだ。」

頭を抱えてると手に光が集まってきた、てのひらに小さいライトみたいのが出てきた。あ、これがポケットに入ってたやつだ。

「好香と私の【属性共鳴結晶灯】だ。それで私に力を貸してほしい。」

「まってまってまって。さつきからかつこよさそうな言葉の意味がぜんぜんわからないからないからまって!？」

「説明している時間は無い!このままでは私の結晶限界を迎えて好香が空中に放り出されてしまう。急ぐんだ!」

装甲結晶化認証は――【エレメライズ】――
!!!!???

「ええええええええええええええええええ!!!!」

めっちゃ怖いこと言われた。もー反応が速いつかない。このままじゃ空に放り出され

るって、そんなの力を貸してほしいってやるしかないじゃない!? ヒドくない!?

エレメリオンはエレメリオンでなんですつと落ち着いた態度でダメなことと言えるの

……

ううう……なんでこんなことに。こんなことなら朝にもつとちい姉に甘えとくだった。いや昨日だったらちい姉のお菓子勝手に食べちゃったことも許してくれたかもしれないしもつといういろいろしておけばよかったかなあ。

こんな時だつて困ったらだいたい力づくでいけるちい姉がむしょーに恋しいうらやましい……これがそーまとーつてやつ?

「なんかもう早くちい姉に会いたいよお……」

「必ずキミの力になる。さあ早くエレメライザーを握ってくれ。私を信じてほしい好香。」

「うぐぐ、もーわかった!やるってば!!信じるからねエレメリオン!!」

エレメリオンがどんどん話を進めてくる現実とーひするスキもくれない……ええいこーなつたらヤケだ!なんか思ったのちがつてに頼りなさそうだけどエレメリオンが助けてくれたのはホントだし夢で会ってる時も悪い人?じゃなかった。

ここにちい姉はいないけど、私だつて津^ち辺^い愛^姉香の妹だ。ちい姉のトンデモのーきんを見習うしかない。

エレメライザーを真正面に構えてゆないとこーど？ってゆーのを叫ぶ。

「え、エレメライズ！」

——コードを認証したエレメライザーが今まで最大の光を放つ。それは好香を包んでいるエレメリオンの光球を更に巨大な虹色の光となって包み込んだ。

『エレメライズ！』

先程の姿とは違う、半透明になったエレメリオンが好香の全身に重なり——粒子となつて彼女の身を覆つていく。両足から腰、両腕の順に他よりも多量の粒子が集まり金属質の装甲と成す。頭部に角を思わせる2つの金属パーツが装着され——続いて伸びた髪がそのパーツに纏められる。エレメライザーを包んだ丸い水晶のようなパーツが胸に装着されると、半透明だったスーツが装着者のイメージ通りに青と銀に染まった。

周囲を覆う虹色の光も同様の2色に変わり、もう役目は終えたと告げるように弾け飛んだ——

えれめらいざー、ってゆーやつのが無くなつて目を開けたら——最初に見えたのはすぐそこまで来てたロックチョウデリットの頭。ぶつかるぶつかる!!

「やだ、来ないでっ!!」

思わず両手を突き出したら、ドカンってすごい重いものがぶつかつたみたいな音がして、手がちよつと痺れた——私はロックチョウデリットの——怪物の突撃を受け止めた。

「うそお……」

「そ、そんな馬鹿な!!?」

私とロックチョウデリットどつちもが信じられないって声を出した。でも、ぼーぜんとしての自分自身を置いてきぼりにして、私の体は勝手に、掴んでる鳥頭を跳び箱みたいに押し込んでロックチョウデリットの背中に飛び乗つてた。

「き、キサマっ！ふざけるな!!」

「うわ、わ、わ！ちよつと動かないでよ!!落ちちゃうでしょーばかー!!」

当然、ロックチョウデリットは振り落とそうと暴れ出したんだけど。そんなことされるからバランスくずしちゃういそうで、落つこちないようについ首をぎゅーつと掴んだら思つた以上に力が出せてしつかりと相手を捕まえて乗ることが出来ちゃつた。

おお……！掴んでる首がメキメキ言つてる。凄い力出せてる私。

「アガッ……グエエエエ……!!」

苦しそうな鳥みたいなの声出してるけど、仕方ない。なんで首掴んだって言われたら、その、ちい姉がよく私を捕まえるのに襟掴んだりするからつい……うん文句ならちい姉

に言つてよねちい姉がお手本だから多分……

押さえつけることができたなら、ちよつと落ち着いてきた。そうするとなんかこう、エレメリオンと一つになつてゐる感じがする。

22秒だけとか頼りないこと言つてたけどロックチョウデリットを押さえ込める腕とかさすがつてゆゝか見た目通りヒーローっぽい力あるんだねエレメリオン。

……あれ？この手、さっきのエレメリオンと形が違うようなあれ……？向かい風で引つ張られる髪もいつもとなんかバランスが違う、あれ……!?待つて。そもそもエレメリオンの髪つてトゥアールさんみたいなストレートの銀髪だったよね。なんかちらら目に入つてゐるの水色ほいし左右で重さを感じるんだけど、え……!?

「え、え？なにこのかつこ？私エレメリオンに変身したとかじゃないの!？」

てつきりTVのウルトラメロスみたいにエレメリオンと一つになつて3分だけ戦えるようになってもらった、みたいなことだと思つてただけ——これ私がツインテイルズみたいになつてゐるう!?

銀色の手に映つたの見たら割と鎧?が大きい!

しかもツインテールになつてゐる!

やつと気づいたの?つて言われるかもしれないけど気付く余裕なんかさつきまでなかったんだからね!

『そうだ好香。キミは私と一つになっている。キミの属性こころで私の属性力ちからを使う。この世界の守護者になったんだ。』

頭の中にエレメリオンの声が響いてくる。かっこいい声でかっこよさそうなこと言ってるけどそーじゃなくて！

「なんで私がが 変身してるの!? 私でで エレメリオンが戦えるってことじゃなかったの!?!」

『世界はそこに住む者が守らなければならない。私はあくまで危機が訪れた世界の人々の剣であり盾なのだ。だからこうして私はキミの力になることができた。』

かっこいい声でかっこいいこと言ってるけど「力になれる」って助けるとかじゃなくてそのままの意味!?!それずるい!!ちよっと落ち着いたって思ったけどもうぜんぜん落ち着けてないや私だって落ち着くの無理でしょ落ち着かなくていいち姉くらのーきんにはまだなれないってばちい姉助けて。

「それになんでツインテールにしたの!?!」

『私は【髪変え遊び属性ヘアレレッシュ】。変身者の属性エッセントと属性共鳴こころすることで望む髪型エレメーラの属性力を最大限に引き上げ——』

「だからそれまって! わかんない言葉が多すぎてわかんないの!!」

専門よーごが多すぎてさっぱりわからない。もっと初心者の9歳に分かるように言ってほしい。ただでさえこんらんしてるのに頭パンクしそう。

『つまり変身するとまず好きな髪型になるんだ。』

「私ツインテールきらいだよ!？」

わかりやすく言われたら言われたでなつとくできないことを言われるんなの。私は総二兄にも刷り込まれずにツインテールにしてないんだぞ。

『好香、自分の属性こころを偽つてはいけない。昨日、好香が本当の気持ちを思い出し始めたから私はこうして一つになることができているんだ。』

「う、うそじゃないもん! 昨日のはただ——」

「グエエ……スカートを脱ぎ捨てた上に人の上で何をごちゃごちゃと……スカー……ツツツ!!」

エレメリオンと話していてロッククチョウデリットがこっちをにらみ上げているのに気付かなかつた。

一つ咆哮したロッククチョウデリットが首を掴まれたまま急旋回して振り落とそうとしてくる。その勢いでロッククチョウデリットを中心に竜巻が起きている。

なにこいつ鳥のくせに力強ずぎない!?

「きやあああああああ!!落ち落ち落ちる落ちる!!」

なんとか止めようと首をつかんでる手にもっと力を込めたけどロックチヨウデリツトは止まらない。だんだんと体が浮き上がってきて、もうふり落とされないようにしがみつくしかできない。どーなってるのついさっきまでは締めつけて押さえられてたのに。

『いけない! 属性共鳴エレメライズの出力が下がっている!好香、キミの心が——』

「スカー——————ツツト!!!」

「きやああああああああああああ!!!」

大きな竜巻を起こしてさんざん旋回されながら急降下して急上昇。ジェットコースターどころじゃない動きと風圧にエレメリオンの言葉を聞き取れる余裕はない。

とうとう私は振り落とされて地面に激突した。

第6話

エレメリオンだとか名乗った妙な精神生命体が変身させた獲物^好だった幼女^香をようやく振り落としたロックチョウデリットは首を抑えて片膝をついた。

「ウヌ、グウ……あの妙なエレメリアンもどき、人間の小娘にいったい何を仕込んだ……!?!」

強固な外装甲に覆われている自分の首がはつきりと少女の指型にひしゃげている。何やら力が緩んだ隙に叩き落とすことはできたが、それがなければ首がへし折られている可能性もあつた。まるで上級エレメリアン、或いは異世界にいる数多いツインテールの戦士のような力。

だがあの幼女はツインテール属性など感じられなかった。そんな人間にエレメリアンのような精神生命体が融合して属性力^{エレメラ}を扱う術を与えるなど初めて目にするものだった。

「アルティメギルが珍しく手を焼いているとは聞いたが、この世界はどうなっているのだ……!?!」

相手は起き上がってこないが、未知の存在を警戒したロックチョウデリットは追撃を

起こせないでいた。

「いいったああい……！」

ロツクチヨウデリットにふり落とされて思いつきりお尻打った。めっちゃいたい。ちい姉に叩かれ……たほどでもないけどいたい。

アスファルトの地面がバキバキに割れてるのにそれで済んでるのが不思議だけど。

『^{エレメライズ}属性共鳴によって私は好香の防護スーツ強化装甲として完全結晶している。余剰エネルギーも^{プロテクトスキン}防御膜として常時全身を覆っているので滅多にダメージは受けないはずさ。』

頭に聞こえるエレメリオンの声は、相変わらずよくわかんない単語が混じってるけど、なんかすごい力で守られてるってことでいいのかな。

『だが、好香が自分の属性きもちに正直まことにならないと出力は下がる一方で危険になってしまう。私は好香の素直な気持ちから属性力エレメーラを引き出し増幅するんだ。』

「そ、そんなの急に言われても私ツインテールはきら——好きな髪型って、そんなの聞かれても考えたことないもん……」

急に「ツインテールが好きはなはず。正直になれ」って言われてもこまる。きらいなはずだもん。

それにツインテールにしなかっただけで好きな髪型とか意識したことがないのもホントだし。友達のかわいい髪型やかっこよりちい姉とおねーちゃんのかっこがうらやましくて、こーでいねーとは2人におまかせだったから、何がビビッとくるのか自分でもイマイチ……

エレメリオンにはつきりした答えを返せないでこまってたらロックチョウデリットが空に飛んでいくのが見えた。うわ！まっすぐこっち飛んでくる!!

「スカーパーーットー！」

「やだ、ぶつかかるぶつかちやううう!!」

飛び起きてギリギリでよけられた。でもUターンしてまたもどってくる！飛んでくるのをよけて、を何度もくり返すうちにロックチョウデリットのスピードがどんどん上がってる。こっちは、なんかちよつとずつ体が重くなってきた。素直じゃないとしゅつりよくが下がる、ってこれも？

でも、どう思い出して素直になればいいのかわかんないんだって！そもそもかんがえてるよゆうだってないでしょこんな時に!!

「何もしてこないのであれば好都合。厄介なことになる前にその属性力^{エレメーラ}をいただくぞ

小娘エ!!」

「ひい、目がかわいい！こっち来ないでってばあ!!」

よけられなくなってきたので両手を突きだして受けたら、最初の時は止められたのに今度ははね飛ばされて地面を転がった。転がったのは平気だけど両手はめっちゃしびれてる。

「いったたた……だんだん手もいたくなってきたあ。こんなのやつぱり私じゃ無理だつてええ」

いわれるままに変身しちゃったけどこれ以上はどうかできる気がしない。もうツインテイルズ……テイルブルーに早く来てほしい泣きそう。

『それでは好香。好きな人、憧れる人……いや少しでもかっこいいなんて思う人はいるかい?』

座り込んだ私にエレメリオンが聞いてくる。だから、よゆうないのに……けっこーマイペースじゃないエレメリオン?

でも好きな人、かあ。それならすぐに言える。これはこれで言うのちよつとはずかしーんだけど、なんでかな。合体してるせいかエレメリオンには、はずかしい気があまりしないや。

「いるよ、ちい姉とか……最近だとテイルブルーとかトウアールさんもかなあ」

好きな人、だけならおねーちゃんや総二兄なんかもだけど、かっこいいとかもあこがれるとかもありだとやつぱりこーなる。全部でいちばんはとーぜんちい姉だけだね。

やった、今度はロツクチョウデリット避けられた

『スカートディバインストーム翻る神風!!』

「わわ、飛ばされきやああ——あいたあっ!!」

……けどダメだ。ものすごい風に巻かれて飛ばされて建物にぶつかって止まった。あ、ぶつかつた壁壊れちやつたどうしよ……

「フン、力の扱いを知らぬようで防御だけは硬い。あの精神生命体の力か……それにしても捲るスカートが無い相手では今一つ我が風の振るい甲斐が無いものだ」

『直接の突撃だけでなく超加速による暴風圧がヤツの武器か!』

なんか馬鹿にされてる気がするけど、怒る前に怖いんだってばこっちは。話しかけてくるエレメリオンがいなかったら絶対とつくに泣いてるからね。もう嫌いだあいつ。

『——好香のお姉さんなら私も見ているよ。先程は属性エレメライズ共鳴でまず好きな髪型になると言つたが、正確には好香の心にいちばん残っている髪型、そしてそれに繋がるイメージから今の姿に変わるんだ。』

「えーと、それって……?」

ロツクチョウデリットの動きにかまわないうで、エレメリオンは私に伝えてくる。

『好香が嫌いな髪型には変われない。好香は“ツインテール”で“嫌い”という以上に思い浮かぶものがある。それがこの姿のきつかけだ。』

私はツインテールが嫌い。きよーみないって思ってる。——でも、ツインテールで最初に浮かぶのは。私がいちばん見ているツインテールをくつつけてるのは。

「ツインテールなら……ちい姉」

私がいちばん知ってるツインテールはちい姉——愛香おねーちゃんだ。

『好香はお姉さんが好きなんだろう。嫌いと言っているツインテールでも最初に思いつくのはお姉さんだ。だったら——お姉さんのツインテールは嫌いかい?』

ビル壁にもたれてる私に目掛けてロックチョウデリットが迫ってる。でもなんか……さつきより速いはずなのに、さつきよりはつきり見える。

「ちい姉のツインテールは……嫌いじゃないよ……」

私知ってるちい姉はずーっとツインテール。お風呂や寝る時なんか解いてるけど、それ以外でツインテールにしないちい姉を見たら変な感じがするくらい。私が大好きな愛香おねーちゃん姉はツインテール。だから——

「ちい姉のツインテールは好き、大好き!」

これが私のほんとの気持ち。

ジャンプしてロックチョウデリットを避ける。さつきよりも体が軽い。

ロックチョウデリットの方は、私が避けても直角に飛んでビル壁にぶつからずに空へ上ってる。その移動する暴風の衝撃でビルの方が削れていってる。

でもそんなことどうだっていいや。私には関係ない。

『そうだ。難しく考えなくていい。それが1つめの“好香の好きな髪型”だ!』
ツイントール

エレメリオンの言葉を聞いてると、どんどん力が湧いてくるような感じ。
 空中にいる私をまた暴風で振り回したロックチョウデリットがキックで突撃してくる。

『今の好香には、好香が好きなツイントールを私が増幅して結ばれているんだ。』

このツイントールは私が好きなツイントール?じゃあそれって——

「それじゃあ、このツイントールってちい姉とお揃いなのだ!」

『ああ。そのツイントールも鎧も、好香の“大好き”そのものさ!』

ロックチョウデリットのキックを両腕で受け止めた。物凄い音が響いたけど——今度は全然痛くないし痺れない。

「私が見てたちい姉のツイントールになってて、ちい姉が大好きでこのかつこかあ……えへ。じゃあこのままでいいや!!」

なんか口元が緩んできた。でもなんかすごい嬉しい。だって私は今、私の大好きで大好きなちい姉みたくになれてるんですよ。嬉しいに決まってるじゃんこんなの!

胸のエレメライザーが光って、力が溢れる。なんでもできそうな気がしてきた。

「このお、どーしてあんたに蹴られなきゃいけないのよ鳥オバケ!!」

「ヌオオツ!？」

キックを受け止めた両腕を思いつきり降つたらボール投げるみたいにロックチョウデリットを投げ飛ばせちゃった。

「うっわ、すごい……!」

『好香の属性こしこうが高まれば高まるほど私との属性共鳴エレメライズの出力は上がっていくんだ。それだけ私の言葉も知識も頭より先に心で理解できるようになっていく。幼女よしかの大好きが強くなるほど私は好香の属性力エレメーラになれる!』

エレメリオンの言う通り、単語はよくわかんないのが多いけど意味が理解できるようになってきた。——でも、なんかひとつ私の漢字が違うような部分があった気もするけどエレメリオン国語苦手?」

「なんかわかつてきたかも!あいつもやつつけられそう!!」

それよりも今はロックチョウデリットをやつつける。ちい姉みたいになれてるってわかつたら怖くもなくなってきた。怖がらせてくるならやつつければいいんだ……って思うのは考えもちい姉っぽくなってるのかな?」

『ああ!やるぞ好香!』

エレメリオンの返事が心に響いたら、助走をつけて思いつきりジャンプ。放り投げられてもすぐに空中でバランスを取ってロックチョウデリットに近づいた。よーし今

度はこつちが羽筆ってぶん殴って地面に落としてやる！

「二度は背に触れさせん!!」

もつと高くに飛ばれて私の腕は空振り。

「今度は私とその首をへし折ってくれる!!」

ロックチョウデリットは空で自由の利かない私の背中に向かって急降下してくる。

『好香！跳ぶんだ!!』

「うん！」

変身しても私は空を飛べないみたい。でも空を「跳ぶ」ことはできる。空気を蹴つて空の上でもつと高くジャンプ。急降下するロックチョウデリットとすれ違う。すれ違う瞬間に右足を掴めた。おお、ちい姉にされたこと私にもできた！さすがだ変身した私！

「なにいつ!!」

「ばーかゲームじゃ二段ジャンプなんてよくあるでしょ！ふふん、やったこつちも掴めた！」

私の二段ジャンプに驚いてるロックチョウデリットにドヤ顔を見せる。蹴ってきた左足も掴めた。これでさつきのお返しができる。両足を掴んだまま思いつき振りかぶる。

「さつきはお尻ぶつけて痛かったんだからね！アンタも一回くらい地面に頭ぶつけてみればいいのよ!!せー………!!」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

今度は空じゃない。地面にむかつてぶん投げてやった。ぐるんぐると投げたこつちがちよつと引いてしまうくらいの勢いで回転しながらロックチョウデリットは地面に吸い込まれ、大きなクレーターを作つて墜落した。

「おぉ………頭つていか体全部ぶつちやつた」

地面に出来た大きな穴の側に着地して、中心を覗き込んでみたら更にぽっかり穴が開いている。ロックチョウデリットはその穴にめり込んでみたいで姿も見えないし、這い出してくる様子もない。

「ちい姉の髪なら大好きって言ったらこんな力でちやうの……う？」

『“大好き”が文字通り“力”となる。それが属性力エレメンラというものさ。』

自分でやつちやつたクレーターにほけーつとなつてたらエレメリオンが教えてくれる。繋がつて私の理解レベルも伝わってるのかな、説明がだんだん分かりやすい言葉を選んでくれてる気がする。

「あ、このへん結構壊しちゃったけど、大丈夫かな……」

『すまない。物体を修復するような力を発揮する属性は私も好香も持っていない。工

事の人に任せよう。』

え、そんなどうしよ。でもそれしかないか……うう、ツインテイルズがあんまり物壊さずに戦ってるの凄いことだったのかも。

珍しいエレメリアンの間を置かない同日出現の報に俺たち——ツインテイルズが現場に到着するのは、いつもよりも若干の時間を必要とした。転送ポイントへ移動するタイムロスの他に、今回はエレメリアンの反応が動き過ぎた。レーダーをチェックしているトウアールが言うには2つの大きな属性力エレメラがほぼ音速で移動を続け、一か所に留まっておらず、正確な場所を特定できなかった。

それがようやく動きを止め、俺たちが追いつくことができたのだが。

「なんだこれ……！アルティメギルのやつら何してんだ!？」

ビルを飛び越え最後の跳躍をした俺たちの眼前に広がった光景に思わず目を見開いてしまう。大小のクレーターエレメラやら削れたビル壁に始まるかなりの破壊の爪痕。

エレメリアンの目的は属性力の奪取が最優先なので破壊行為などはそうそうしない。上級エレメリアンとの戦闘になれば激しくなるが、彼らも人間に被害が出ぬよう人気のない場所を選ぶことが多い。

なので、いくら俺たちが遅れたとはいえ、市街地でこれほどの被害が出ているのは初めてかもしれない。加えて当のエレメリアンの姿が見えない。

一体どういふことなのかまるで事態が掴めない。

「ツインテールの気配がある……!?!」

だというのに俺―テイルレッドにはツインテールの気配が感じられる。もしやドラグビルデイのようにツインテール属性のエレメリアンなのか!?

「レッド、あそこ―何かいるわ!」

隣を跳躍するブルーが指さした場所―大きい方のクレーターの傍にツインテールの影が見えた。上からじや砂塵で全容はよくわからないが、今までの経験からするとエレメリアンにしては随分小さいな。上半身は大きく見えるが身長そのものは俺と同じかもう少し低いんじゃないか。

着地と同時にかくこれ以上暴れさせるわけにはいかないとブルーとイエローが即座に武装を展開。ウエイブランスとヴォルテックブラスタを構えた。

「待て、ブルー、イエロー―こいつはエレメリアンじゃない……!?!」

が、俺は前に出て二人を制した。さつきは確かにシルエツトしか見えなかったが、それでもツインテールの形状が見えないなんて俺にはありえない。目の前にあるのは触手でも鋼鉄でもない。あれは人間の髪で結われたツインテールだ!

景色が晴れて現れた相手の姿は、まるで俺たちと同じくテイルギアを纏った戦士。あの
るいはグラスギアのアルティメットダークグラスに与する少女と同類か。

何にせよ人間相手だ、警戒は解けなくても迂闊に攻撃するわけにはいかない。

「わ、ツインテイルズだ……!」

——のだが俺たちに気付いた相手の第一声はどこか緊張感が無かった。

周囲の状態、身に纏う硬質な武装とはまるで釣り合わない無警戒の様子でこちらにトコトコと歩いてくる。と思えば、後ろの二人の武器が自分に構えられてるのに気付いて足を止めた。

「え、ええ〜と……やつぱりこんなに壊しちゃうのつて駄目だった……?」

いや、やはり警戒してるといふより身を竦ませただけのようだ。

その態度は、本当に格好が普通の服なら叱られそうで様子を窺う幼い子供だ……外見相応の年齢だろうか。

じっくり見ればそのツインテールも、見事だがどうにも違和感がある。熟練のツインテールのようできて初めて結んだ初々しきがあるような。ツインテールに馴染んだ誰かが結んだようでこの子が自分で結んだようなアンバランス……ツインテールの見た目と年齢が一致しないと言うべきか。いろんな意味でなんだこの女の子。

「ブルー、イエローまず武器を下ろそう。見たままの小さい子供みたいだし怖がらせ

るだけだ」

俺たち以外の現役ツインテール戦士の存在がアルティメギル側についているダークグラスパーという悪い例しか知らないせいで、ブルーは勿論、イエローも警戒を解いていない。

その判断も分かるが相手が目に見えて所在なざげにおろおろし始めてるから待つてほしい。外見通りならそれこそダークグラスパーより年下だろうし、大きな2人から凄まれたら余計に怯えてしまいそうさ。

相手は人間の上に敵意もまったく感じないとなると、まずは話を聞かないことには始まらない。

「ええと、何もしないから落ち着いてくれ。状況を知りたいだけなんだ」

俺が一步進み出て声をかけると、少し安堵した表情を見せた。こういう場合はテイルレッドが幼女の姿でありがたい。近い年齢の相手が代表で話しかけたことで対応する余裕を持ってくれそうさ。

「ほ、ほんと……？その、地面壊しちゃったのはいけないと思ってるんだよ？でもでもこれにもじじよがあつていうか、べんしよーって言われても何もできないからその……テイルブルーとテイルイエロー怒ってそうだからえつと……」

「大丈夫だって。2人も怒ってるわけじゃないから！あー俺たちの事は知ってるんだ

？」

「うん。それはツインテイルズって有名だし……」

うーん。やっぱり年相応の反応で、逆に困るなこの状況だと。素直に話してくれそうな感じはあるんだけど、まだ怒られやしないかと戸惑ってそうだ。折角のツインテールが畏縮している。

「そっか、じゃあまずは君の名前を教えてくださいませんか？」

「え、名前？」

「そうだけど……？」

「ちよ、ちよつと待って！」

なんだなんだ。落ち着かせるためにもまずはお互いを知ることから、と思ったんだがキョトンとした顔されたと思ったら、後ろ向いて一人でぶつぶつ言い始めた。いや、これは誰かと話している……通信相手がいるのか。

もしや、この子にも俺たちのトウアールのような協力者がいるのか？

……「名前ないの？」「それは違うの？」とか聞こえてくるあたり、もしかして名前を考えてるんだろうか？無理せず別に本名で……とも言えないな。コードネーム呼びは俺たちも同じなわけだし、どんな立場でも正体を明かせない事情だってあるだろう。

それにしても身振りに合わせて揺れる水色のツインテールが可愛い。ツインテール

は口程に物を言う、とはあるが子供らしい元気が伝わってくるな。

『慌ただしく揺れる小さい子のお尻つていいですよね……危険が無いとわかってれば今すぐにも基地に招待したいですよねグフフ……』

……こちらの通信から聞こえる我らが頭脳ブレインの欲に塗れた心が伝わってくる声を聴いていると、コードネームでさえ教えてもらってはいけない気がしてきた。目の前で揺れる幼女の尻に合わせて通信から邪悪な笑い声と涎をすすする音がBGMの様に流れてくる。

このまま何も聞かずに帰した方が1人の幼子の安全が守られるのではないか……と俺が思い始めたところで、動きが止まりこちらに振り返った。どうやら名前は決まったようだ。

「あ、あなた達に名乗る名は無いわ!!」

腰に手を当ててはつきりとそう言ってきた……だが、ドヤ顔してるけど微妙にふるふる震えてるそうか、決まらなかつたんだな名前。さて、これはどう事情を聞いていこうか……

第7話

「あ、あなた達に名乗る名は無いわ!!」

で、できるだけかっこよく言えてたかな……?」

ティルレツドが急に名前聞いてくるから焦ったあ。だつて変身したつてことは、私
は「かっこいい新ヒーロー」つてことで、つまりヒーローっぽく名乗らなきゃいけない
でしょ?でも名前なんかまだ考えてなかったから、登場したばっかで名前言わない追加
ヒーローとかが言うやつにしたんだけど……あつてるよね?

——ロックチョウデリットやつつけられたのかなーつて穴をのぞこうと思つた時に
ツインティルズが来た。もう来るのおそいよ。でもこれでエレメリオンのこととか
もつとわかると思つたんだよね。

そしたら私が壊しちやつた場所見て、ブルーとイエローが私に武器構えてくるから何
も言いだせなくなつちやつた。

正直に言えば?つて思うかもしれないけど、怪物と戦つてるヒーローが自分と戦おう
としてくるんだよ……怖いに決まつてるでしょそんなの!それにしよーじきに言えた

としても、これだけ物壊しちやつてるのどー言いわけすればいいかわかんない。こんな
の絶対、怒られるでしょ！

特にテイルブルー。昨日、生で見た時はかつこよかつたけど、それはそれとして後ろ
からでもめちや怖かつたんだよ……今だつて怒る前のちい姉みたいな目してるもん。
あれは怒られたらめちやめちや怖い人だ間違いない。おまけにテイルイエローだつて
TVじゃ脱ぐ人つて言われてるけど、よく見てみると怒られたら怖そうな気がするし
……

だから間に入ってくれるテイルレッドがめちやありがたかつた。私と歳も近そーだ
し気持ちをおわかつてくれたんだつたら嬉しいさすがツインテイルズのリーダー。これ
からもつとおーえんするからここは上手く私が怒られないようにして。――

つて感謝してたのに、まだ考えてなかつた名前聞かれたからあわてちやつたんだよね
……。てゆーかヒーローつて変身したら勝手に名前決まるんじゃないかな……う
むむ、キューティピュアとかみんすらすら名乗つてたから、まさかこんなことになる
とは。

とにかく、レッドにタンマして大急ぎでエレメリオンに相談したら

『エレメライズは名前ではなく、装甲結晶化認証ユナイトコード。これから呼ばれることになる好香

のコードネームは好香が好きに名乗ればいいさ。』

『「マグニフィセントエージェント」は私と変身者の共通コードネームだ。好香個人のコードネームを同じものにするのややこしくなると思う。』

『すぐに決められないのなら、正直に名乗るコードネームは決まっていなと伝えればわかってもらえるさ。』

ってゆーから。でもヒーローらしく、名前が決まってないこともできるだけかつこよく言ったほうがいいのかなって……

「……………」

でもなんか変。腰に手を当ててちよつと上向きで目を閉じたかつこいいポーズ込みでビシつと言ったつもりなんだけど、ツインテイルズの反応がまだ無い。これはもしかして……かつこよすぎて目を奪われてるってやつかな!?

なるほど、これもヒーローのつらいところってやつだね。

(突然の新ヒーローのかつこよさにしびれてるってゆーなら仕方ないなーもう、ふふん。でも10秒くらいたった気がするのに無言だしそろそろ様子見てもいいよね……?)

ツインテイルズが私にちゅーもくしてるのはいーんだけど、そろそろニヤケそうな口をおさえてるのがつらくなってきたから、拍手でもなんでもリアクションがほしい。

そろそろいーかなーってちらつと目をあけてみた。……あれ？

レッドが苦笑いですって表情してる何？

イエローはぼかーんって感じで目を丸くしてるし何……？

あー！ブルーなんかちい姉が私を「馬鹿でしょ」ってゆる時みたいな顔してる何なの!? 思ってた反応とちがう!! なにこの私が空気壊したみたいな感じ!?

「うう……な、なによつインテイルズみんなして！ちゃんとヒーローらしい答えだったでしょ!？」

さんしやさんよーの視線に耐えられずに怒られそうな立場だったのも忘れて言い返した。いやちがう。怒られそーな下りはおわって新ヒーローにちゃんと反応しないツインテイルズが空気壊したんでしょ。怒られるのはもうツインテイルのはず!……だよね？

「いえ、さっきのセリフは正体不明のヒーローが悪に向かって逆光を浴びながら言い放つのが正しいのですわ。今の状況では貴女が使うのは誤りですわよ!」

「あ、はい。ごめんなさい」

イエローから、新ヒーローの振る舞いとしてふつーにダメ出しされた。先輩ヒーローからそー言われたら何も言えない。それにしても、いつもだらしなない表情で脱いでる人ってイメージしかなかったのに、キリツとした顔で大まじめに叱られると背も高いし

先生みたいな迫力がすごい……思わずあやまっちゃった。なにこれTVで見たイエローとちがうじゃん、ちゃんとほうどーしてよニユース。

「ですがヒーローから学ぼうとする姿勢は素晴らしいですわ。その心がけを忘れなければきつといつか正しいシチュエーションで使う機会が訪れるはずですよ！その日まで頑張りましょう!!」

しゃがんで手を握って熱心に語られた。なんとなく半分は自分に言い聞かせてるようにも見えたけど、これはおとがめなしってことでいいのかな。次はちゃんと正解シチュエーションで使おう、うん。

ヒーローに学んでるのなら信用できますわ、ってレッドにもうったえだしてる。そうだ、いいよテイルイエロー。これからはちゃんとおーえんするからそのまま説得していつて。

「いやいやヒーロの名乗りはこの際どうでもいいでしょ!? ええい、もうまどろっこしいわね!」

あ……そうもいかなそう。イエローのせつとくにブルーが割って入ってきた。え、こつち来た怖い。

イエローとレッドに期待してたらブルーが前に出てきた。ちよつと待って腕組んで見下ろしてくるのめっちゃ怖いんだけどこの人。やっぱり怒り方がちい姉と同じでめ

ちやめちや怖い人じゃないの!?

いやいや落ち着け私。ちい姉と同じタイプってだけでちい姉より怖いってことはないはず。そんなのーきんゴリラとかめつたににいるもんじゃないからちい姉でじゅーぶんだから。それに、それにだよーもし、もしーちい姉レベルのスーパーゴリラでも、ちい姉とお揃いに変身してる今の私なら大丈夫ー! だいじょーぶ……だよね。

ううう、ブルーもしやがんで目線合わせてきた……ばつちり目が合った。

「そんな怖がらなくてもアンタみたいな小さいのに手荒なコトしようとか思っていないわよ。で、手荒なコトしたくないから今みたいに勢いで誤魔化そうとかしないで、ただ正直に答えなさいよ、わかった?」

「ハ、ハイー!」

無理。全然だいじょーぶじゃない。声聞いただけで勝手に気を付けのしせーになつたつて。おまけに「本当のことはくじょーしなれば、無事に帰れると思うな」つて言われたよーにしか聞こえないんだけど!? 怖い。目つきがもう怖い。怖がらなくていいなんて言つていい顔してないでしょ。そりやアルティメギルだつてびびるよこんなの。ティルブルー好きだけどき、かつこいい人だけどき、向かい合つたら全部が怖いやつじゃん……ウソでしょちい姉より怖いんじゃないのどーしよー……

でもちい姉より怖い人がいるのもそれはそれでちよつと悔しいから、ちい姉以上は言

いすぎつてことにしとこい。

「地面壊したとか言つてたわよね？じゃあアンタがエレメリアンと戦りあつたの？」

「う、うん。は、初めてだったから、その気付いたらこーなつてて。こ、壊すつもりはなかつたんだよ!?!……ごめんなさい」

「ふーん、アンター人で好き勝手に壊したんじゃないのね？」

「そ、そんなことしないもん！ウソじゃないから!!」

ブルーの質問に首を横にぶんぶん振つた。そんなこと思われてたの?! 一人で街壊すとか私が悪いやつみたいじゃん!! 元はと言えばあの鳥オバケのせい……げんきよーを見せようと思つたけど、そうだ地面にうめちやつたんだつた。

それでも「誰を見てそんなこと言つてんの!?!」つて言いかけたんだよでもね……ブルーと目が合つたら無理だつた。こんな近くでテイルブルーに凄まれたら誰が文句いえるつてゆーの。もーだめ目そらしちやつた怖いもん。

ちい姉は私でも睨みつけさえすれば狼くらいはおつぱらえるつて言つたことあつたけど、狼どころじゃないよテイルブルー。めちやめちや怖い。

「……よしーいいわ。嘘じゃ無さそうね。最後の方は目を逸らしてたけど、それはあたしがちよつとキツク言いすぎだったわごめんね。そのへん壊れたのも、あんたみたい

な小さいのが悪い怪物と頑張つて戦つた結果なら、これくらいは不可抗力つてやつよ。心配しないの」

「はえ？」

いーかげん体がふるえてきてたんだけど、ブルーに頭を撫でられた。顔見たら目そらしてた間に一応、笑顔になつてる。え、何なに？あ、レッドが後ろでめっちゃ引いた顔してる……

「怪物と戦つたんだらうから、年上がちよつと凄んだくらいすれば正直に答える度胸エレミアンだすと思つたのよ。どうやら正解だつたみたいね。ま、悪いやつでは無いんじゃない？」

「ちよつと?!いや明らかにやりすぎだろ!後ろで見てる俺だつて怖かつたぞ!!まだ震えてんじゃないかねえかその子!」

度胸ある子はきらいじゃないつて笑うブルーにレッドが声を上げてる。

え、何?ほんとに目をそらしたらアウト、みたいな判定とられてたの?私やせー動物じゃないんだよ!?

「ちゃんと考えてるわよ!見た目通りの歳でエレミアンと戦う度胸あるとしたら熊

びびらすくらいに睨みで妥当でしょ!?そこまで加減してないわけないでしょ!!」

「お前くらいだよ熊レベルで手加減になるのは!!急ぎの判断としても、もうちよつとこうあるだろ!?!ツインテールで動きを見るとか!!」

すぐそばで言い合っているはずのブルーとレッドの会話が遠くに聞こえる。鳥の石化に襲われて変身してテイルブルーに睨まれて……何なの今日?なんかも一足に力入らなくなってきた……

「え?ちよ、ちよつと大丈夫?」

ブルーがなんかあわてた顔でこつち見てる?あ、いつの間にか座り込んでたんだ私。立ち上がろうと思っただけど立てない……腰ぬけた。

大丈夫?って何が?たった今おどかしてきたきたの誰だと思ってるの!?!私はがんばって鳥オバケをやっつけてたのにい、こんなこんな……

「う、うう……さつきは来てくれなかったクセにい……なによ……」

ずつと頭に乗ったままだったブルーの手をはらってばかりと胸を叩いた。だんだん腹が立ってきたもん。ロックチョウデリットが怖かった時は来なかつたくせにやつと来たと思っただけ……!せつかくブルーのことかつこいって思ってたのにこの扱いはなによ……!!

「さっきの鳥オバケだつて怖かったのに……なんでテイルブルーの方が怖い、私だつてブルーに来てほしかったのにばかあああ……！」

「いたた、あの、ちよ、え、その……そこまで怖がらせるつもりじゃ、あたたつ」

「ぼこすか叩きながら文句言つたら、ブルーは困つたようにされるがままになつてる。うう、このくらいですむと思うなブルーのばか。ええい、もうちよつと困れこのこの。」

「あああ、待つて待つてあいたつ。俺たちが悪かつたからごめ、いててて」

私を止めようとレッドが間に入つてきた。あわ、いけない。勢いでレッドの頭まで叩いちやつた、そんなつもりじゃなかつたのに。

「ご、ごめん。レッドまで叩くつもりじゃ……」

「いや、いいつて。君の言う通り、来るの遅くなつた上に怖がらせるなんて俺たちが悪かつたよ。こつちこそごめんな」

笑つて許してくれた上にあやまつてもくれておまけに頭撫でられた。……同い年くらいなのにこの大人のたいおーは一体。こ、これじゃ私だけお子様みたいじゃない！

「あ、ちよ……こども扱いしないで」

なんとか切り返そうと思つたけど、うつむいてこれだけ言うのがせーいっばいだつた。これもレッドにまた笑つて済まされた。せ、先輩ヒーローの器とでもゆーの!? 総二兄みたいな大人のよゆうがどこから……悔しいぐぬぬ。

「ほらほら、涙を拭いてくださいな。それに、あまり怒っていても可愛いお顔が勿体ないですよ?」

「え、その、泣いてないもんっ」

テイルレッドに完璧に負けた気がしてたら、ひよいつとテイルイエローに抱き上げられた。またお姫さま抱っこされてる……いけないレッドに子ども扱いしないでと言ったばかりなのに。今は私も変身してるんだし、いくらイエローが年上のおねーさんでもこのままでは……

「いいから、おろして……」

「あら、もう立てますの?」

「とーぜんよ。それくらい……無理です」

うぐぐ、イエローの腕からおりよーと思っただけまだ力が入らないなんて。なんとかくるに決めようとしたけど駄目でした。そこ、いまさら遅いとか言わない。それにしても、イエローはイエローで優しい言い方されてるのに、つい言う通りにしちやう雰囲気気がやっぱり強い。ちい姉やおねーちゃんともちがうタイプだけど大人のおねーさんだ。

TVの嘘つき、あのいつも脱いでる危ない人はなんなの?

「最初が上手いかなかった時の気持ちはわたくしにもよく解りますわ。ですが加入

イベントは大切なもの！特に年齢が低い追加戦士は貴重ですから次の登場までにしつかり準備しませんと!!」

かにゆうイベント？またイエローの目が輝いてきてる……。でも新ヒーロー登場ってやり直しOKなんだ。じゃあ今日はまだセーフ……。？」

「それですが、この鎧はやっぱりテイルギアですよ？」

「ているぎあ？え、あ、うん。ちがうんだ……。えーと、テイルギアじゃなくて、まぐ？「マグニフィセントテクター」らしい、です……」

「メンバーで追加戦士一人だけ変身システムがまったく違うヤツですわ!?ますます貴重な加入イベントですわ、万全の状態で挑まないといけませんわよ!」

イエローめっちゃ楽しそうにしてるけどなんでだろう。私をかんげーしてくれてるってことなのかな？

『一言で私の特殊システムに気付くとは流石この世界のツインテールの戦士。やはり頼もしいな。』

エレメリオンがイエローに感心してるけど、エレメリオンが思ってるのとは多分ちよつとちがう気がする。うん？そーいえばエレメリオンに説明たのめば私が腰ぬかすことにならなかつたんじゃない……。？そーいえば何でエレメリオンずつとだまつたの？あれ？

『好香がコードネームを尋ねてきたから、自分で話すつもりだと思って黙っていたんだが違うのかい？心配しなくても泣き顔だつて幼女は可愛いさ。』

うっそお……またなんか勘ちがいを頭の中で言われたんだけど。変なところに気をきかせてないで私が睨まれてる時に出てきてよお……そ、それに泣いてないって言ったでしょ！そんなフオローいらないし!!

「え、エレメリオ——」

「あー、悪かつたわ。あんたくらいの背丈でも面倒なやつを知ってたせいかな。初めてなんて言つても実は戦いなれたヤツなんじゃないかと思つて、あたりが強くしすぎてたわ。ごめん」

さっそくエレメリオンにしゃべつてもらおうと思つたら、ばつの悪そうな顔してブルーがあやまつてきた。ちゃんとあやまつてくれるならそれはその、うん。

「ん……うん」

ここでブルーの頭を撫でてあげればレッドと同じ大人のよゆうを見せられるのかな。そのチャンスだと思ふけど。

「……運んで」

「え？」

「……ブルーが私のコト運んでくれたら許す」

うぐぐ、やっぱりだめ！私には大人のよゆうはまだ早いみたい。こんなことされたんだから交換じよーけん出さなきゃやってられない！！どうだ、数少ないファンを怖がらせたむくいだと思いがいいテイルブルーめ。

睨んで言っただはずなんだけどブルーが笑ってるの何？むう、ほかの2人にも笑われてる……ブルーがレッド以外を抱き上げてるの見た覚えがないからけっこーな難題だしてやったと思っただのに。

「なによ、泣きそうな顔するからやりすぎたと思っただのになあ。そんな可愛いお願いするなんてやっぱり結構タフじゃないアンタ。嫌いじゃないわよ。いいわよ、それくらい安いわ」

ぬぬ、おもしろい物見るような目で見てくる。でも、その笑顔かっこいい……怖いやつのかせに、悔しい。

くそう、何度見てもちい姉と同じタイプだ目が離せなくなる……あ、かっこつけてるけどちよつとニヤついてるな。

「さては怖がらせても逃げないファンがいてうれしーんでしょ？」

「お………あんたホントに度胸あるわねチビスケ」

イエローから私を受け取ろうとしたブルーが目を丸くした。ふふん、どうだ。

「——ウチのチビスケみたいに馬鹿と紙一重かもしれないけど」

最後になんか言ったのはよく聞こえなかったけど。

「まあまあ。ともかく移動しましょう。そろそろ人も集まってきましたわ」

イエローの言う通り、ちよつとずつやじ馬が来てる。あ、TVの人もいる。……え？このままで私も映るの？こんなお姫さま抱っこされた状態で？やだよヒーローなのにはずかしい。

「ねえブルー！早くおろして!!このままTVに映るとか無いからー!」

「あ、ちよつと暴れんじやないわよこら!」

ブルーの腕からおりようと手足をばたつかせたら余計しつかり捕まえられた……ま
ずいカメラこつち向いてる。

「まだ立てもしないんだから大人しくしてなさいってのよ!……この際だから、アン
タこのまま映ってくれたほうがあたしもイメージアップするかもしれないでしょ」

「なにそれブルーは怖かつこいい路線だからいいでしょ!はずかしいの私だけじゃな
いばかあ!」

あきらめずにもがく私にブルーがこつそり耳打ちしてきた。あれだけ暴れてるくせ
にTV映りなんか気にしてたの……だったら私のTV映りも気にしてよ。

「怖いが行先しすぎてるの分かるでしょ!?!アンタの詳しいことまだ何も聞いてないの

た暴風でレッドとイエローを弾き飛ばして。

「な、なにコイツ!? きやああああ!!」

「うわ!? まだ無事でーきやああああああああ!!」

ブルーと私をさかさまに抱きしめて大空へ突進した。

「許さん、この私を大地に沈めるなど……!! 小娘エ……キサマは絶対に始末してくれ
る!! スカー……ッ……ッ……ッ……ッ……!!」

第8話

ロックチョウデリットが私とテイルブルーを抱えて空へ空へとのぼっていく。ベアハッグ……と言うにはブルーは上下さかさまだし、腰のあたりをホールドされてるからちよつとちがうかもしれない。

それよりも、私を拘束——じゃない、お姫さま抱っこしたままで捕まったから、両腕までがっちり押さえつけられて密着してて、完全に身動きできないのが問題だと思う。

おまけに、私だって直前のやり取りでブルーにがっちりホールドされてたのに、その上にロックチョウデリットとブルーの体に挟まれてぜんぜん身動きできない。

『これは加速の圧力だけでは無いな。ロックチョウデリットは我々と暴風で包み込んで完全に拘束している！生半可な力では引き剥がせない!!』

エレメリオンが言うには、ただ拘束してるだけでも無いみたい。ドーやってぬけどそう……

あと、ブルーの胸に押し付けられてるほっぺが痛い。ロックチョウデリットだって硬いんだけど表面には羽毛っぽいものがあるだけそっち側のほーがまだマシ……。

「うぐええ……ブルーは、胸どうにかなら、ならないの？いたいよおお……」

よく見たら、その下からレッドよりスピードが遅いけど近づいてくる黄色い光も見えた。イエローも追いかけてきてる。

あつという間にロックチョウデリットに並んだテイルレッドが二本のブレイザーブレードで斬りかかったけど、スピードが落ちたりもなしにロックチョウデリットは全部をよけてる。

「ほう、キサマが噂のテイルレッドか！私に追いつがったことは誉めてやろう。だがその刃を立てるには至らんない！」

「こいつ、2人を抱えたまま、ここまで小回り利くのか!!」

しつかり捕まってる私たちも同じいきおいでふり回されるから目が回りそう。気持ち悪い……

「だが最早、私の狙いはこの小娘のみだ引つ込んでいろ!!……もつともテイルブルーのスカートを捲るといふ思わぬ行き掛けの駄賃があつたのは僥倖だがなフヘ」

「はあ!?何言ってるんだお前!？」

ん？今なんかよくわからないこと言ったねロックチョウデリット。レッドも、ロックチョウデリットに並べられると、顔が見えない位置になっちゃうんで表情は分からないんだけど、意味が分からないって声出してる。

あ、うん。ブルーは聞いた瞬間に固まってる。

……でも、ブルーのかっこうでスカート無いよね。腰のメカっぽいパーツのことかな？

「見ればわかるうこの私の構えを！私はテイルブルーの腰を捉え、我が翼が彼女の腰を覆っている！！つまり私自身がテイルブルーのスカートとなり、己が暴風で捲られているのだ！！己自身でスカート捲りを体現する。これぞスカート捲り属性の神髄よ！！」

「やだー！ー！！こいつこんな気持ち悪かったの!？」

この鳥オバケめっちゃ気持ち悪いこと叫んだ。明らかに自信満々で感じの大声で言っていて、もうこの間のスクウエレルギルデイよりもキモい。密着していたくない!! さつき、こいつの方が押し付けられるならマシとか思っでごめんなさいテイルブルー。

「離れるこのクソ変態があああああー！ー！ー！ー！ー！！」

「ぐおあつ!？」

私がキモさに引いたのと同時。レッドが動くよりも先に、ブルーが抱きしめられたまままで体を揺すって膝蹴りを鳥オバケの顔面にいれた。さつきがブルー、ロツクチヨウデリツトの体がぐらりとゆれたゆれた。

すかさずレッドが斬りかかったみたいけど、顔面けられた直後だってゆーのに、もつと上昇して避けちゃった。しぶとい。

「ぐふう、それがどうした?」

ブルーの膝蹴りは効いてそーなだけで全然、ひるんでない。突撃を私に受け止められた時はあんな驚いてたのに。……それよりもちよつとうれしそーに感じるのは気のせい？

「スカートとは太もも！膝！そう、歩行の際に脚に当たるもの!!開いた脚に押し上げられることに何を怯むことがあるう!!そもそも私の顔面装甲は捲ったスカートの内側を！如何な障害があらうと密着して隠し、かつ私だけが覗く為のぐあああああああ

!!!
「気色悪いこと言つてんじゃないわさつさと離さんかあああああああ

キモさがあふれすぎる大声をさえぎって、ブルーの膝蹴りが連続で飛び出す。キツクの振動に合わせてバラバラと落ちていく破片が見えたし、自慢してる顔面装甲つてやつは碎けてるんじゃないのかな。

「おおお……この風の中、スカートが翻ることに怯まぬ、なんと素晴らしい脚よ……!ぐえあつ!これを小娘のついでなどと、目が曇つていたあがが!!」

「ぎゃー!撫でまわすんじゃないわよつ!!」

テイルブルーの叫び声で気もち悪いことされてるんだらうなつてわかる。でも、叫び声といっしょに膝蹴りの音も激しくなってるんだよね。だんだん硬いの割ってる音に

やわらかのをつぶしてやるよーな音も混ぜてきてる。どっちもが怖い。

「ぐええ!! 私は遂に、我が身が生涯をかけて覆うに相応しい下半身と出会えたぞ!! テイルブルー! 共に燃え尽きるまで貴女のスカートでいよう!! おごごご!!!」

「あーあーあー!! また変態どもには言われたくないことををおおおおおーあーあーあーあーあーあーあーあー!!!」

ブルーのこんな叫び声初めて聞いた。キックはめちやめちや激しくなってる。あ、今りようほーの膝蹴り同時にぶち込んだ。音がヤバイ……それなのにロックチヨウデリットはずつと蹴られながらうれしそーにしゃべってる。そして、内容がめちやめちや気持ち悪いヤバイ。

みんなが言ってる『属性』ってゆーのはまだいまいちわからないんだけど、スカート捲りでこんな気持ち悪いこと言えるやつがいるとは思わなかった。やつぱりこいつら怪物がどーとかの前に変質者として怖いかもしれない。

……こないだ総二兄の前でちい姉のスカートめくったのもういつかいちゃんとかやまろう。

「あ、でも気持ち悪いけどこれって、いちおーはブルーにぶるほ」

「それ以上、口に出さないで」

「あ、はい」

ティルレッドがロックチョウデリットを追いぬいた。最初、私みたいに空中でジャンプしたよーに見えたのは何したんだろう？遠くてよく見えないイエローのあたりで何か光ったらトランポリンみたいにはいん、って跳ねた気がしたけど。

「そんなに燃え尽きたきゃ俺がいますぐ燃やしてやるよ!!」

レッドがブレイザーブレイドを2本ふりあげてロックチョウデリット目掛けてきゅーこーかしてくる。炎の熱気が一瞬で近づいてきた——でもこの鳥オバケは、スピードもゆるめないうで真横にスライドして、避けた。まじか、エレミアンってこんな凄かったんだ……TVで見える以上の変態って意味でも凄いけど。

「お前の炎では燃えぬ。私はティルブルーのスカートとして、この空で共に燃え尽きると決めたのだ……もつと加速を……私という強靱なスカートを翻す風を……私とティルブルーの身を焦がす熱を……!!」

Uターンして足をつかもうとしたレッドをまた追いぬいた……どころかもつとスピードが上がってどんどん引きはなしていく。

『まずいぞ好香。こいつは自分の限界以上まで加速して共にバラバラになる気だ!!』

「え」

エレミアンがけーこくしてきたけど、え、なにそれ怖い。燃え尽きるってそのまま

の意味なの？気持ち悪いぷろぽーずとしんじゅーがセットなのこいつ?!しかも私を巻き込んで!!?

おまけにTV以外でぷろぽーずなんて初めて見たのにこれ!?

「初めて見たぷろぽーずがこんなのとかやだああ……!」

「口に出すなって言ったでしよー!!されたあたしはもつと嫌よ考えないようにしてんよ!!」

最初はいろいろありすぎてわからなかった相手の変態ぶりが、よりによつて身動きできなくなつてからどンドン見えてきた。さいあくう……。

思わず、しよーじきな気持ちをこぼしたらブルーに怒鳴られるし。なによう怒らなくてもいいじゃない、つて思いかけたけど確かにブルーの方がきつかったよね、ごめん。

あ、さすがに相手がキモすぎて鳥肌立つてきてるブルー……でも鳥オバケと鳥肌か。これはなんてゆーか、おそろい……?」

「……何考えたか知らないけど、それ口に出したら後の覚悟はしなさいよ」

「はっ」

やせーの勘かな?するどい。

げ、レッドが元の姿に戻つて落ちていっちゃった!やっぱりいつもの姿じゃ追いつけないんだ……

「……レッドのフォーラーチェインは22秒しか使えないのよ。私たちは髪紐属性リボの力を使えば飛べるけど、こいつに追いつくほどのスピードは出ないわね」

レッドが完全に引きはなされちゃったのを見てるとブルーが教えてくれた。なるほど、だからイエローは全然追いついてこなかったんだ。

「じゃあ自分でどーにかしないとだめってこと?」

「そーゆーことよ。腕が動かせたらこんな変態トリ、今すぐ串刺しにしてやるのに……あんたの方は動けないの?」

つまり、助けてもらうのはあんまり期待できない、と。

ブルーに言われて、体をひねってみただけ全然だめ。今となつては変態と密着してるのわかって、めっちゃめっちゃいやになってるんだけど、ぴつたりはさまったままで動けない。

自由なのは風に振り回されてるツインテールくらい。

「エレメリオン、私にも武器とか無いの?」

『残念だがこの姿に武装は無いようだ。——だがまだ髪がある。』

「へ?」

ツインテイルズみたいに凄いいアイテムが出せれば何とかなるかなーと思っただけで、返ってきた答えは無し。それと、よくわからないアドバイス。

『私の属性は髪^ア変え遊^レび属^シ性と言っただろう。そして今のツインテールは好香の心が結晶したものだ。好香が望めば必ず力になる。』

やっぱりよくわからない。でもなんかわかる気がするのはエレメライズが続いているからかな。

「えれめりおん？ やっぱり指示出してるやつがいるのね？」

「え？ うん。指示ってゆーか、いっしょに変身してくれてる？ ってゆーか……？」

エレメリオンのアドバイス聞いてたらブルーがこっち見えた。そっか、エレメリオンの声ってまだ私にしか聞こえてないんだ。

説明したいけど私もまだよくわかってないんだよねそういえば……。どっちかってゆーと私の方がツインテイルズに聞いてみたかったし……

それにしても私が望めば……。かあ。私のツインテールはちい姉だし、ちい姉と言えば力づくが浮かぶけど。それに……。目の前のテイルブルー。睨まれたら怖いんだけど、こんな変態に捕まった状態で反撃できてるのは……。やっぱりかっこいい。実は今だって、ずーっと蹴り続けてるし……。ロックチョウデリットの顔つぶれてるんじゃないかな。

まとめるとちい姉みたいに力づくでテイルブルーみたいにかっこよくツインテールで……。うーん……

「スカーパー……。何を考えても無駄だ小娘おごつ、この加速と圧では何もできまい。

「テイルブルー私のスカート」に巻き込まれたことを光栄に思え!!ぐあああああつっ……ふっふっふ、まったく元気な脚よぐおお!!さすが私が見初めた下半身おげげげつっ!!!」

「お前も気色悪いことしか言わない口を開くんじやないわよ!!!」

……イメージ固めようとしてるのにジヤマな声がはいってくる。ええいうつとーしい。そもそもなんで変態のぷろぽーずに私が巻きこまれなきや……あれ?

そうだ、最初は私がおそわれたってゆーのになんで今オマケあつかいされてるの。

「ねえ……私いきなりさかさまに持ち上げられてスカートの中が見られちゃったんだよね……そのまま変身したりお尻打ったりしてるのに……なんで今あつかい下がってるの?」

思い出したらなんかよけーに面白くない。なんでこんな変態鳥オバケにふり回されてるの私。

「ふん、キサマを始末するよりこの素晴らしい脚のスカートになることの方が重要なだけよ!!小娘が我らのひと時を邪魔するでなぐえああああつっ!」

あいかわらず蹴られながら、私がもうがんちゅーに無いみたいに言ってくる……あつたまきた!!

そーいや地面に投げただけで殴ってないのも思い出した!こいつ絶対ぶん殴ってや

る!!

「な、なによそれ! そーいえばそうよ!! 地面壊しちゃったのもテイルブルーに睨まれたのだから全部あんなのせーじゃん!! そのくせに……変態鳥オバケのくせに、えらっそーにしてないでよ! ああー!! ずっと怒ってたけどもー怒った!!」

そー思つて叫んだら、頭のとなりでバチバチツツという音がした。

「うわ! あんたそのツインテールどうなつてんの!？」

まぶしそうに目を細めるブルーに言われて、自分のツインテールがどうなつてるのか気付いた。

ロックチョウデリットの暴風にふり回されていた私のツインテールは、光になつていた。頭の両側で結んでる根元からバチバチと電気みたいにスパークして、ツインテールそのものがビームみたいになつてる。

エレメリオンが言つてたのってこれ!？」

「でも、これなら……これどうよ鳥オバケ!!」

ビームになつたツインテールは私の思い通りに動いた。テイルレッドの攻撃はよけてたけど、ブルーとおなじで密着してる私のツインテールはよけられないでしょ! ビームみたいになつてる私のツインテールは長さも伸びて、ロックチョウデリットの体に絡みついて、ビリビリとしょげきを与えながら縛り上げてく。今度はこつちが捕まえる

番だ。

「グ、オオオオオオ……!!」

「いーかげんに、テイルブルーもはなしな、さい!!」

両肩にも巻き付いたツインテールは、締め上げて力づくでブルーにしがみ付いてるロックチョウデリットの両腕をはがした。ほとんど上半身全部を締め上げたことで、私たちを押さえつけてた風も、ロックチョウデリットの移動も止まった。ふふん、どんなもんよ!

「やるじゃないのチビスケー!そんなじゃ、くらえおらあああああつ!!」

ロックチョウデリットの腕から離れたブルーが、私の両足をつかんでぶら下がった。わあ、そこで止まらないで空中ブランコみたいに勢いつけて今日一番の膝蹴りをロックチョウデリットの顔に叩き込んだ。えぐい。

今ので、ちよつとだけは残ってたロックチョウデリットの顔面装甲は完全になくなっちゃった。

「ぐあああああああ!!」

ロックチョウデリットがもだえた。私のツインテールに全身を縛り上げられて身じろぎもできないところを思いつき蹴られたんだし当然かな。

テイルブルーは膝蹴りの勢いで一回転すると頭のリボンほいメカパーツを大きくし

て自分で飛んだ。おお、あれが【髪紐属性】の力つてやつかあ。

「あー気持ち悪かった……………!!」

自由になったブルーは腰や太ももを手ではらつてる。当たり前だよな。

「馬鹿な……………! 構えの不可抗力で股間を凝視していたのはまだしも、この私自身がスカートとなつて何が不満だったと!?!」

それを見て本気でショックを受けた叫びをロックチョウデリットが上げてる。何言つてんのこいつ。

「そうね全部だよ! 死ね」

「おげえええええ!!」

ブルーが顔をサツカーボールみたいに蹴りぬいた。ロックチョウデリット、やつぱり私に縛られて空中で動けないから、しょーげきは全然逃がせてないっぼいね。おまけにもう生の顔だし。でもそれ分かつてブルーも蹴ってるよね。かわいそーとは思わないけど。

「ブルーもはなしたしそれじゃあ……………痺れるくらいって思わないでよ! リクエストどーり焼き鳥にしてやる!!」

次は私の番だ。ツインテールのパワーを上げる。バチバチつてスパークがもつと強くなって、ビームがもう雷みたいになってロックチョウデリットの体を焼き焦がしてい

く。

「ギイ、ガアアアアアア……!!!」

ロツクチョウデリツトの全身に火花が散る。体の装甲がベキベキってひび割れて、白い羽毛にまんべんなく焦げ目がついたところで、最後の仕上げ。私は大きく頭を——ツインテールをふりかぶった。

「やああああああああああああああああ!!!」

ビームになってよーとツインテールは頭から取れたわけじゃない。縛り上げてるツインテールでロツクチョウデリツトをふり回してふり回して、もっと高い空へ勢いよく放り投げた。ざまーみるばーか!!

「よくやったわ、後はあたしに任せなさい!」

ブルーが頭のメカリボンを叩いてウエイブランスを出した。

予告どおり串刺しにする気だろうけどちよつと待つてほしい。さっきまではロツクチョウデリツトにツインテールを巻き付けてたから空中に浮いてたけど、ほんとは飛べないんだよ私。このままじゃ落ちちやう、だから。

「その前に乗せてよブルー!」

「オーラ……うわ、と、と!何すんの!」

光の柱で拘束するオーラピラー？つてやつをやるうとしてたみたいだけど、私はそこへ飛びついた。ブルーは急に飛び込まれてバランス崩しかけてたけど、上手く抱きとめて踏ん張ってくれた。さすが。

「危ないわね！ここ何処だと思ってるのよ!？」

「だって私、飛べないんだもん」

「ああもう、手がかかるわね！ほら、折角の特等席よ!」

私を素早く小脇に抱えこむとブルーは槍を構えなおした。なんだかこーゆーとこまでちい姉と同じに手慣れてるなあ、あなどれない。

「オーラピラー……!!」

あらためて、落ちてくる黒こげのロックチヨウデリットにウェイブランスを構えて円柱型の水流に閉じ込めるブルー。あとは振りかぶったウェイブランスを投げつければ必殺のエグゼキュートウェイブ。

「あ、ちよつとまって」

「エグゼえええええい!とお、おお!!だから空中でバランス崩させるなって!今度は何よ!？」

なんだけど、私とその長柄をつかんだから不発に終わった。

邪魔した私に頭突きでもしそうな勢いで顔を近づけて怒鳴ってくるブルー。

「あれだけ蹴つとばしたんだしブルーはもういいでしょ？ 私だつてスカートめくられたのに、まだ一回もちゃんとぶん殴つてなかったから私がやる!!」

返事を聞く前にブルーの腕からぬけて、空中二段ジャンプ。

これがいち姉なら、相手が熊でも最初から最後まで一人でやつちやうんだし、私も最後までくらはいは自分で決めないとね!

お、下からレッドとイエローが追いついて来てる。よーし、ちょーどいいや。新ヒーローを見ててよね!

「ねえ、エレメリオン。必殺技なら私にもあるんだよね?」

『勿論さ。この属性共鳴出力なら好香にもわかつているはずだ』

「わかった、おっけー!!」

全身にみなぎる力を胸のエレメライザークリスタルに集中させる感覚。ツイインティルズは完全解放つて言うみたいだけど私とエレメリオンはちがうだね。私たちは――

『『極限出力!!』』

声が重なる。

「ツツ!!」

ロツクチョウデリットが上げた断末魔の叫びすら掻き消し、遙か彼方へと光の軌跡を続け——爆発。周辺の雲海までも奇麗さっぱり吹き飛ばし青空を完成させ、マグニフィセントバスターは消えた。

「……………やっべ」

『「これは……属性エレメント玉まで破壊してしまったか？」』

初必殺技で広がった青空を眺めて最初に出てきた言葉はこれ。いやだって、まじやばでしょ。

「とにかく強いのがぶっ放しちやえ」とは思ったけどこんなの出るとは思わなかった。初めてだしちよーせつとかできないかったし……そもそも威力のちよーせつとかできる必殺技なのこれ？

「下で撃つてなくてよかったあ」

街中で撃つてたらまたなにか壊してた気がする。ロツクチョウデリットが空にのぼってくれてラッキードったかも。

ほけーっと自由落下してたらテイルブルーが近づいてきた。そーだそーだ、受け止め

てもらわなきや。

「ありがとーブルぐえっ」

「ふん」

抱きとめてくれると思つたら鎧の襟首つかんで止められてまた脇に抱えられた。なにすんの。

「え、なんでこーなの？ちゃんと運んでよー」

「うるさい。あのトリに挟まれてた時の態度、忘れてんじやないわよ。こんだけ手間かけさせるチビスケは、これでじゅーぶんよ」

「私はしよーじきに言っただけじゃん。ヒーローのくせにケチ」

「手え離してもいーのよあたしは」

せいとーなしゆちよーをしたのに頭を小突かれた。人気とか気にしてたクセにファンサービス雑でしよブルー。不満をこめた目で見上げてるってゆーのに、そっぽ向いてスルーしてくれちやって。ヒーローのすること？

私の無言のこーぎをスルーしながら、こっちに飛んできてるレッドとイエローに向かつて降りてつてる……せんぱいヒーローのはずなのに、せつかくの新ヒーローをなんだと思つてんのよ、ぐぬぬ。

「あんな特大ビームぶつ放すなんて、訊かなきやいけないことまーた増やしてくれた

けど……まあ、やるじゃない」

そー思ったら素っ気なくほめてくれた。なんだちゃんと見てくれてるんだ。だったらもーちよつと態度で示してほしーけど……いいよ。私は心が広いからね！代わりに私が新ヒーローらしくくるな態度を見せてあげよーじゃない。

「え……ふふん、かつこよかつたでしょ？」

「はいはい。嬉しそーにニヤついてんの隠せてたらね」

せつかく、くるに決めようとしたのによけーな指摘を……さっきの仕返し!? こんなとこまでちい姉みたいなんだから……!!

「もー！新ヒーローのとうじょーは大切だつてイエローも言つてたでしょー!!」

「ソーデスネー。でもあたしの知つてる新ヒーローとやらは、こんなキャンキャン騒がないけどねー？」

この後もさんざん文句いったのにぜんぶ笑つて相手にされないまま……私とブルーは空の上でレッドとイエローに合流した。

「なあ！痺れるようなツイントールの気配があつただけど君のツイントールだよな!? 下からじゃよく見えなかつたんだどんな風にツイントールを使つたんだ!!!」

「え? え!」

——合流したら、なんかレッドからツイテールについてめちやめちや質問されたんだけど、なんなの……？

第9話

ロックチョウデリットやつつけて、ツインテイルズ全員と合流した私は、テイルブルーの脇に担がれたまま一緒に地面に向かつて降りてる。ロックチョウデリットに捕まっていたのは、ほんの短い時間だったからすぐに地面が見えてくると思ってたら意外と遠いなあ。やつぱりすごいスピードだったんだねあの鳥オバケめ。

それにしても建物がまだ小さくしか見えないなあ。

「ねーブルー、まだー？ もーちよつと早く降りれないのー？」

「気を抜くと注文の多いチビスケね。あんたを落つこととしていいなら、もつと早く降下できんのよあたし達は？」

「いたっ」

ブルーを急かしたらデコピンされた。なにすんのよ。

ブルーの言う通り、ツインテイルズは髪紐属性を使うとかで、頭のリボンみたいなパーツを大きくして自分で飛んでる。いつもならレッドはブルーが運んでるみたいだけど、今回は飛べない私にブルーをゆずって、レッドは自分で飛んでる。

で、そのレッドは、さつきからずーっと私のツインテールを触って、めっちゃ楽しそ

うにしている。何がそんなに気になるんだろ？

合流してすぐは

「なあ！痺れるようなツインテールの気配があっただけど君のツインテールだよな！下からじやよく見えなかつたんだどんな風にツインテールを使ったんだ!!」「気配でツインテールがバチバチツツと弾けるのはわかつたんだ。引き離されたせいでよく見えなかつたのは本つ当つに不覚だつたぜ……!!何やつたんだ!?!」

つて、めっちゃこーふんして迫られてびつくりした。あまりにもグイグイくるから、つい「よくわかんないから、自分で好きに調べていーよ」つて言つたら、それからずっと触つてるんだよね……なんか総二兄みたい、つてゆーかこんな総二兄みたいなのが他にもいるとは思わなかつた。世界は広いってほんとだなあ。

「……まだ触つてるの?」

「え?ごめん、迷惑だつたかな!」

「いや、別にいーんだけど」

「だつたらもうちよつとだけ……」

声をかけたら、ちよつと気まずそうにしたけど、問題ないつて言えば一瞬でツインテール観察に戻つちやつた。

飽きないのかなーつて思つただけだし、ほんと別にいーんだけど。ブルーをゆずつて

くれてるんだし、ツインテール触らせるくらいでお礼になるなら安いもんだし。

ちい姉とおそろいのツインテールがほめられる？のは、やっぱりうれしーからね、うん。

それに……ほんとうに楽しそうにツインテールを見てるから。楽しそうな笑顔が、TVで見るよりもめっちゃかわいい。これはファンも多いわけだ。

(うむむ、こんなツインテールが好きなき子だと総二兄とも気が合いそーだなあティルレッド。これは思わぬふくへーになるかも……?)

……ちい姉のライバルになりそーなツインテールはティルブルーだけだと思ってたけど、意外とティルレッドの方が、ツインテールつて趣味で総二兄といきとーごーするかもしれない。気を付けないと。

ちい姉はもーちよつとせつきよくてきになってもいーんじやないのかな。トゥアールさんみたいに総二兄のお部屋いたりすればいーのに。

「……いつまで気い取られてんよ」

「え？なんか言ったブルー？」

「なんでもないわよ」

で、レッドがツインテール触りだしてから、ブルーはちよつと機嫌悪そうなんだよね何で？

「もしかしてブルーも触りたいの?」

「あたしを一緒にするーなっ」

「あいたつ。もー!またデコピンするー!!」

「ふん」

うぬぬ、なんなのよもう。レッドはツインテールと引きかえに、ブルーに運んでもらうのゆずつてくれてるのに。かんじんのブルーは何もしてないのに何でこんなことすんのファンを大事にしてよ。もつとレッドを見習えケチ。

「私のコト雑に抱えたままだしー。ヒーローらしくていねーにあつかってかれてもいーじゃんー。新ヒーローだしファンなんだよわーたーしーはー」

「それじゃ、あたしはファンサービスに厳しいヒーローってことね。だいたいねえ、エレメリアン消し飛ばせる上にこんな生意気なチビスケはサービス対象外よ」

「それでしたらわたくしが運びましようか!？」

ほんのちよつとの間にどんどん私のあつかいが雑になってくるブルーに文句言つてると、イエローがりっこーほしてきた。自分を指差してじーつと私を見る目が、心なしかちよつとワクワクしてそうな感じする。

「うーん……ブルーの方がいい」

「そうですか。やっぱりブルーのファンですね……」

ことわつたらしよんぼりさせちやった。イエローが嫌いとかじゃないんだよ、でも選べるなら、あつかいが雑でもやつぱりブルーがいいなーって思つちやうから……これも全部ブルーがかつこいーのが悪いんだよ。

ちらつとブルーを見たら、まんざらでもなさそうな顔してる。そーやつてファンによるこぶくせにサービス悪いのが面白くないんだよ。かつこいーくせに……これでもくらえ。

「自分だつてファンにニヤつくくせに、ばか」

「ふひえっ!?なにすんのよこのチビスケ!!」

「いったああい!!ブルーがこーゆーことするからでしょー!!」

スーツから見えてるお腹を指ですーつとくすぐってやつたらさつきよりも強くデコピンされた。そーゆーとこなんだつてばもー!

空をすーつと降りるの数分くらいかなあ?だんだんと地面が見えてきた。

さて、これから私はどーすればいいんだろ?ツインテイルズのひみつ基地とか連れてつてくれるのかな。

「ねえねえ、今からどこ行くの?やつぱりツインテイルズのひみつ基地とか?」

本物のヒーローのひみつ基地って思つたらちよつとわくわくする。エレメリオンの

こととかも教えてもらえるかもしれないし……それにひみつ基地行ってみたい。

「いまさらだけど、名前も言わなくせに警戒心ぜんっぜんないわねアンタ……話は早いんだけどさあ」

よくわかんないことをブルーが言う。けーかい心あるから鳥オバケやつつけたんじゃん。もしかしてツインテイルズにけーかいしろってこと？ ヒーローに？……なんで？

それともひみつ基地にてこと？ でも行ったら危ないのは「悪の」ひみつ基地でしょ？

「ツインテイルズの基地ってなんか危ないの？ まさか火山の中とか海の底にあるタイプ!? 出入りがむつかしそーなとこに建ってるやつなの!?!……でもそーゆーひみつ基地って、喫茶店のれーぞーことかが入り口になってたりするんじゃないの?」

「きつさ!?!ごほつごほ!!」

「そうじゃなくてあんた自身が警戒されるとか正体隠して……もういいわ。深く考えてないバカなのよね多分」

なんか急にレッドが変な声出したけど、どーしたんだろ？

それよりもブルーに呆れたよーにため息つかれた。なによしつれーな。けーかいも何もヒーローのひみつ基地って世界一安全でしょ。ほらほら、イエローもうんうん頷い

てるし。

『だが好香、いいのかい?』

えー? エレメリオンまで歯切れの悪いこと言ってきた……ひみつ基地行ったらなんかまずいの?

『いや、彼女達の基地に行くのは私も賛成だ。しかし今から行ってしまおうと学校はどうするんだい?』

……………学校?……………学校!?

「あああああああああああああああああああ!!!」

すっかり忘れてた!! 掃除の途中だったんだ!!! このままじゃ勝手に出ていったって思われてめちや怒られる!! ひみつ基地行ってる場合じゃない!!!

なんかツインテイルズもひみつ基地の誰かと話してみたいで、私の声にびっくりしてる。もしかして基地のえらい人みたいなのもいるのかな? あーでも、けどもう時間ない! てゆーか今何時!?

「ごめんなさい!! 学校のこと忘れてたから、早くもどらなきや! ひみつ基地はまたこ

んど連れてって!!」

「は!?!」

「だから学校まだ終わってないの! あ、ツインテール放してレッド」

「え、ああ」

「どうしてここで放すのよあんたも!?!」

「だって引つ張つることになつたらツインテールが痛んじまうだろ!!」

手を合わせてツインテイルズにあやまる。ブルーの手からすり抜けて、二段ジャンプを繰り返して空中を全力ダッシュする。いそげいそげ! 早くもどんないと!!

「ちよ……こら待ちなさい! 学校って——」

「ごめんなさ——い! ほんとに時間ないのせんせーに怒られるから——」
!!!

ブルーが呼び止めてくるけど待てないんだって。そうだ。

「ね、エレメリオン! あの光の球になって飛ぶやつってできる!?!」

『可能だ。あの形態は、好香とエレメライズしていれば時間制限もない。』

「やった! じゃあ全速力で学校まで送ってよ!!」

『了解した。』

おお、いっしゅんで光の球に包まれた。光の向こう側にはツインテイルズの影が見え

る。

「助けに来てくれてありがとーーーーー!!!こんどはひみつ基地いくからーーーーー!!!またねーーーー!!!」

向こうから見えるかは分からないけど、お礼言つて手をふつてたらエレメリオンが動き出した。やっぱり私が空を走ってるよりこっちの方が速いや。

掃除の時間には間に合わないかもしれないけど、次の授業までにはもどれるかなあ。

エレメリオンの光の球でしばらく飛んでると小学校が見えてきた。

『このあたりでいいだろう。エレメリイズ解除——ブライトカーテン遮断光量子展開!』

おお、変身が解けて服が元の制服にもどった。こんどは輪つかの形をした光がいくつもかぶさって私を包んでいく。なんか輪投げでひとつの棒に集めてるみたいだなあ。

「わ、わ、なにこれ?」

私がおどろいてる横?周り?で、エレメリオンの光の球が弾けて、キラキラと光の粒を飛ばしていった。花火みたいできれい。

『エレメリオンに好香の所在を知られると厄介だからね。一時的に周辺を視覚カメラからも属性力探知からもジャミングしたんだ。』

よくわかんないけど、ヒーローの正体はばれないよーにってことかな。カメラが使える

なくなるってゆーのはちょっと心配だけど、短い時間だけってゆーんだし大丈夫よね、うん。

光の粒が空でキラキラしてる間に、私は光の輪っかたちにかこまれながら、校内の人がいない場所におろしてもらってた。

——ちなみにこの遮断光量子ブライトカーテンの効果で、アルティメギルだけでなくツインテイルズ—トウアールも謎のツイン好テール香戦士を探知網から見失ってしまったのは余談である。

「ふああ……学校にもどってきたんだ。なんか夢みたい」

校内の風景を見てたらそんな言葉がもれた。だって、校庭の時計を見たらごみ置き場に行ってからまだ30分もたってないんだもん。げんじつ感ってゆーのがない。

鳥オバケ見つけちゃって、エレメリオンが出てきて変身してツインテイルズといっしょに戦って……もつと長い時間たってるような気がしてた。

『夢じゃないさ。好香のおかげで私は好香の力になれた。だが詳しい話はまた後にしよう。今は学校が大切だ好香。』

「あ、うん。また後でねエレメリオン」

でもこーやってエレメリオンが話かけてくるし、手にはエレメライザーにぎったままだし夢じゃないんだよね。うーん、じわじわげんじつ味をおびてくるとゆーやつだ……。

よし。エレメリオンが後でいいって言ってくれたんだしそーしようそーしよ。私ひとり考えてたら頭パンクしそうだし、授業でしっかり寝て落ちつこう。

掃除？終わってたよ。30分たつてないって言つても次の授業がちよつと始まつて、先生にめっちゃ怒られた。

エレメリオンにからまれてましたつて言つても信じてもらえなかったし……私悪くないよね解せぬ。

学校は授業終わつたら、ささきさーつと帰ることにした。だって、今日は放課後に残つて遊ぶ気分じゃないつてゆーか、ねえ。それよりも気になること多すぎるんだつてば。エレメライザーとかエレメリオンとかさー。

こーゆーのはやつぱりひみつの話なわけで、誰かに聞かれる心配がないのは自分の家がいちばんだもんね。おねーちゃん達の学校が終わるのだから私よりおそいから、しばらくは家に1人つて分かつてるし、ばつちりの場所だよ。

とーぜん家まで全力ダッシュ……したけど、いつもより遠くに感じる。やつぱり一

回、空飛んじやうと思いつき走つても時間かかったように思っちゃうなあ。

家についたけど……おねーちゃんは早く帰ってくる時あるなあ。大学の時間割つてよくわかんない。

念のため、玄関のドアをそーっと開けて靴を確認。よーし、おねーちゃんもちい姉どっちもまだ帰つてない。セーフセーフ。

手を洗つてうがいで、次はお客様のエレメリオンをむかえるじゅんびなだけど。

「エレメリオンつてお菓子とか食べられるの？」

『ありがとう。私は属性共鳴結晶灯の中核である属性玉が核となる精神生命体だ。人間と違つて食事はしないからお構いなく。』

とゆーことらしーので、用意するジュースとお菓子は自分の分だけになった。だからそれだけをお盆に乗せて部屋へ直行。

ランドセルはベッドに放り投げて、続けて自分もベッドに飛び込んだ。

「ううううやつと落ちつけた気がする。もー今日はいろいろあつて疲れたようく……」

ベッドで思いつきり伸びると今日のこと……てゆーかお昼過ぎのほんの数十分間なのに、のーみつすぎたイベントがぼこぼこ頭に浮かんで消える。どさつと、つかれをじつかんしちゃう。しょーじき、このまま寝ころがっていると寝ちやいそう。寝ちやいた

い。

でもまだそうはいかないのですよーだ。

おつといけない。エレメリオンはごはん食べないって言ったけど、クツションくらいは用意したい——けど、それもどーしよ。エレメリオン22秒しか出てこれないってゆーから、属性共鳴結晶灯のままになるんだよね。小さいライトをクツションに置いても目線？が合わないし……そうだ。エレメリオンはベッドの上で枕に立てかければ。で、私が床でクツションに座れば……うん、ちょうどいい感じ。

「あ、制服ぬいじやうからもうちよつと待っててね」

エレメリオン^{エレメリオン}の席が決まったところで、私は普段着にちやちやつと着がえる。ほんとはめんどーだし夜、寝る前パジャマになるまで着がえなくてもいーかなーって思うのにな、ちい姉もおねーちゃんも制服にシワができるから帰ったらさっさと脱ぎなさい、っていつつも言ってくるんだもん。いーじゃんそれくらい。

さて。着がえてぬいぐるみを抱きしめてクツションに座る。おつと、お菓子の袋も開けなきや。よし、ベッドの上のエレメリオン^{エレメリオン}と向かい合ってこれでじゅんぴかんりよーだね。

「お待たせしました。あらためて私のお部屋にようこそエレメリオン。ベッドの上ななかでごめんね」

『こちらこそお招き感謝する。幼女好香のベッドと枕なんて私には十分すぎる豪華席さ。素晴らしい着替眺めえもあつた。ありがとう。』

エレメリオンはていねーに返してくれる。ベッドで豪華なんて言ってくれれば、気を使わせちゃってないといいなあ。私の部屋にそんないい眺めがあるとも思えないし……おねーちゃん達の言う通りに普段から片づけておけばよかつたかも、うむむ。

『それじゃあ、そろそろ話を始めようか。』

エレメリオンの言葉にだまつてうなずいた。なんかちよつと部屋の空気も変わったかも。

『この世界には、既にツインテイルズという戦士達がいる。私自身について説明する為にも、まずは好香の知識を知りたい。好香は「アルティメギル」と「ツインテールの戦士」のことは、どう聞いているんだい?』

「そーだなあ、学校とかTVじゃ「怪物みたいな不審者」と「怪物をやつつけてくれる超かわいいテイルレッドと……怪物より危ない猛獣と人前で脱ぐ変質者」って感じなんだけど……」

エレメリオンの質問に答えてると、いちばん危険なのはテイルブルーなんじゃ?って感じになるんだけど。しょーじき、私だつてかつこいいけどいちばんぶつそーな人だとは思つてたんだよね。ちよくせつ会つたら結果としては……それで間違つてないよー

な。

……いつともテイルレッド以外については、防犯ベル用意して気をつけるよーにしか学校で教わらないし。

「でもね。あの鳥オバケで分かったけど……ホントは違うんだよね？」

ぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる力が自然と強くなった。昨日のスクウエレルギルデイは気持ち悪いだけだったけど、今日のロッククチョウデリットはちがう。エレメリオンが助けてくれるまでは——怖かった。あれは大人が言ってるみたいになちよつとした不審者じゃない。凄い力を持った、見たままの悪い怪物。

……とちゆうからは気持ち悪さでもスクウエレルギルデイ以上だったけどね。あれが本当のへんしつしやつてやつなのかな。

『その通りだ。好香が感じているように、彼らは人知の及ばぬ怪物の集団。それが世に認知されていないのは、彼らの侵略がそういう性質のものであるだけでなく、ツインテイルズが大きな被害が出る前に倒しているからだろうね。悪の気配を感じさせること無く世界を護る——彼女たちは本当に強い。』

つまりアルティメギルが本物の怪物なら、それをやつつけてるツインテイルズも本物のヒーローだよ。テイルブルーがかっこいいと思つた私の目にくるいはなかつたこと、ふふん。

「アルティメギルとツインテイルズのこととは分かるけど、それじゃあエレメリオンは？そんなちっちゃいエレメライザーから飛び出したりするし、ツインテイルズの仲間で強化アイテムの妖精かつこいいバージョンみたいなのかなーと思ってただけど」

でも、エレメリオンの方がよくわかんないんだよね。エレメリオンと同じせーしんせーめーたい？みたいに言ってたよーに思うけど、22秒しか体を作れないとかだったりで。アルティメギルとちがって不審者ほくもないしかつこいいし。

へんしつしやよりエレメリオンの話が聞きたい。

『私はツインテイルズとの面識は無いんだ。私は彼女達と違って、異世界からやってきた。『この世界をエレメリアンから守る』という使命は共に同じはずだが。』

あれ？ツインテイルズも知らないツインテイルズのえらい人が用意してたひみつ兵器……と思ってただけど、ちがうんだエレメリオン。おまけに「異世界」とかすごいこと言った……

でも異世界ってことは

「じゃあ、もしかして伝説のアイテムの妖精だったりするのエレメリオン？マグニフィセントエージェントって妖精の世界に伝わる伝説の戦士とかなの!？」

もしかして私はツインテイルズじゃなくてニチアサのキューティピュアみたいな伝説の戦士に変身してたのかな?!……キューティピュアにしてはちよつと鎧がゴツゴツ

してたけど、かつこいーから問題ないし。それならそれでわくわくしてきた。今度はもつとびしつと決められるようにしないと。

『すまない好香。私は精神生命体であつて妖精ではないんだ。そうだね、ひとまずのアルティメギルの危険性が伝わっているのなら、本題は私の事から——エレメリオンとエレメライザーについてから話そう。』

……妖精じゃないんだ。好きなのになあキューティピユア。

こうしてエレメリオンは話してくれた。属性勇者が何者なのか。どんな使命があるのか。属性共鳴結晶灯が何の為に創られたのかを——。

番外編・ちよつと昔の、とあるとある並行世界のこぼれ話

属性力の負の遺産と呼ばれる精神生命体エレミアン。彼らが徒党を組んだ組織アルティメギルは非常に大規模なものであり、侵略に赴いた並行世界は、我らがツインテイルズの世界、その一人であるトウアール、アルティメギルに身を置いた^イダークグラス^スパーの故郷である世界以外にも多岐にわたる。

——これはそんな世界の1つ——とあるとある世界の話。少し昔のダイジエスト。

舞台は、ツインテイルズの世界で言えば日本という場所。そのつつじヶ丘という街を中心に活躍するヒーローがいた。

変身ヒーローライフを送ることになったツインテール少女の名前はパティモ・E^イS^エ。

始まりはエレミアンが侵攻したその他の世界と同じ。

黒一色のモケモケ^{アル}戦闘員^{テイ}を引き連れた1体の怪物（この部隊ではコウモリ型だった）が世界最高のツインテール属性を求めて適度に街を破壊しながら悠々と闊歩し始めた日のこと。

「探せ……最大の反応値を示したツインテール属性はこの周辺で感知されたのだ。何としてでも我が前に連れてこい!!」

「初見だと極まった世迷言。しかし、気軽に飛行し建造物を破壊する異常がセツトになつていれば、周囲の人間はパニックで逃げるしかない。」

そんな喧騒の中、程なくしてアルティロイドがツインテールの少女を数名捕えてきた。その中で、彼らの目標だった少女が「パティモ・ES」だった。

外見からすると14〜6歳あたりだろうか。捕まる際に一通り抵抗したのか、両手を後ろで抑えられている。本人は勿論、抑えているアルティロイドが「モケ……モケ……」と若干、息切れしている様子を見るにかなり暴れたのだろう。

「おお……!」

怪物——コウモリギルディは息を呑んだ。

紫がかつた黒髪。左右2つのお団子髪ツインポニーテールから伸びる長いツインテール。荒い呼吸で上下する肩に合わせて揺れる髪に目を奪われ、ずいっと顔を近づけてツインテールを凝視する。

「気持ち悪い造形の顔を近づけるでないわ、たわけ!!」

パティモは捕えられている状況にも臆さず、自由になる足で不用意に近づいてきたコウモリ怪人の顔面を蹴りつけた。

「いった！靴底の砂が目に入った!!うおおお!!」

エレメリアンは属性力を伴った攻撃でなければ、ミサイルだろうと地割れだろうと平気。パティモの蹴りそのものは無意味のはずだったが……角に足の小指をぶつけるとかそういうものは、痛いのは痛いのだろう。

上手い具合に砂が目には刷り込まれたらしく、悲鳴を上げて転げ回っている。翼を広げれば全長数メートルはある巨体が小さく蹲って転がる様はシニールである。

「か弱い女子を拉致した身で、その程度で喚くでないわ！さつさと私達を解放せんかこの怪物め!!」

そしてツインテールの少女は、転げ回る怪物の尻をガツガツと蹴り続けている。

「ああつ、ちよつとまって。俺にその属性ないから……！目の砂取れるまでちよつと……!!」

「[[「モ、モケ……モケケー……」]]」

情けなく蹴られる上司と囚われの身と思えない強気な少女。

周りのアルティロイドはどうしていいかわからず、捕まえていた他のツインテール女子まで放置してオロオロと右往左往している。

緊迫した空気が消えている結果、他の女子は逃げてしまい、気付けばパティモ以外のツインテールはその場に誰もいなくなっていた。

「ええいつ！待てというに小娘！！」

「うわっ!!」

ようやく砂が取れたのか、1分ほど蹴られ続けたコウモリギルデイは、勢いよく立ち上がりパテイモに尻もちをつかせた。

キヨロキヨロと辺りを見渡し誰もいなくなったこと、アルティロイドが「大丈夫ですか・・・？」とでも言いたそうにオロオロしているのを確認すると、誤魔化すように咳払いを1つ。翼で体を覆うように腕を組み、わずかに宙へ浮いた。

「ぬうう……何をしているアルティロイドども！もう一度ツインテール達を捕まえてこい!!」

威厳を取り戻そうとしたのか、視線にいたたまれなくなったのか、怒号で指示を出し、アルティロイドを追い払うように散らしたコウモリギルデイ。

視線を足元で座り込むパテイモに戻すと、うつとりと表情を崩した。……訂正しよう、どう見てもニヤついたキモ顔である。

「おおお、やはり美しいツインテールだ……！奪うのが任務とは言え、これで見納めはあまりに惜しい。せめて夜明けくらいまでは、この美をじつと鑑賞したい……!!」

コウモリらしく上下逆さまになったコウモリギルデイは、パテイモの周りをぐるぐる

と旋回する。その視線はずっと、彼女のツインテールに釘付けである。

パティモとしては立ち上がりたかったが、目の前の怪物コウモリが上下逆になったせいで、腰を上げるとスカートの内側が相手に露になってしまうので座ったままでいるしかない。そこを気にするくらいに相手の言動がキモいのだ。見た目はヒーローシヨ一の怪物なのに。

「声と表情をキモくしたまま私の周りを飛び回るな！そもそものなんじゃお前らは!?!口は妄言、行動は怪物。バラバラすぎて殴り倒せばいいのか悲鳴上げればいいのかリアクシヨンに困るわ!!」

「さつきからストレートに外見がキモイは止めてくれ傷つく!案ずるな。傷つける心算は無い。ただ我らはツインテールの輝きが欲しいのだ……あと、ついでに朝まで落ちてける狭いホテルでそのツインテールを鑑賞させてほしいなあって」

ポツと頬を染めて最後の発言をしたコウモリギルデイに再びパティモの蹴りが命中する。しかし今度は平然と宙に浮いたままである。

「外見も中身もキモイと言っておるわたわけ!この、警察か保健所どっちの担当なんじゃこいつ!?!」

「発言が悉く刺してくる!……仕方あるまい。鑑賞できぬなら、名残惜しいがこの場でそのツインテール属性、回収させてもらおう」

蹴りは堪えないが言葉は堪えるらしく、ぐらりと体を揺らすコウモリギルデイ。だが、気を取り直すとパティモの頭上に巨大な金属のリングを投げた。

「……………っ!？」

「おっと。じつとしていてもらおう。案ずるな痛みは無い」

現状のコント以上の危機感を覚えたパティモがその場から離れようとするが、周囲を巡回するコウモリギルデイがそれを許さない。今の今までよくわからない存在だった相手は、はつきりと脅威の障害だという威圧感を放って身を竦ませた。

知っての通り、このリングを潜った者はツインテール属性を奪われ、2度とツインテールを結ぶことが―愛することができなくなる。

この世界で属性力を奪われる最初の犠牲者はパティモ。そうなるはずだった。

「んだよ振られたんじゃないかコウモリギルデイ。だったらその嬢ちゃん俺が貰ってくぜえ」

「ぐあぁー!」

突然聞こえた声。次の瞬間、赤い残像がコウモリギルデイを弾き飛ばし、パティモを抱えて姿を消した。起き上がったコウモリギルデイが見たのは、対象を失い地面に転が

る属性力奪取のリング。そして乱入者の痕跡である赤い蒸気だけだった。

「これは……奴か。どういうつもりだ……!」

犯人に心当たりがあるらしいコウモリギルデイは困惑と怒りのままに地面を踏み砕いた。

パティモは、コウモリギルデイが飛び回っている街の表通りからそう遠くない路地裏に移動していた。その傍らには彼女をここまで連れ出した赤い残像の正体がいる。

「おーおー探してる探してる。ありやぶご立腹だねえコウモリギルデイ」

自分達を探して飛翔するコウモリギルデイを遠目に見ながら楽し気に笑うそれは、赤い体に緑の目をした……蛇のエレメリアン。蛇と言っても手足はあるし、これまた怪人と言った風体だが。

「俺はコブラギルデイ。せっかく助けたんだ。感謝するならしてくれよ嬢ちゃん」

飄々とした態度で接してくるコブラギルデイに対して米神を抑えて息を吐くパティモ。彼女からすれば、ヒーローショーから出てきたような怪物が現実に暴れた上でそれに巻き込まれている現状。理解がまるで追いついていない。

「だから、感謝とかの前に何なのじゃお前は……変質者か本物の怪物かどつちかに

してくれ」

どっちでも困るがセットになっているとより困るのでやめてほしい。対象がおかしいせいで、本来感じるはずの恐怖が絶妙にやってこない。しかしそれが現実である。

面倒臭い物に関わってしまったという態度を隠さないパーティモに、コブラギルデイはますます楽しそうに手を叩いて笑う。その言動がさらにパーティモを苛立たせたが、相手はまるで気にしていない。

「OKOK！大きなツインテール属性にその向こう気の強さ。やつぱりこの世界を守る役は嬢ちゃんがピッタリだ」

「……は？」

説明するよりも先にコブラギルデイは、ある物を投げ渡すと、用は済んだとばかりに彼女から背を向ける。

「あ、ちよつと何じゃこれ!?!」

「んん？属性力……簡単に言えば「ツインテールを愛する心を力に変えて戦う変身アイテム」ってやつだ。嬢ちゃんくらいツインテールが好きなら扱える代物なんだよ」

ざつくりした説明にパーティモは納得……することはなく、コブラギルデイに向ける視線を「面倒くさい」から「胡散臭い」に変えた。

「お前らは世迷言しか言わんのか……？ツインテールを力にとってアホか」

「おいおい助けた恩怪人の言葉は信じてくれよ。それを渡すのが俺の役目。どうだい？あのコウモリよりは、いい奴だろ？」

「よかろうが悪かろうが、まとめてさっさとどっか行け、って言うのが100パーじゃな」

「ハツハハハ！きつついねえ。あの弱メンタルのコウモリギルデイじゃ凹んで当然だあ」

「どンドン辛辣になるパティモをますます気に入った、とコブラギルデイは大いに笑う。」

「あのコウモリギルデイがつるんでる連中は属性力エレメーラで対象を探すから、嬢ちゃんはまだすぐに見つかる。だからよ、自衛のついでに世界も守ってみてくれや。じゃあ頼んだぜ」

言いたいことだけを言うとコブラギルデイは赤い蒸気と共に姿を消した。

立ち上った蒸気に気付いたコウモリギルデイがこちらへ視線を向けたので、恐らくはわざと場所を教えていったのだろう。

「あのへび……わざと目立って逃げおつたな！どうあつても私にコレを使わせようというわけか」

飛んでくるコウモリギルデイと押し付けられた変身アイテムらしい物を交互に見な

がら、選択の余地は無さそうだと理解し、パティモはため息をついた。

——この、とあるとある世界を守るヒーローはこうして誕生したのだった。

——パティモの初戦でコウモリギルデイは倒された。このあたりは重要なことでも無いのでダイジエストだし端折ろう。——

アルティメギルは、侵略対象の世界に敢えて倒せるレベルのツインテール守護者の戦士者を作る。守護者を広告塔に、ツインテール属性を拡散させてから一気に攻め落とすのが常套手段。

その為には倒されるレベルの弱い怪人がある程度、送り出す必要がある。

コウモリギルデイは何も知らない生贄第一号であり、本当に重要な任務を帯びていたアルティメギル所属の怪人はコブラギルデイだったのだ。

変身したパティモに倒され空中で爆発するコウモリギルデイという光景を、カメラに収めるコブラギルデイは上機嫌だった。

「ご苦労さんコウモリギルデイ。いや、仲間を犠牲にする作戦は辛いねえ嫌だ嫌だ。ヒーロー誕生に体を張ったお前さんの勇姿は適当にネットへ流してやるから勘弁してくれよお」

お手本のような言葉だけの謝罪。コウモリギルデイの最期をせせら笑いながら、変身した自分に驚いている。パティモを遠目に眺めて、彼女についても笑いを堪えた。

「俺じゃなくて楽な作戦を気に入ったウチの部隊長を恨んでくれよ？せめて倒されるまでは人気者になれるよう、陰ながらプロデュースしてやるからな。くくつ、俺っていい奴だろ？」

絡んだエレミアンの性格の悪さはさておき、これが、アルティメギルが侵略した世界でよく見られる光景。この世界もそう遠くない未来、属性力を奪われつくし静かに滅びを迎えるはずだった。

そう、はずだったのだ。物事は予定通りに行かないこともある。それは人間もエレミアンも同じなのである。

その世界最高のツインテール属性の持ち主を戦士に仕立て上げる。コブラギルデイは完璧に任務をこなしした。

彼の——この部隊の不幸は、パティモに一人の友人がいたことだろう。

運命が変わりだしたのは、パティモが数回の戦闘を経験し、名前も知らない美少女ヒーローとしてメディアに取り上げられる回数が増えだしたところ。

パティモの家を訪ねる人物がいた……隣の家から。

「ふふ、パティモなんですよ……変身アイテム調べさせてよ……ふへへ」

「……玄関開けるなりなんじゃ。それよりも！隣だからって、もうちよつとまともな格好をしてから外に出てこい!!早く入れ念げ娘!!」

「ふへ、天つ才に身嗜みとか些細なことっていつも言ってるですよ」

——「ツイーカ・RR」。ぼさぼさの銀髪ロングヘアと淀んだ目が特徴。パティモ・Eの隣人で幼馴染、妹分。家に引きこもりがちのダウンナー幼女。

「メディアの映像だけじゃ限界があるからね。本人に直接見せてもらうのがいい。私も知らない未知のシステム……そそられるよね、うふふ」

「それで正体が私ってどこから嗅ぎつけるんじや……相変わらず物騒なちびつ子め」
そして並行世界でも指折りの天才。パティモの変身アイテムから属性力エネメーラの扱いを理解してしまう程の。

「パティモだつて凄いや。幼女ロリじゃないのに私の友達なんて貴重。……隣のおねーさんじゃなくて隣の合法幼女ならもつと最高だったのにな、へへ」

「……幼女趣味の極まった幼女の天才科学者と友達じゃから、年齢相応に育った我が身に日々、感謝しておるわ」

加えて、既に熟練の幼女属性の持ち主であつたりする……。

ツイーカという頭脳が加わつたことで、パティモの変身システムは急速にアップデートが成された。

「この間、パティモに回収してもらつた残骸を解析した強化合金で武器を拡張したよ……ひび」

「ええと、つまり？」

「ツイーカ作の新アイテムの出演。ふへ」

それは武器だつたり

「属性力……興味深いよね。理想のエネルギー。そこから生まれる精神生命体も。デバイスエレメーラの出力アップしたよ、ふふ」

「私にはまだ属性力エレメーラが、今一つピンとこないんじゃないかな」

「理屈は、それが趣味の私が考えるから、パティモの方は勢いで戦つてれば強くなるつてこと。最終的には理屈より感情でいいんだよ属性力エレメーラは」

パティモにはさっぱり理屈で単純なパワーアップだつたり

「このデバイス、基本的な属性力変換機構だからいくらでも拡張できるんだよね……」

弄り甲斐がある、ふへへ。パティモに合う属性エレメーラオン玉が手に入ったら補助動力にして、パティモ専用デバイスが完成できるよ。そしたらちゃんと名前も考えてよヒーロー」

「ええい、わかったわかった!」

「私の完成品を使うからには、もう名無しのヒーローはNGだから、ふふふ」

遂には独自の理論で一步先の改良案を構築し

「いよいよ完成したよ……名付けて【属性解放結晶機エレメデバイザ】。パティモのツインテール属性と補助属性を連動させて出力が大幅にアップした……うへへへ」

「ここまで助けてもらってから言うのも変じゃが、お前、本物の天才なんじゃなツイーカ……」

「当然のこと言っていないでもっと私を称えていいんだよ、ひひひ。パティモに合わせた専用機に仕上げたから使いこなしてよ……ふへ」

「ここまでされては、大船に乗った気でいるのじゃ!としか言えんなあ。任された、ツイーカの凄さはアルティメギルへ存分に見せつけてやろう」

「それに見合ったヒーロ名もね、ふひひ」

「わかったわかった」

アルティメギルの思惑を超えたシステムを仕上げた。

こうしてツインテールのヒーロー【属性騎士エレメナイト】の名前が、とあるとある

世界に広まっていった。

「……ところで補助動力の属性って何じゃ？」

「もちろん女騎士^{レディナイト}属性。触手に弱いくつ殺気質あるでしょパティモは……ふへへ」

「はあ!?! 私にそんな属性^{モノ}あるかたわけ!」

「パティモが持つてる属性じゃないと補助動力にできないから、使えるのが証拠なんだよね……知ってるよエロゲー好きなの。ふひひ」

ツインテール属性の拡散は進むが、予想外の打撃を受けるのはアルティメギルの侵略部隊。

「おいおいおいこれはマズイねえ。俺のプロデュースいらないなこりや。さーて、切り捨てる前提の雑魚ばつかの部隊にしてるウチの部隊長殿に対処できんのかね?」

コブラギルディはエレメナイトの活躍を横目に他人事レベルで頭を抱える。部隊は全滅するかもしれないが、焦りで余裕が消えていく部隊長を見るのは楽しいので。

——これは、とあるとある世界のダイジェスト。^{属性}エレメライザー^{男性}が開発^{生まれる}される世界

の、ほんの少し昔の零れ話。

第10話

精神生命体エレメラリアンの一大組織アルティメギル。彼らは様々な世界を侵略し、属性力を奪いつくし滅ぼしてきた。

もちろん侵略された世界にも、最強の属性力であるツインテール属性の戦士というツインテイルズ同様の守護者たちがいたのだが、その多くは自分の世界を守り切れずに滅びを許してしまった。

そんな、アルティメギルと攻防を繰り返す数ある世界の一つで創られたものが属性共鳴結晶灯と属性勇者だった。

【属性共鳴】。その言葉通り、使用者とエレメライザー中枢の属性を共鳴させることで出力を増すデバイス。

—開発者曰く、「他 人から貰っただけの属性力じゃつまらないんだよね、うひ。進歩するから科学は面白いんだよ……えひひひ」

その機能中枢に、あらゆる髪型属性と親和性のある髪変え遊び属性の属性玉を使用。これにより、ツインテール属性以外の人間でも——或いはまだ属性が芽生え切っていない

い対象にさえ共鳴し、ツインテールの戦士同等以上の存在に変身させる大いなる切り札。

— 開発者曰く、「自分がより深く沼に沈むも良し、他人を布教して沼に沈めても良し、のお得品だよ、うひひひ」

ツインテールの戦士に授け強化することも、或いは共に戦う仲間となることも適う希望の灯。

変身システムは、^{エレメーラ}属性力より結晶化するエレメリアの身体組成から発案、構成。

併せて^{エレメーラ}属性力の制御、及びエレメライザー本体の悪用を封じる為に管理人格AIを設定。

この2つの機構を連動させることで、^{エレメライザー}属性共鳴結晶灯そのものを1つの疑似精神生命体に構築——結果としては「連動」を超えて複雑な融合を果たし、想定以上の自己修復——もはや自己治癒力と言うべきものさえ備えた「生きたアイテム」が創造された。

— 開発者曰く、「正義のマッドサイエンティストは、ぼろつと偉大な発明ができたりするんだよね、うひひ。制御AI付の変身デバイスのつもりだったんだけど、独自の思考と嗜好を備えた機動精神生命体になったと言うべきかな、ひひ。え^{エレメーラ}属性力は未知の領域が多いね昂る、いへへへ」

こうして^{エレメライザー}属性共鳴結晶灯に宿った新たな精神生命体は、^{エレメーラ}属性力の負の遺産エレメリア

ンに対抗する為のエージェント、「属性勇者エレメリオン」と名付けられた。

— 開発者曰く、「エレメリオンは性癖ゆめのヒーロー。ちゃんと自分の属性こしょうに正直に相棒を選んで、エレメリアンからみんなの趣味きぼうを守るんだよ、ひひ。そしていろんな世界でエレメライザー私の発明を見せびらかしてくるんだよ……くひひひひ」

『そう、私はある意味で活性体シルエツトを持たないエレメリアンとも言える。属性共鳴によって変身者エージェントの第2の属性玉エレメリアオーブとなり、通常のエレメリアンならば活性体シルエツトを結晶するプロセスで変身者エージェントの強化と鎧の結晶を——好香、どうかしたかい？』

「ごめん。ぜんっぜんわかんない……」

私はいつの間にか抱いてたぬいぐるみを横に置いて、かわりに頭を抱えてた。なにがなんだか、こんがらがってずつーがする……。

エレメリオンは自分がどーゆー存在なのか、きちんと説明してくれてる。でもねー、悲しいことに私の頭じゃ、ほとんど意味が分からなかった。特にエレメリオンの体がどーのこーのって辺りがさっぱりわかんない。

『すまない好香。私がちやんと分かるように話すべきだった。』

「ううん、私が馬鹿でごめん……できれば大事なことだけでも、もーちよつと分かりや

すくオネガイシマス……」

「いちおう小学3年生としては平均的なつもりだったんだけどな……どのテストだって50点くらいをキープしてるんだよ。え？半分の点だしへーきんでしょ？……ちい姉に言つた時は、なんかだまって顔かくしてたけど。うーむ、自分で思うより頭悪いのかな私。」

『確かにそうだね。私の構成要素やエレメライザーの機構設計は、好香の年齢には難しすぎるものだったか……。わかった好香、余分なことは忘れくれ。』

『エレメリアンに対抗する為に異世界で創られた変身アイテム「属性共鳴結晶灯」^{エレメライザー}。私は、そこに搭載された管理人格「エレメリオン」。あらゆる世界をエレメリアンより守ることを使命とする、^{マグニフィセントエージェント}「崇高なる代理人、属性勇者」のコードネームを与えられた者だ。』

おお……むつかしいとは、はぶいてくれた。これなら分かりやすい。

「じゃあ、エレメリオンは別の世界から私たちを助けに来てくれた、ヒーローで変身アイテム、でいいの？」

『その認識で構わない。好香の言う通り、私はあくまで変身アイテム^{エレメライザー}でもある。変身した時にも言つたけれど、訪れた世界で選んだ変身者^{エージェント}の力となる存在であり、共に戦ってくれる者が必要なんだ。』

変身する人がいないと駄目で、それが私かあ。やっぱりキューティピュアと変身アイ

テムになる妖精みたいに思ってもよさそう。つまり魔法の力じゃなくて、すごそーな科学の力だから鎧ぼい感じで変身するってことだね。なるほど。

「……でもエレメリオンはさ、なんで私をえらんだの？」

エレメリオンのことを教えてもらったら、気になることもまたでてきた。

話を聞いてると、エレメリオンはいろんな世界に行つて、そこで変身者エージェントを見つけて、その人たちといっしょに戦つてる。いっしょに戦つて、最後に想いを託されて、また新しい世界を守る旅に出るって。

「私、すぐには力を出せなかつたよ？ちい姉のツインテールは好きだけどさ、その、自分の『大好き』……属性？もまだよくわかんないし。それこそ私よりちい姉の方が強そうだと思うんだけど……」

ツインテール属性がいちばん強いらしいし、それならぜったいちい姉ツインテール属性あるよね。ずーっとツインテールだし、力だつてスーパゴリラだよゴリラ。

それなのになんで私？エレメリオンがそんなにいろんな人と変身してきてるなら、私は今までの変身者エージェントさんたちみたいになさくなくないと思うんだよね。私をヒーローにえらんでくれた理由がよくわかんないや。

『その通りだ。属性力エレメーラの強さなら好香のお姉さんの方が上だ。かつての変身者エージェントたち

も、好香より強い属性力エレメーラの持ち主はいた。だが、それは現時点の話だ。』

『私は力の強さで変身者エージェントを選んでいない。属性力エレメーラとは力の指標ではない。その本質は“大好きなものがある”という思いの強さなんだ。私は好香の心で変身者エージェントに選んだんだよ。』

「だけどその“大好きなもの”がはつきりしないんだよ私。それなのにいいーの？」

『まだ属性が芽吹いていないということは、これから“どんなものをどれだけ好きになるのか”、そこに無限の可能性が広がっているということさ。初めて出会った時、私は好香の“可能性”が結晶して花開くのを見たいと思った。好香の可能性を、未来の属性を守りたいと、幼女好香と共に戦いたいと思った。』

うわわ、こんなまっすぐに言われると、こうなんていうかその……ちよつと照れるじゃん。世界を守る勇者さまにほめられるのってうれしーんだけど。

「えへへ……そんな何でもできる何でもなれる、みたいにエレメリオンから言われると、その、はずかしいなあ」

『謙遜する必要はない。本当に好香は、これから何だつて好きになれるし何にだつてなれるんだ。それに、お姉さんのツインテールが“大好き”だと意識できた時の好香の力フィーストバーク—極限出力の力は、決してかつての変身者達エージェントに負けてはいない。これも好香の無限の可能性が素晴らしいものである証明だ。』

もー、エレメリオンに力強く言われた、その気になってきちゃうじゃん。やつぱり、ちい姉やティルブルーとちがうタイプだけど、エレメリオンもかっこいいなあ。今はただ小さいライトから声出てるだけなのに、自然と、あの空で助けてくれた姿とお話してるように思えちゃう。

うう、もーいつかいぬいぐるみ抱きしめなきや。だって、ぬいぐるみでかくれないと顔が熱くなってきたもん……エレメリオンずるい。

『そうだね、もっと噛み砕いて言うなら……変身者^{エージェント}は私の好みで選べるから、私の嗜好で好香を選んだということさ。』

「……多分そのかみくだいた説明は無かった方がかっこよかったよエレメリオン」
『え。』

私がかまったから、気を使って、もっと分かりやすくしてくれたんだと思うけどお……その言い方じゃさっきまでのかっこいいふんいきが台無しだよエレメリオン……ちよつとドキドキしてたのに。

「あれ？初めて出会ったって……エレメリオンと私っていつが初対面なの？」

「これはかっこいいふんいきが消えちゃったおかげで、そのままスルーしそうになって

たのを気付いた、けがのこーみよーかな。

だって、エレメリオンと直接会ったのは今日だと思っただけ。でもその前から声は聞いたし、夢に出てきたりポケットにエレメライザーが入ってたりしてるとだよね……うーん？

「そーいえばエレメリオン、ちい姉のことも知ってるみたいと言うよね。エレメライザーはいつの間にかポケットにあっつし……夢で話しかけてきた時からもう家にいたの？」

『好香は、私といつ出会ったかは思い出してなかったのか。わかった話そう。……今となつては、私たちが出会ったきつかけはロックチヨウデリットとも無関係では無いのかも出来ない。』

え、軽い気持ちで聞いたのに、なんかまたオオゴトみたいになつてきたどうしよう。いくらエレメリオンが分かりやすく説明してくれても、聞かなきゃいけないことが多すぎる気がしてきた。

『思い出していないなら、好香は私と出会ったのは、この数日以内だと思つているのかもしれない。そうではないんだ。』

「え？え？ちがうの？じゃあもつと前に……？それいつのことなの!？」

思つてたいじよーの昔に会つてますと言われた。びっくりしてベッドに身をのり出

してエレメライザーつかんじやった。

でもでも、私ってばそんな前からヒーローにえらばれてたの!?!?!?!もしかしてツイイン
ティルズよりせんばいだったり?!?!?!それだったら、もつとせんばいっぽくツイインティ
ルズにしゃべった方が良かったのかな。

『あ、出会ったのは以前だけど、変身者エリオンに選んだのは比較的、最近だよ。』

顔に出てたのかな。思ってたことそのままダメだしされた。なーんだ、ヒーローに一
発スカウトされたんじゃないのかあ。

『私と好香の出会い。それは——』

『それは——!?!』

「ただいまー」

ええー……玄関からちい姉の声。まだ話のとちゅうだったのに帰ってきちゃった
んだ。せつかくエレエリオンといつ会ってたのか聞けるところだったのにい。

「どーしよエレメライオン……ちい姉、帰ってきちゃった。このままお話しすると気配
でエレメライオンのこと気付くかもしれないよ、ちい姉なら」

ちい姉って野生どーぶつかってくらいに周りの気配感じたりするからなあ。自分の
部屋でもエレメライオンと話すタイミングを考えなきゃいけないんだよね。どーせ野生

どーぶつならもつとどん感なやつになればいーのに、これだからちい姉は。

変身するのバレたら心配するだろうし、もしかするともんどーむよーでエレメライザーぼつしゅーされちゃうかもしれないし……まだわかんないこといっぱいだけど、変身したその日にとり上げられるとかイヤだもんね。エレメリオンとだつて、もつとお話してみたいし。

『好香にエレメライズしてもらった以上、ご家族にも挨拶しようと思つていたんだが……好香がまだ隠していたいならそうしよう。私たちの馴れ初めや残りの話も、そう急ぐ内容は残つていない。それでは、また今度にしよう。』

「あ、うん」

あれ。すんなり話を切り上げてくれた。急がなくてもいーんだ……なんかひよーしぬけしちゃう。

もうエレメライザーの光も消えちゃった……行動が早いなあ。私はまだお話のつききも聞きたいけど、ちい姉に見つかるのもまずいし……つてまよつてたのに。

それにしても変身アイテムの妖精みたいな感じなのに、おねーちゃんたちにあいさつするつもりだつたんだエレメリオン……てつきり、こーゆーのは秘密にするパターンだと思つてたのに。

とにかく今はまず、ちい姉にエレメライザー見つからないようにしなきゃ。いつもの

散らかして感じる感じでランドセルおいて、枕を元にもどして

「とりあえずエレメライザーは……枕の下にかくしとこ」

これでいいかな。エレメライザーをかくして一息ついたら

「好香ー? いるのー?」

ノックと同時にドアを開けて制服のちい姉が入ってきた。な、なんで!? まさかもう気付いて……!?

「もー! こつちが返事するまで開けるのまつてよ!! ちい姉は私のぶらっぱしーを考えないんだからー!!」

さいしよの一步いじよーはちい姉が入れないように、両手を広げて通せんぼする。そしたら、片手でむにゅつと顔はさまれた。なにすんのよ。

「なーにがプライバシーよ? どの口が言うんだか、んー?」

「あぶつ? むむむくくく!!」

「そーゆー一人前のセリフは、家に一人なのいいことにちい姉のお部屋で勝手に遊ばないようになってから言いなさい、よ・し・か・ちゃ・ん」

「あいたつ」

とつきにしたこーぎを鼻で笑った上に、おでこつついて尻もちつかされた。ぐぬぬち

い姉めえ。

「帰つてもあんたが出てこないから、まーたあたしの部屋でイタズラしてんのかと思つてね。そうしたらちゃんと自分の部屋で気配がするから確認しにきただけよ」

……やっぱり気配を読んでるじゃんちい姉。野七いぶつエレメリオンの素早い行動は正解だったんだね……部屋の中をじつと見つめられるとバレないかとちよつとドキドキするもー見にきただけなら、早く出ていってよお。

——でも、ちい姉の顔を見てたらなんか安心してきた。今日も朝から見てる顔なんだけど、ものすごい体験したせいかなあ。めちやめちや久しぶりに会えた気持ちになっちゃう。

「え、ちよつとどうしたの好香？」

気が付いたらちい姉に抱きついてた。やっぱりベッドに寝ころがってる時より、こーしてる方が落ち着くかも。

「えへへ、べつつにー。今日はいろいろあつたからー？ちい姉ポイントほきゆうしたいなーって」

「なによそれ？朝はあんなにむくれてたくせに」

意味がわかんない、って感じをちい姉がしてるけど、部屋にきたならこれくらいされ

てよね。私なんか、今日、怪物へんしつしゃに抱きつかれたんだからね。

あう、なんか思ってたよりずっと気持ちが悪くなってきた。ちい姉のニオイがする……もーちよつとこのままにさせてちい姉。

「いーじゃん、朝は朝なーのー。今はちい姉といっしょがいいの……」

「そんなしガみつかなくてもいいでしょ。わかつたわかつた好香の部屋には入らないわよ。ほら、動けないでしょ離して」

部屋にいれないようにごまかしてると思われたのかな。あきれた声のちい姉に、腰に回してた手をつかまれた。力じゃちい姉にかなうわけもないしダメかあ。もーちよつとこうしてたかつたのになあ。

「……面倒ね、しよぼくれた顔してんじやないわよ。はいはい。それじゃあたしも好香ポイントでも補給しよつか？」

「え？わっ」

腰に回してた私の手を簡単にといたら、ちい姉はちよつと考える様子で、じーつと私を見下ろしてきて——抱き上げてくれた。

「あたしも今日はいろいろあつたのよ。どうせ引つつかれるなら好香で上書きしてもいいかなってね」

「なにそれ？」

「チビスケにはわかんないことよ。ちい姉の気前が良い日でラッキーだつて思つてなさい」

んん？どーゆーこと？ちい姉もなんかあつたのかな？それとも私の好きなようにさせてくれるだけ？けど、イジワルしてきてもこーゆーことするから、ちい姉はズルイつてゆーんだよ、かつこい。

お言葉にあまえて、ぎゅつとちい姉の胸に顔をよせた。

「うううだからちい姉ずるいよね……だいきき」

「はいはい。大サービスよ今日は好きにあたしの部屋いてもいいから。……いつもこれくらい素直なら、もうちよつと優しくしてあげるのよ？」

「……それはちい姉がいつも、はんせーしないからだもん」

「よーし。妹に改善の意思が無いので、ちい姉は優しくなりませんでした」

せいとーなしゆちよーをしたのに、ちい姉の部屋に入ったとたん、私はベッドに放りなげられた。もー！せつかく見直してるのに、かわいい妹のあつかいをすぐ雑にしないでよ。

「わぶつ。だーからー！こーゆーとこでしよちい姉！」

「あたしが言ってるのはそーゆーとこよチビスケ」

私の方を見もしないで着替えだしてる……なによなによ。でも、ちゃんと部屋に入れ

てくれてるあたりは……優しいもんちい姉。こーやって、代わりに枕たたいても何も言わないでくれてるし。

「何よ？ニヤニヤとこつち見て」

「ふふん、スタイルならもうすぐちい姉に勝てるなーって思ったただけだもふえっ!!」

脱いだ制服なげつけられた。しかもボタンがおでこに当たるよーにねらったなちい姉！いったあい！

「すーぐつけあがるんだから。その減らず口なら大丈夫そうね……にしても家でも外でも生意気なチビスケが面倒な日だわ」

下着姿のちい姉が、なんかぶつぶつ言ってるのはよく聞こえなかった。それより、おでこ押さえてもだえてる妹スルーして着替えてるんじゃないわよちい姉めえ……！

「迫力も無いのに睨むな睨むな。で、いつも忍び込んでるあたしの部屋でなにしたいの?」

部屋着に着替えたちい姉は私のとなりに腰かけて、肩を抱きよせてくれる。ちい姉のお部屋でしたいことがあるっていうか……

「……もーちよつとこのままがいい」

もーいつかい、ぎゅつとちい姉胸に抱きついた。今はちい姉といっしょにいたくなつたの。

「ほんと朝と違つてやけに甘えてくるわね。何？学校で怒られでもしたの？」

「そーゆー気分なだけだもん」

「あつそう。暑いんだから、気が済んだら離れなさいよ？」

あつくるしいとかいーながら、頭なでてくれる、えへへ。ちい姉がリクエストに応えてくれるから、エレメリオンと話のつづきをするチャンスが来るまでは、ちい姉のとなりでいやされてようと思います。

第11話

結局、ちい姉が帰ってきてからはエレメリオンと話するのは無理、と判断して。それからあつという間に夜。

で、私はまたちい姉のお部屋に足を運んでるんだけど。

「あんたねえ……何のつもりよ？」

困った顔で見下ろしてくるちい姉がいます。

何のつもり、ってこっちのセリフ。私はパジャマで枕持ってきてるでしょ。だったら理由なんてひとつじゃない、わかるでしょ。

「今日はちい姉といっしょに寝たいなあって……いいでしょ？」

もうっ。言わせんなはずかしい、ってやつだから。だって、今日は好きに部屋にいいいつて言ったのちい姉だからね。

エレメリオンとお話するチャンスをうばわれてるんだから、これくらいはバチは当たらないでしょ。

なのに、ちい姉は大きいため息をついたら、腰を下ろしてじいっと私の顔をのぞき込

勢いでたのみこもーとしたら、ちい姉がふき出して尻もちついた。顔も真っ赤になつてるし……何？

「な、な、ななな何言つてんのよチビスケ！あたしがいつそんなこと——」

「えー？最近、毎日のよーに行つてるじゃん総二兄のお部屋。あんなにドカンドカ音してるから何回か起きたことあるもん」

ホントのコト言つただけなのに。ちい姉、座り込んだままめちや後ずさりしてる。何でそんなあわててるんだろ？

いつも私に夜ふかしするなーつて言ってるくせに、自分が夜起きてるのがばれたの、そんなにはずかしいとか？

「かくさなくてもいーじゃん。ちい姉の夜ふかしはふかこーりよくじゃない？トウアールさんのけんせーでしょ？」

「いやその違うーか、勘違——いしてないのね。そうそうそれよ！トウアールのせいだから……あーびっくりした。そうよねまだ早いチビスケなんだから慌てるんじゃないか」

後ずさりしてたかと思えば、肩つかんできて言い訳しようとして勝手に正氣に戻つて……私がどんなかんちがいてると思つたんだろちい姉。

ただ勝手にごかいしたクセに馬鹿にされてる気がするのは、おもしろくない。

「そのチビスケと同じ体型だからずっと残念なんですよ」

「うるさい」

けっこー強めにほっぺ引っぱられた。痛い。

「と、とにかく！知ってるんだったら、ホラ、あたしがベッドから出入りしてたら起こしちゃうかもしれないでしょ？一緒に寝るならお姉ちゃんのほうがいーんじやない？」
こほん、と咳払いして仕切り直してきたちい姉は、自分よりもおねーちゃんをおすすめしてくる。

ちい姉のゆーことはわかるんだけど、今日あったいろいろの内容的には、ほら、優しいおねーちゃんよりスーパーゴリラのちい姉のが安心できそーってゆーか、ねえ。……これ言ったらちい姉たぶん怒るし言えないからどーしよ。

「うー……それでも今日はちい姉の方がいい」

これだけでも言ってみたけど、ちい姉はまだちよつと迷ってそう。

おとなしくおねーちゃんのとこに行ってみた方がいいのかな……って思ってきたとこで、なんかちい姉の表情が変わった、ってゆーか私の後ろ見てる？え？なに？

気になって振りむいたら——階段から顔半分だけのぞかせてこっち見てるおねーちゃんがいいた。

「あらら、好香にふられちゃったー」

なんて笑ってる。え、いつから見てたのおねーちゃん。

「おねーちゃん？」

「いいのよいいのよ。おねーちゃんは愛香に甘える好香も、好香を困った顔して甘やかす愛香も大好きだから。おねーちゃんにはまた今度、甘えてねー好香うふふ」

言いたいことだけ言つて引っこんじやった。ちよつと、ほんといつから見てたのおねーちゃん。あんなこと言われたら急にはずかしくなつてくるじゃん、顔が熱くなつてきた。

「あーもお姉ちゃん。優しい顔してすぐ好香をからかうせに肩持つんだから。で、どうしよつか好香？」

ちい姉がどこかあきらめた様子で聞いてくる。けど、あんなおねーちゃん見たら聞かなくてもわかるでしょちい姉だつて。

「……ぜつたいちい姉といっしょがいい」

とーぜんでしょ。今おねーちゃんのとこ行つたら『あら、どうしておねーちゃん選んでくれたのかなー?』とか、からかつてくるに決まつてるもん。ぜつたいにちい姉といっしょに寝るから。

今のおねーちゃんのどこ見て、私の肩持つてるとか思うのちい姉は。

「ま、そうよねえ。お姉ちゃんにからかわれたチビスケは意地張って、そーなるわよね、はいはい。……そーじに何事も無ければあたしもベッドから出ないんだし、優しいちい姉は甘えんぼの要望に応えてあげますよーだ」

私がおねーちゃんの降りてった階段をふくれっ面で見ると、ちい姉がベッドに運んでくれた。ちい姉までちよつと笑ってるように思うのは気になるけど、いつしよにベッドに入ってくれたから許してあげよーじゃない。

ちい姉の温かさが、となりで感じられていい夢が見れそう――。

『やあ好香。』

――ちい姉といっしょにベッドに入ったと思ったら、誰もいない総二兄のお家の喫茶店でエレメリオンと向かい合って座ってた。なるほど、夢はこれか……

『ご家族がいる前だと私に話しづらそうだったので、また夢を繋げさせてもらったんだ。一度エレメライズしたことで、夢が繋がる時間も伸びているからね。』

前の時とはちがつて、エレメリオンが光の球じゃなくてちゃんとした姿で座ってる。おとなりのおにーちゃんの喫茶店にヒーローが座ってるのも、これはこれで変な感じだ

なあ。

「夢でお話しできるって便利だね。それでそれでどんなお話？」

おつといけない、ついテーブルに体を乗り出してつめよっちゃった。だつてさ、前はただの夢だと思ってたけど、不思議な夢ってちゃんと分かっていると、ワクワクする。そりゃ、いろいろてんこ盛りの一日がちよつと怖くなつて、ちい姉に甘えたくなつたりしたよ？けどそれはそれこれはこれってゆーか。異世界とかヒーローのお話とか、楽しみになるじゃんフツ。

おまけに、「確か急ぐお話はもう無い」って言つてたのにこんなことするってゆーのも、何か言い忘れたことがあるのかもしれないし。ふふ、なんかテンション上がってきたかも。

「夢でヒーローとお話つてゆーと……早い気もするけど強化アイテムとか!？」

『ロククチョウデリットについてだ。』

「ああ、そつちね……」

上がったテンションがちよつと下がった。なんだあ、あの変態鳥オバケのことかあ……あいつが今日で、いっちばんいらんない思い出なんだよねー。

『好香が期待していた話題では無いのは、すまない。だが、アレは生態としてはあくまでエレメリアンだが、アルティメギルでは無い。今後の為に、彼ら——【スプレムステ

リット」について知っておいてほしい』

「あやまらなくてもいいよ。エレメリオンが教えてくれるってゆーなら大事なことな
んでしょ、わかつてる」

また知らない単語が出てきた。とゆーことは、むつかしーお話か知ってた方がいいお
話だ。鳥オバケについてはいらぬ思い出だけど、忘れていい思い出じゃない。あの危
ないやつについてのお話ならちゃんと聞かないといけないよね。

「そーいえばいつもテレビで見てるアルティメギルと名前もちよつとちがうねロック
チョウデリットって。それもあいつが変なやつだったから？」
アルティメギルだって、どれでも変なやつだけどさ。

『その通りだ好香。ロックチョウデリット——彼らスプレムスデリットとは——』

光のまったく差し込まない完全な暗黒の空間。全方位が闇一色の中に一点だけ浮か
ぶ白いシルエットがあつた。

その正体は——ロックチョウデリット。倒されたはずの彼だった。

「ウ……オオ——ハッ?!」

黒い世界を漂うだけだったロックチョウデリットは、程なく意識を取り戻し身を起こ

した。

「ここは一体……？ 私は確か」

死んだはず、という考えは、全身を亀裂と共に奔る痛みが否定している。だが覚えて
いる最後の光景は、この身を焼き尽くす程の閃光。それが夢でないことも、自慢のス
カートや翼が焼失していることが伝えている。

「何故だか分からんが間違はなく私は生きています。ならばこの闇は何処だ……？ 精神
生命体に地獄でもあるまいに」

完全に立ち上がった（と言っても上下の感覚さえ無い空間だが）ロックチヨウデリッ
トは、周囲を見渡し脱出口を探す。如何な偶然でこんな空間に落ちたのは分からない
が、いつまでも留まる理由は無い。さっさと抜け出し、適当に属性力を食い漁って身体
を回復させるに限る、と思考を切り替えた。

「いや、地獄で間違っておらぬぞ」

一步を踏み出そうとしたロックチヨウデリットに、届けられた肯定。そして共に伝わ
る強大な属性力。
エレメーラ

「あのような可愛らしい幼子の初舞台を失敗させるのは気が咎めたのでな、こうして
手間暇かけてお前を招待したのじゃ」

「何者だ！どこにいる!？」

声の主を探してぐるぐると首を動かす魔鳥を嘲笑うかのように、暗黒空間に∞を描いた光が走り、新たなシルエツトが降りたつ。

おさげのようなツインテール。周囲の闇よりも漆黒の鎧、しかしそれを照らして支配する双眸に輝く眼鏡。

「はぐれ者には名乗ってやらねば分からぬか？わらわはダークグラスパー。アルティメギル首領直属の戦士」

「ヌウ……貴様があの闇の処刑人の小娘だと……!」

「ほお、組織に身を置かぬはぐれ者にしては耳聡いではないか」

目の前に現れた黒い少女から距離を置き身構えるロックチヨウデリット。彼にとつて、エレミアンの組織であるアルティメギルの処刑人が人間であることに、驚きは無かった。聞いていた通りだから。

問題は、相手が自分への殺気を隠していないこと。そして肩書に見合う実力者だと明らかになった。この闇の空間も恐らくは眼前の少女が創り出したもの。そう納得させるだけの属性力エレメーラをダークグラスパーは発している。

「だが今さら身構えてどうする？翼をもがれた鳥に何ができると？」

緊張するロックチヨウデリットを、対照的にダークグラスパーは冷笑する。彼女の言う通り、ロックチヨウデリットは満身創痍。そもそもがこの空間に引き込まれなければ、マグニフィセントバスターで消滅していたのだ。最初から戦うどころの状態では無かった。

「さてと、わらわも勿論知っておるぞ。貴様たちスプレムステリットのことはな」

そうでなければわざわざ死の淵より呼びつける理由は無い。ダークグラスパーの顔を彩る眼鏡のレンズが、キラリと光を放つ。

「どこぞで生まれたのかは分からぬ、或いは発生地も定まっておらぬのか？ともあれ、アルティメギルに属することを選ばなかったエレミアン。未だに食らう属性の選り好みもなく、ただ野放図に属性力エレメーラを奪い歩くだけの愚か者。精神生命体の生みの親と言える人間への敬意も忘れた、喋る獣の集まり……と言ったところじゃったな」

精神生命体エレミアンはどこで生まれどこから来るのか。年月を経て徒党を組むことを覚えたエレミアンは、いつしかアルティメギルという組織を作った。

—では、全てのエレミアンがアルティメギルに就くのか？

—勝手気ままに動くことを好とした者がいたら？

—巨大組織アルテイメギルの勧誘も追撃も撥ね退ける程の突出した戦闘力の者たちが生き残り、各個に散つていたら？

「……違うな。己が属性は勿論、有象無象の属性も全てを貪りつくしてこそエレメリアン。数を揃えてツインテールに縛られるアルテイメギルが何だというのだ？我らスプレムステリットこそが正しきエレメリアン！人間に触れることすら厭わぬ属性力より出でた真の魔人よ!!」

—そんなはぐれ者の猛者たちはいつしか謳った。自分達こそ、より上位の精神生命体だと。人間への敬意も属性力エレメーラの盛衰も歯牙にもかけない、ただ衝動に従い属性力エレメーラを食いつくす純粹なる精神魔人「スプレムステリット」だと。

「翼無き鳥崩れが囀るでないわ。最低限の一線さえ踏み捨てた貴様らが矜持を語るなど片腹痛い。わらわがお前を生け捕った理由は一つ……何名がこの世界に目を付けた？さつさと答えよ」

吠えるロツクチヨウデリットをダークグラスパーは意に介さない。自分の問いにだけ答えろと命令する。

「……ッ！ぬかすな小娘が！誰に向かって物を言っている!!」

エレメリオンが力を与えた戦士も眼前のダークグラスパーも、たかが人間の小娘が自分を下に見ている。スプレムスデリットである自分を。

その事実逆上したロックチョウデリットは己の状態も忘れ、ほぼ燃え尽きた翼を広げて黒衣の少女に飛び掛かる……飛び掛かろうとした。

「又グッ、これは……!?!」

「己のダメージすら忘れるとは頭の出来も鳥そのものか貴様は？あまりに遅すぎてメールが十件も送られてしまうたわ」

ロックチョウデリットが一步を踏み出すよりも先に、その身は相手が背中より抜き放った武装である暗黒の鞭―ダークネスウィップに縛り上げられた。

呆れるダークグラスパーの言葉通り、彼女の右手には暗黒鞭、左手には携帯電話が、恐るべき早業で瞬時に握られている。やはりアルティメギルの処刑人。満身創痕のロックチョウデリットが戦える相手では無いのだ。

そしてこの粘着質の上司から、通常の恐怖メールとは別に突然のメール爆撃を受けたとある白鳥のエレミアンは、悲鳴を上げてアルティメギル基地内で倒れた。

「さて。考えなしに暴れ回る貴様らは、鉢合わせすると我らの侵略作戦を引つ掻き回

しよるのが常。この世界はツインテールの戦士たちに骨があつてのう、余計な手間を増やしたくないのじゃ……今一度、問うてやろう。己が身の状況も弁えた上で口を開け。貴様らのうち何匹がこの世界に目を付けておる？」

仕切り直しと言うように、黒鎧に覆われた指が眼鏡のブリッジをなぞる。そのレンズは虚偽を許さない、偽りなど意味を成さずに真実を見抜くと告げる輝きを見せている。ロックチョウデリットを縛る鞭は、徐々に締め上げる圧力を増し、答えなければこのまま輪切りにするだけと、無言で宣告していた。

ロックチョウデリットを始めとする彼らは「スプレムスデリット」などという集団名称こそあれど、実態は組織立っていない寄り合い所帯。それ故に各個の行動予測が難しく、かといって放置すれば、その戦闘力で遭遇した部隊が少なくない損害を被る、アルティメギルにとつても悩みの種だった。

当然の排除対象ではあるが、闇雲な迎撃で損害を増やす前に、生け捕りにして情報を聞き出せるチャンスがあるなら活用したい、というのがダークグラスパーの思惑だ。

「貧相なレンズを取り換えてよく見るがいい小娘！この偉大なるロックチョウデリットが人間やアルティメギル如きに頭を垂れると思うなあっ!!! スカー!!!!!!!!!!!!」

ロックチョウウデリットが怒りの咆哮と共に全身から属性力を放出し、身を縛めていた鞭を弾き飛ばす。その背には、焼失した翼を補い属性力の光が、翼を形作っていた。自分達が頂点であるという自負心が、瀕死の身であっても、ロックチョウウデリットに敗北を認めない服従を受け入れさせない。

「フーツフーツ……貴様から属性力を奪いつくして傷を癒す。そしてこの空間から脱出し今度こそその世界からも属性力を奪う……それ以外にない!!」

満身創痍の身に負荷を無視した力の解放を加えたことで、息を荒げながらもロックチョウウデリットはダークグラスパーより上空に陣取り相対する。

一方、ダークグラスパーは血走った眼で見下ろしてくるロックチョウウデリットを、更に呆れた視線で持つて射抜いた。

「おお、まだそんな力を出せる気概は誉めてやろうぞ。じゃが、身の状況を弁えろと警告はしておいたぞ……?」

プライドが高いのは勝手だが、彼女にとっては尋問に余計な手間がかかるというだけでしかなかった。万全の状態ならいざしらず、事実はアルティメギル最強の処刑人と瀕死のエレミアン一体でしかないのだから。

「スカー……」

「やれやれ。捕えた野鳥の躰に手間がかかるのも道理ではあるな……まあよい次の予

定も鳥じゃ、予行演習とするか」

突撃するロックチョウデリットに向かってダークグラスパーの眼鏡が怪しく光る。

「眼鏡カオシックインフィットよりの無限混沌——」

『——アルティメギルとは混同されるのを好まず彼らは「デリット」という呼称を、そしてロックチョウデリットの例にあるように、通常のエレメリアンよりも籠かごが外れた性質……彼らは「原始の魔性を失わぬ真のエレメリアン」などと自称している。が、実態としては——あ、どうも。』

エレメリアンが説明してくれてたら、誰かがテーブルにお水持ってきた。

「あれ、未春おばさん？」

顔上げたら、そこにいたのは未春おばさんお店のマスタ。さっきまで、私とエレメリアンしかないな

かったのに、いつの間にか

テーブルにお水置いた未春おばさんは何も言わずに、お店の奥にもどっていつちやつた。

『ここは夢の中だからね。この場所アドレシエンツアへの好香のイメージが反映されて、店長さんも登場してきたんだろう。』

未春おばさんを見送ったエレメリオンが、コップのお水を飲み干しながら説明してくれる。私が、アドレシエンツアは未春おばさんのいるところ、って思ってるから夢の中でも出てきたってことね。

それにしてもエレメリオン、どうやってお水飲んだんだろう？ ヘルメットみたいな顔で口とか見えないのに。

「でも、ちよーどよかったかも。げんしのましょーがー、とかよくわかんなかったし。いったん整理させてほしーのと、もーちよつと分かりやすくせつめーしてほしーかなーって……えへへ」

私もお水飲みながら、小さく肩をすくめてごまかすよーに笑った。話のちゅーだけど、また思ってたよりよくわかんない言葉もあつて、一気にせつめーされると頭が追いつかない気がしてきてたから。

……もしかして、未春おばさんが出てきたのそのせーもあつたりしたのかな？

『すまない好香。また話し過ぎていたようだね。それでは少し休憩しようか。すみません、注文いいですか？』

エレメリオンがきゅーけーいれてくれた。あ、声かけたら未春おばさんお店の奥から出てきた。

『それでは、イチゴのショートケーキをーつずつで。』

エレメリオンがメニュー開いてちゅーもんしてくれてる。夢の中だけど、ケーキ食べ
てちよつときゅーけーかな。

第12話

私は、夢の中でエレメリオンから、ロックチョコウデリットとそのどーるいつてゆー「スプレムスデリット」について教えてもらってる。

でも、今はちよつときゆーけーして2人でケーキ食べてるの。

「夢でもケーキおいしー!!」

『味も好香のイメージだ。このお店を好香が好きだと思っているから、これだけの味が再現されてるんだね。』

それはソーだよ。未春おばさんには、ごはんごちそーになったり、おねーちゃんといっしょにお店でちゅーもんしたりするんだけど、どれもおいしーんだよ!

ケーキ食べて、じゅーぶんにきゅーけーした。うーんまんぞく。

今度は起きてる時に食べたいなあ。

『それじゃあ、そろそろ続きを話そうか好香。』

「うん。ソーだね。もうばつちり聞けるよエレメリオン!」

ひと息ついて、姿勢を正したエレメリオンが話の続きをしてくれるから、私も胸をた

たいて、どんと来いってアピールする。

でも、顔にちよつとケーキついてるよエレメリオン。

『——それでは、スプレムステリットとは彼らがアルティメギルとは別の集団だと示す呼称なんだ。集団とは言うがその中身は……あ、すみません。食後のコーヒークださい。』

「あー！エレメリオンがちゅーもんするなら私もー！未春おばさん私コーラがいいー！！」

ロックチョウデリットを異空間に引き込み、対峙したダークグラスパー。大人しく投降するはずもないロックチョウデリットに対し、ダークグラスパーは眼鏡を軽く撫で余裕の笑みを浮かべていた。

「スカー——————ツツツツ！！」

突撃するロックチョウデリットに向かってダークグラスパーの眼鏡が怪しく光る。

「眼鏡よりの無限混沌————」

闇の処刑人、その両のレンズより放たれる∞を描いた光が白き魔鳥を包み込む——その刹那。

インフィニット（手加減）じゃったのにあんな追加ダメなんぞいれたらトドメになってしまいうじやろうがああああああああ!!!」

やらかしたことが分かっていない相手にツツコミとダークネスウィップを飛ばす
ダークグラスパー。

ぐぬぬ、と地団太を踏む彼女の言う通り、ロックチョウデリットが姿を現す気配は無い。ついに消滅したようだ。

……この乱入者を目にした際のロックチョウデリットの反応は、まるで隠すように翻っていたマントの向こう側にいたダークグラスパーには見えていたのかいなかったのか。

「これは申し訳ありません。その眼鏡置き、もといご尊顔を彩る美しき神眼鏡ゴッドめがねにヤツの手が触れるのでは……と不要な危惧をしたばかりに。眼鏡の危機に己を抑えることが敵いませんでした」

新たなエレメリアンはダークネスウィップの一撃ツツコミには身動きもせず、自ら膝をつき頭を下げる。

姿は白の身体に白マント白い角、と白一色でありながら悪魔を思わせるシルエツト。そしてなによりも、その全て白の中に置いて、濃青のサングラスが異彩を放っていた。

「まったくじゃ愚か者め。わらわがそのような、レンズを素手で触るような無様を晒

すと思うたか!?この、うぬぬ、じゃがその眼鏡^グ属性^{ラス}への愛は本物……ええいもうよい! ……ふー。そもそも何故ここにおるのじゃ「デモニアギルデイ」よ。お前がロツクチョコウデリットをこの空間に捕えたと申してきた際に、下がってよいと言ったはずじゃぞ」
尚も咎めようとしたダークグラスパーだったが、ぐつと堪えるように言葉を詰まらせ、大きく息を吐いた。

彼女は、己の神眼鏡^{ゴッドめがね}は全てを見通すと謳う。まして同じ属性に懸ける想いの真贋ならば尚のこと。

相手の眼鏡を愛する故という意に二心は無い、と判断してこのエレメリアン——デモニアギルデイの乱入については渋々、怒りを収めることにしたようだ。

しかし、彼がこの場に現れていること自体は別。

デモニアギルデイ。人事の巡り合わせが悪いのか未だ幹部ではない一般エレメリアン。だが、彼もまたダークグラスパー同様に強力な眼鏡^グ属性^{ラス}の使い手であった(ダークグラスパーが彼を知ったのは、ツインテイルズと戦うこの混成部隊と彼女が合流してからだった)。

ロツクチョコウデリットはこの空間を創り出したのはダークグラスパーだと思っていたようだが——実際、彼女はその場のノリで自分がやったことにしていたが——事実は

デモニアギルデイの仕業であった。

ツインテイルズ他1名と争うロックチョウデリットを捕捉したデモニアギルデイは、決着の瞬間を狙い、誰にも悟られることなくロックチョウデリットをこの精製した異空間に引き込んでいたのだ（もつともダークグラスパーも同様の事は行えるだろうが）。

ロックチョウデリット——スプレムスデリットの活動という報告を受けたダークグラスパーは処刑人として処遇を引き受け、現在地であるこの空間ごとデモニアギルデイから受け取ったのである。つまりデモニアギルデイの役目はそこで終わっており、この場に留まっている理由は無いはずなのだ。

虚偽は許さぬ、と再び跪いた頭を見下ろすダークグラスパーの目が鋭さを増す。

「はーそれにつきましては申し開きできません。スプレムスデリットの動きを知り、貴女様にご報告したものの……自身の手柄が、それだけでよいのかと功を焦った次第の愚行でございますれば」

上から数えた方が早い地位にいる上司の詰問に臆することなく、ありのままを謝罪するデモニアギルデイ。

「な、なんじゃお前、正直すぎるんじゃないか？そのへんはもつとこう取り繕った屁理屈を捏ねるところじゃと思うが……」

あまりに正直な謝罪に、面食らったダークグラスパーは思わず一步後退つてしまう。わざわざ出向いたことを台無しにされた根本の原因だけに、下手な取り繕いするならばダークネスウィップを打ち付けるつもりではあつたが、こうまでストレートに白状されると、それはそれで戸惑うし氣勢も削がれてしまった。

「貴女様のその美しき神眼鏡は全てを見通してしまわれる。私ごときでは取り繕うことすら叶いませぬ……ならば偽りなく語る以外に術は無く」

サングラスで顔こそ見えないが態度と謝罪は間違ひなく丁寧。

数秒の沈黙の後、ダークグラスパーは頭を振つて背を向けた。

「……さっきも言うたがもうよい。その眼鏡グ属性愛スに免じて今回は不問じゃ。功を欲するならもう少し上手く立ち回れ」

失態を見逃し去つてゆくダークグラスパーの背中に再度、礼をするデモニアギルデイ。しばしの間を置いて、ダークグラスパーの後を追つた。

「承知しておりますとも。私の遮光眼鏡サンは全てを遮るモノ故。そう、光も視線も——本心も姿も立場も全てを……フフ」

前を歩く小さな背中へ向けた眩きとサングラスの奥で光る眼に気付いた者は誰もいない。

そして数秒前のカオシックインフィニットの空間において

「あの世界に呼び込んで……と、取り入る為にな、私を利用したと言うわけか……やっ
てくれたなあああ……デモニアデリットオオオオ……あが……」

ロックチョウデリットが消滅間際に遺した言葉を知る者も誰もいなかった。

スプレムスデリットは各々が自由に欲望のままに行動する。一応は同属と名乗る存在であっても利用はすれど、それだけのこと。行動指針さえ定まっていないう点ではあるいはアルティメギルよりも厄介な、形だけの統率者すらいないう危うい存在の集まりなのである……

「ああ……背後からでも伝わる神々しき神眼鏡。はやくこの手に取りたいペロペロして感触も堪能して掛けてみたいねえ……」

「ん？何か言ったか？」

「いえ」

本質的にはエレミアンであるヤバさも持っている存在の集まりなのである……

「しかし……やはり一般兵にして、その眼鏡の輝きは見所があるのう……どれ、光栄に思うがいい。わらわのアドレスをくれてやろう！」

「いえ。上司の個人アドレスなど煩わしきの極み故、不要にございます」

「寛大な心を見せてやったのに貴様ほんとはわらわをおちよくつておらんか!? 上役への気遣いぐらいはせぬかアホー！ー！！」

ヤバさも持っている存在の集まりなのである……

『——これがスプレムステリットだ。総数こそアルティメギルに及ばないが、危険度は極めて高い存在と言える。』

説明が終わったエレメリオンが、コーヒーをぐいっと飲みほした。

そーいえば、いっしょにケーキ食べてたけど、寝る前だとエレメリオン飲んだり食べたりはしないって言ってたのに、お腹こわしたりとはだいじょぶなのかな。夢の中から食べられるのかな……どーやって食べてるのは今のコーヒー飲むの見ててもよくわかんなかったけど。

あ、未春おばさんがお店の奥に入らないで、そのままカウンターに立ってる。何回もちゅーもんしたからかな。ますますホントのお隣のお店みたいになってるなあ変な感じ。

おっといけない。

それよりもスプレムステリットとかゆるいの話だ。じつさいに戦って、危ないやつらつてゆるいのはわかってたけど。こーやってくわしい説明を聞いてると

「うーん……強いふりよーのエレメリアンつてこと？でも変質者なのはアルティメギルとちがわないよーにも聞こえたんだけど……？つまり、変質者のふりよー……？」
そんな感じにも聞こえた。

変質者のふりよーとはいったい？だめな変質者だから……逆にまとも？ちがうね
ロツクチョウデリットめちやめちや気持ち悪かったもん。

『そうだね。諸々を総合して危険度を言ったらけれど、戦闘力以外で分かり易く差を表すなら……』

【鼻息がかかるまで近づいて離れない変態】がアルティメギル。

【堂々とおさわりして離さない変態】がスプレムステリットだ。』

エレメリオンがわかりやすくまとめてくれた。

でも、そのあたりのせいで、むしろ危機感がお話を聞く前よりうすれちやつたよーな
気がするんだけど……

「結局どつちもヘンタイなのはいつしよじゃん……」

めちやめちや気持ち悪いヘンタイだったけどさロツクチョウデリット。そーゆるい意味での危機感のほうが増えたよーな。

どっちがいい、って言われたらどっちもイヤなんだけど、なんかモヤモヤする。

『確かに属性力エレメーラの強奪という点では、被害側からするとアルティメギルと同じだ。だがプレミアムステリットは一度動けば、手練れの部隊長クラスが闇雲に暴れるに等しい。同じ世界に集まってこられた場合、物理的被害がより大きく出てしまうのが最大の問題だ。』

「ええー……それって暴れるヘンタイってこと？ バカじゃないのめちやめちやメーワクウ……」

聞けば聞いただけヘンタイとして気持ち悪い上にたちが悪いじゃんプレミアムステリットとかゆーの。そんなのがロッククチュウデリット以外にまだいる、って知っただけで頭がいたくなるよ。

それは知ってた方がいいことなんだけどさー、でも今はさ、ほらせつかく、ちい姉といつしよに寝てる時にさあ、こーんな頭痛の種を知りたくなかった気がする……うーん、アルティメギルより数が少ないらしいのがまだましなのかなあ。

『アルティメギルの四頂軍が投入される程の激戦区となりつつあるこの世界に、興味を示してやってくるプレミアムステリットは間違いなくいるだろう。私は、この世界の人々に、なにより幼女好香に迫りくる更なる脅威を見過ごすわけにはいかない。』

エレメリオンが真つ直ぐに私を見つめてくる。

話を聞いても、スプレムステリットを必要いじよーに怖いとか思えないのは、どーしたって相手がヘンタイの一種のせいな気がするけど、それだけじゃなくてエレメリオンが傍にいるおかげかもしれない。

ちよつとズレたところあるよーにも思うけど、やっぱり勇者って感じがして、ちい姉とはちがう感じの安心するんだよね。

『私は遍く世界を守る使命の為、そして幼女^{好香}、キミを守る為に改めてお願いしたい……私と共に戦ってほしい津辺好香。』

「え、いいよー。しんこくな顔(?)して急にお願いとかゆーからから何かと思ったじゃん」

じつと見つめてくるから、もつとじゆうよーな話があるのかと身がまえちゃったじゃんびつくりさせないでよ。そのせいで答えるのにちよつと間が空いちやっただから。もーエレメリオンてば。

『……………』

あれ、エレメリオンなんか固まってる。なんで？

「どうしたのエレメリオン？だから私はOKだってば」

『いや……私が想定していたより軽く決断してくれたね好香。正直に言えば、拒否される可能性も考えていたんだよ。』

「えー？だってもう、1回変身していつしよに戦ったの？。エレメリオンが、私を選んでくれたって言ったのに」

『確かにそうだが。あれは緊急事態でもあつたからね。私は好香を選んだけれど、好香にも、ちゃんと考える時間が必要だろう。』

「ごーいんに変身させてきたと思ってたら、気にしてたんだ。家の人にごあいさつしたいとか言ってたたり、けっこー細かい性格なんだなあエレメリオン。」

でも、考える時間ってゆーけどもう考えたんだから。私をだれだと思ってるの、ふふん。

「よーするに、誰でもおそつて暴れるヘンタイなんでしょスプレムスデリットって。ちい姉……は自分で何とかするかもしれないけど、おねーちゃんや総二兄とかがおそわれたら大変じゃん。私がやつつけられるんだから、やつつけるでしょそんなの」

それに、そもそもこーゆーことなんだし考える時間ってそんないらなと思うんだよね。

とーぜんでしょ、あんなのがおねーちゃん達に近よつてくるとかありえないって。私

がぶつ飛ばすよ。

自分の属性どーこーはまだよくわかんないけど、ちい姉のツインテールはとーぜんだし、おねーちゃんのロングヘアも好きだよ私。

総二兄だつてき、急にツインテールツインテール言わなくなったりしたら、それはそれで怖いじゃん絶対……大好きが力になるのがエレメライザーとエレメリオンなんですよ。なら私にだつて、あんなヘンタイくらいぶつ飛ばせるのがとーぜんでしょ！

『もちろん危険もあるんだよ好香。』

「1羽？1体？やつつけたばかりなんだから知ってるつてそれは。なによう、私のことはエレメリオンが守る、つて言つてお願いしてきたくせに。いまさらもつたいつけなくてもいいじゃん！」

『私ができる最大の防衛は変身してもらうことだからね。』

「ほらー！ならそれでいいじゃん、でしょ？エレメリオンが2人で戦うつて言つたんだから」

しつこいくらい確認してくるねエレメリオン。私を心配してるみたいだけど、なんか面白くない。だいたいさー、きんきゅー事態だからーつてグイグイ押して変身させたのエレメリオンだからね。私が早く返事したくらいで迷わないでよもう。

ええい、じれつたいなあもう！

「自分で選んだ相手なんだから心配しすぎ!!ほら、ツインテイルズだっているんだしダイジョーブだって!私たちはね!次はもつとこー【新ヒーロー登場!】って感じでテイルブルーにあつと言わせるくらいになるの!!わかった!」

だん!と、テーブルに飛び乗って、腰に手を当ててエレメリオンを見下ろしてやった、どうだ。これくらいビシツと決めたら文句も言えないでしょ、さそってきたのはエレメリオンなんだから、ふふん。

……やつべテーブルに立つてるのちい姉やおねーちゃんが見たら怒ってたね。ここ夢で良かった。

『好香の言う通りだ。お願いした私が戸惑うのはおかしな話だったね。』

エレメリオンがよーやく納得してくれたみたい。むつかしー話は長くするものじゃないんだよ。さてと、私もちゃんと座りなお……だめだ座ったら手が届かない。しようがない、おぎよーぎ悪いけどこのままテーブルに座ろう。

「それじゃあ、私からも。これからよろしくエレメリオン」

じつと私を見るエレメリオンに手を差し出した。あいぼーの握手だよ!……ここ夢だけど、未春おばさんがテーブルに座ってる私をじーつと見てるから早くして居心地悪い。

※※※※※

〈好香ちゃんにしがみつかれてるのは羨

ましいです

がそれで動きが鈍ってる今はまたと

ない好機!!

追撃のアイカユルメールで大人しく

なってもらい

ますよゲエハハハハハ!!!

※※※※※

また聞こえた。トウアールさんの声だよね……どんな夢になってるのこれ。

『これは外―現実空間の声だね。私が感知する処だと、好香の周りに3人いる。彼女たちの会話を好香が聞いてるんだ。』

「あー……じゃあこれって、ちい姉とトウアールさんがまた総二兄の部屋で暴れてる声かあ」

なるほど、なつとくした。結局、今夜もトウアールさんが総二兄の部屋に入ってて、ちい姉はげーげきに出かけたわけかあ。

よくわかんないけど、トウアールさんの声がいつもより強気に聞こえたのは、有利なことでもあったのかな？

とりあえず、こっちの空気は完全に壊された。私にとってはその方が問題だよ。姉たちめ。

「あれ？なんか周りがぐにやぐにやしてきてない!？」

壊れたのは空気だけじゃなかったみたい。

お店のBGMみたいになつた。姉とトウアールさんのバトル音を聞いてたら、テーブルがこんやくみたいにくにやくにやしてきた。と思つたら、お店そのものがぶよぶよと揺れてきてる。うわ、未春おばさんまでぐにやぐにやしてる!怖い。

『好香の意識が現実の音に反応しているから、私の精神との繋がりが切れ始めて夢が終わるんだ。今夜はここまでしか話せないみたいだね。』

状況がわかつてるエレメリオンは、落ち着いたようすで教えてくれる。あまりにもエレメリオンがじーっと座つてるから、すっかり粘土みたいになつてぐにぐにしている。すが、ちよつと新しいマツサージエアみたいに思えちゃうね……。

つて、そんなことよりも、つまりちい姉たちがうるさいのが原因つてこと？

ええー……まだエレメリオンと話したかったのに、ちい姉たちもーちよつと静かにケンカしてよ。

そうだ！ちい姉たちが傍にいるんなら一発くらいお返しできないかな。こう、目をつむって、ぎゅーつと念じて

（現実の私の右手ええ動けー！）

うーん……？動かせたのかぜんぜんわかんないけど、ちい姉の頭1回くらいポカッとはたけたりしてないかな……？

あ、目閉じてる間に体が浮いてる。エレメリオンもまた光る球になってる。夢が終わっちゃうみたい。

『それじゃあおやすみ好香。私を共に戦う者と認めてくれて感謝する。キミは素晴らしい幼女だ。』

「もうだから照れるってばー！えへへ、おやすみーエレメリオン」

エレメリオンの光る球がどつかに飛んでっちゃうとすぐに眠くなってきた……最初から夢の中だけだ。

明日はエレメリオンとなに話そうかなあ……

※※ ※※ ※※

へあれ、ちよつとこのタイミングで愛

香さんを放

トウアーーー

さないで好香ちゃん?!?>

へいいわよく放した好香!くらえや

ル
!!!!!!
<

※※ ※※ ※※

頭が眠気でぼやんとしてたら最後にトウアールさんの悲鳴が聞こえた気がしたけど、
まあいつか。

それにしても夢の中ってやっぱり服着てないんだなあ。

第13話

俺——観束総二は1日が終わり、ベッドに横になったもののすぐに寝つける気がしなかった。今日の出来事はどうにも考えることが多いので、眠気を押しのけるように、ついつい頭を働かせてしまう。

・ テイルギアとは違う武装を纏った新たなツインテールの戦士である謎の少女。

・ 白い鳥のエレミアン。

整理すると2つの要素しか無いのだが、その両方がどうにも不可解な点が大きくて困る。

白い鳥のエレミアン——俺達ツインテイルズが現着した時は、既に戦闘中だった為、流れで名前を知ることが適わなかった——妙に手強かった。

凄まじい高速飛行のスピードタイプだったので、体感とは裏腹に戦闘時間そのものは短かったが、あれは明らかに幹部級の実力があつた。相手が既にダメージを受けている状態で無ければ、目に見えて苦戦することになっていただろうという確信がある。

しかし、実力者であるほどに「鳥型エレミアン」という事実が俺に疑問を投げけてい

た。

現在アルティメギルの部隊を率いているのは、イクダークグラスパーであり、彼女の直轄部隊【美ビの四心ティフル・ハート】は昆虫型エレミアンで構成されている。先日倒した幹部アラクネギルデイも文字通り、蜘蛛のエレミアンだった。

そんな部隊に1体だけ別種がモチーフになったエレミアンがいるのだろうか？
 ダークグラスパーらが派遣されるより以前の、残存部隊の1体とも思えるが、あれほど強力な幹部が残っていたならなぜ今まで出撃してこなかった？

とは言え、今まで趣味に走ってこっそり出撃していたような連中もいた。その逆パターンで、性癖が刺激されず動かない奴もいるのかもしれない。気にすることは無いのだろうか？

アルティメギルの内部事情など知りようもない、と言ってしまうえばそれまでではあるが……

愛香に至っては「顔出してきた奴らは全員挽き肉にすれば解決するんだから同じよ」という恐ろしい血染めの金言を授けてくれた……今回はまともに変態の被害を受けたから機嫌が悪いだけ、という一時的な状態で平常運転がより過激になったのでは無い、と思いたい。折角、ダークグラスパーの件でエレミアンを惨殺する暴虐期を脱してきただんだからな……

そしてもう一つの謎。新しいツインテールの戦士。正直に言えば、多少おかしな点があつても「エレメリアン」「アルティメギル」の枠でまとめることができてしまう鳥型エレメリアンよりもこっちの方が気にかかる。

まず何を置いても、裏表のない元氣そのもののようなツインテールは素晴らしかった。

正体は伏せたいようだったが、あの僅かな間の会話でもそこそこボコを出していた様子から判断して、外見相応の年齢。悪い子でも無いだろう、あの状況で学校気にして飛び去っていくくらいだし。それはいい。

しかし、テイルギアと同等の戦闘力を発揮する未知の技術を持っている事実に対しては、アンバランスが過ぎる。

探るべきポイントは鳥型エレメリアンの方が多いが謎の深さはこっちが上だ。糸口は協力者がいる素振りだったのでそれが何者か、なんだが。

「うーん。俺一人で考えたところで答えが出るワケも無いよな」
結局はこうなる。

そもそも基地に戻った後も4人で話し合つて、情報が少なすぎて答えが出なかつたん

だから、悩んでもどうしようもない。やはり大人しく体を休めるのが吉だ。

分かつてはいるんだが、トウアールの追跡さえも振り切る未知の技術を持った何者かと、恐らくはこの世界の小学生が交流しているとすると、どうしても心配になるんだよな。

狙いを定めた世界の人間に「属性力を操る基礎技術」を与えて、属性力拡散の為に敢えて対抗する戦士を据え置くのがアルティメギルの第一作戦という事実を知っているからこそ、悪い予想を拭いきれない。

この世界には既にツイン^俺テイルズ^{たち}がいる以上、新たな戦士を用意する意味は無いはずなので、俺の取り越し苦労であればいいのだが。

（あの女の子の素振り、なんか覚えがある気がするんだよな。けど、あのツインテールを前に見てたなら忘れるはずは無いんだが……）

そして彼女にある奇妙なデジャヴ。ツインテールに見覚えが無いので初対面の筈なんだが、妙に親しみやすかった。

この為か、俺の中では正直なところ、謎を明かすことよりも彼女の協力者が正しい人であってほしいという気持ちが強い。

「トウアールみたいがいい人だったらいんだけどな……」
それを願わずにはいられない。

「私の他にアルティメギルの後を追う者がいたとしても、それが複数の並行世界から一つの場所に集うなんて奇跡のような確率ですからね。総二様の懸念も当然ですよ」

……ん？今、俺以外の声があったような？いつの間にか眠ってしまつて夢現になつていたのか。寝付ける気がしないとついながらも、体は睡眠をを望んでいるのだろう。改めて眠気に任せて、意識をゆつたりと手放していき――

ぴちゃん、と腕に何か生暖かい物が落ちた。

やつぱり夢じゃねえ！異変を感じた俺は、直ぐに身を起こすべく目を開いた。

「あーす、すみません!!」トウアールはいい人」なんて実質OKを出されたら涎を零しちやいましたうへへ……」

「おおおおあああああああああああああああ!!!」

直後に網膜に飛び込んだ景色が眠気など霧散させ、意識が一気に覚醒した。

天井―それも自分の真上に張り付いて口を拭っている人型生命体に恐怖の叫びを上げずにはいられなかった。

その人型生命体は俺がベッドから飛び出すよりも先に、音も無く着地する。なんという見事なスパイクアクションか。これが映画なら間違いないテンションが上がるが、舞台

が銀幕から夜の自室に変わったただけで一氣に血の氣が引いてしまった。

「いつから部屋（の天井）にいたんだトウアール!?」

「そんな、いつでも入ってきていいだなんてありがとうございます!ちゃんと総二様が部屋に入られた後に来ましたよ」

曲解されてる氣がする上に何がちゃんとなのかよくわからないが、トウアールの中では規範に則った行動らしい。だが、俺より先に部屋で待ち構えられていたことも、これまで何度かあつた氣がするんだが。

「例の幼女。私とは異なる属性力変換技術の持ち主だけに、接触したことでテイルギア—ひいては総二様の体調にも影響が無いか調べようと思ひまして」

その理屈なら俺よりも愛香の方が彼女と接触していた時間が長かつたように思う。が、俺が口を開ける前に真面目な顔でトウアールは話を進めていく。

「検査は勿論ですが、愛香さんは幼女を必要以上に怯えさせていましたから。万が一、未知の追跡技術で向こうからコンタクトを取ってくるならば、対象は総二様テイルレッドかな、と。その時になって、テイルレッドの正体でまた混乱させてもいけないので、この姿で潜んでいたんです」

するりと白衣をずらしたトウアールの姿は、薄いネグリジェだったので即座に目を逸らした。

仮にあの少女が来たとして、ネグリジエに白衣の女性が天井から降ってきて怯えずに安心するものだろうか？ いやでも女の子の心理は、男の俺には完全に理解できないし安易に否定もできない。

テイルレッドの正体で動揺させてしまおうという意見には、賛成しかできないし。

「とは言え生憎、幼女が来る前に、こうして私は姿を晒してまったので。ここは次善の策として！ 部屋にいる総二様と私が仲良くしていれば警戒心を解くはずです!! 幸い何故か愛香さんも来ないので今のうちに危険が無いアピールをしておきましょういつ訪ねてくるかわかりませんし邪魔が入る前に今すぐにも!!!」

トウアールは真面目な表情のままだんだん鼻息を荒くするという器用なことをしながら、矢継ぎ早に説明を続ける。何故こんな急にいるんだ? ……そうか、ここまで慌てた様子は、もしかしてあの子が訪れるという確信があるのか!? まさか既にこちらの様子を窺っているのでは……!!? だったら俺もトウアールに協力しなければ!!

「トウアールがいい女」って証明を今日こそ——」

ベッドに膝をついているトウアールが右手を俺に一步進め。

バリン、バツキン——と金属が壊れる音がした。具体的にはガラスを小さく割った後、施錠してある鍵を設置部の枠ごとへし折ったような。

「ごめん、そーじ。遅くなった……」

静かに壊した窓を開けて鬼の形相の愛香が顔を出した。

その「ごめん」が窓を破壊したことに係ってほしい、と思うのは俺のわがままなんでしょうか。

「ふんっ!」

「あおわっ!」

ベッドについているトゥアールの右手に向かって愛香が足を下ろす。危うく踏み碎かれそうだった手をギリギリで引つ込めベッドから転がり落ちるトゥアール。代わりに愛香の踏み込みを受けた俺のベッドはメキメキと今にも穴が開きそうな軋み方をしている。

初撃を回避したトゥアールを、獲物をしとめ損ねた野獣の目で睨みつける愛香。幼馴染の部屋でリアルな狩猟は止めてくれまいか。

「ちっ、全力で動けないとやり辛いわね……!」

忌々し気な愛香のつぶやきで気付かされた。言われてみれば愛香の動きが大人しい。常ならば、部屋の窓を破壊したと同時にトゥアールに飛び掛かっているような俊敏さと猛猛さを出しているのにそれが無い。今も一手を回避されただけで追撃に移っていない。

……その猛猛さでこの数か月ほぼ毎夜、自室が破壊されている現実を改めて直視して

しまい涙を零しそうになったが、愛香のこの手加減は一体？

「んのおおああああああああ!!!」

愛香の攻撃を避けたはずのトゥアールが突然、悲鳴を上げた。ノードメージの筈なのに膝をついて愛香を指差して震えている。こっちはこっちで一体!?

「こんな、こんな精神攻撃を愛香さんからくらうなんて……!総二様との進展を妨害しつつ幼女を侍らせるなんて精神への高度な攻めを!!」

震える声で叫ぶトゥアールに倣って愛香に視線を戻すと、部屋の暗さではつきりしないが、愛香のシルエツトが確かにおかしい。横から見ると胴体に厚みがあるような……何か背負っているのか?まさか変身しなくてもいよいよ武器を備えだしたのかと空恐ろしくなり、俺は真実を確かめるべく動いた。

ベッドから降りて明かりを点けると……なるほど、トゥアールの言葉の意味が分かった。

「……なんで好香を背負ってるんだ愛香?」

愛香の背中には、毎夜巻き起こる痴女と猛獣の凶宴に無縁であるはずの猛獣よしかの妹の姿があった。

「……ぐーすか寝たまんま放さないのよこのチビスケ」

愛香は俺の問いに苦虫を噛み潰したような顔で、好香の手を掴んでみせた。それで気

付いたが、よく見ると愛香は背中の中の好香を全く支えていなかった。好香の方が手足を愛香の胴に回して、しがみ付いている体勢だ。愛香が俺に見えるよう、掴んだ手を軽く引つ張るがピクリとも動かない。よほどガツシリ組みついてるらしい。

愛香のため息とは対照的に、背中からは、すぴーと安らかな寝息が聞こえている。

「あああ愛香さんの背中で極上の幼女が至高の寝息を……!?なぜ幼女趣味じゃない愛香さんにそんなイベントが起きてるんです!?!」

「いや姉妹だしな2人は」

少なくとも幼女を見て涎を垂らしてる人間よりはイベントが起きる関係性だと思うのだが、トゥアールには信じがたい光景らしく壁まで後退って慄いている。

それにしても。

「よく落ちずに寝てられるな好香のやつ……」

ゲンナリした愛香の様子から、起こさない程度の方で妹を引つpegがそうと挑戦はしたんだろう事は伺える。結果は御覧の通りに、諦めてしがみ付かれたままトゥアールの迎撃を優先したわけか。

手加減してたとは言え、愛香の力でも剥がされずに背中に張り付いたまま眠っているのは感心してしまうぞ好香。

愛香と好香の祖父は熊殺し可能な孫を2人にしないよう、好香には武術を教えなかつ

たが、こういうシーンを目撃すると、じーちゃんのその判断は正しかったと讃えられるだろう。

（天性の腕力そのものは愛香譲りなんだよなあ好香も）

好香くらい歳の愛香を思い出すと、同様の力を見せていたはず。とはいえあちらはその時点で狼を仕留めたりしていたんだが。

「なーにが『ちい姉が総二兄のお部屋いくジャマはしないから！』よ。妖怪みたいに張り付いてくれて……」

「まあまあ、妖怪は止めてやれよ」

妹を子泣き爺扱いする愛香に苦笑する。可愛い妹なんだしせめてコアラと言ってやれ。愛香、お前も腕力は樹上生物だろう……コアラとゴリラくらいの差はあるが。

「ふ、ふふふ……幼女にしがみつかれて一夜を過ごすという奇跡を蛮族が享受している怪奇現象！しかしトウアールちゃんはまだ倒れませんよ!! 考えようによつてはまたない好機!!」

己にとつて未知の現象に打ちのめさしていたトウアールがふらふらと立ち上がってきた。

「この怪奇現象を説明するには私も体を張って検証しなければなりません！ 説明して再現してこそ科学!! なので総二様、私が正面からしがみつくのでそのまま——」

トゥアールの得意技らしい虚無シークタイムゼロの思考時間。そこから導き出される理由は数分前からすつかり変わっている。例のツインテールの少女のことはどうなったんだ。

「近づくじゃねえこの痴女がああああああああああ!!!」

俺のささやかな疑問と白衣を置き去りに床を蹴ったトゥアールを、愛香は撃墜すべくベッドから一足飛びに俺とトゥアールの間に滑り込み、右拳を喰らせる。

「ほうっー!」

しかし、トゥアールは壁を蹴って寸前で方向転換。愛香の攻撃をまたしても回避した。ここまで愛香に捉えられないトゥアールは珍しい。

それはそれとして極薄の肌着だけで部屋を飛び回らないでくれ。目を逸らすために俺も首を高速回転させねばならない。

「ゲーハハハハハハハ!!動きにキレが無いですな愛香さん!!」

美少女がするとは思い難い笑い声が部屋に響く。

俺に出来るのは、何も知らずに目の前の愛香の背中中で眠り続ける好香を起こさないよう、そつと耳を塞いでやることくらいだ。

だが狙われた獲物トウアルが高笑いするのが、少しだけ解ってしまうほどには今夜の愛香の動きは精彩を欠いているのも事実。好香いもつとを振り落とさないよう起こさないよう、というハンは想像以上に大きいらしい。これは勝敗が読めないぞ……!

場所と時間が俺の部屋と夜中でなかったら、もう少し余裕をもって観戦できたかもしれない。

あ、好香を起こさないようにしてるから窓の壊し方も静かだったのか。妹への優しさが表れた結果、鍵周りのガラスと鍵そのものの破壊に留められた訳だ……どうあつても破壊なくしては生きられない蛮族の業を感じて悲しくなる。

「これ……ちい姉……ムニャ……」

無駄に白熱する状況を無視して微かな寝言が聞こえる。でもな、総二兄はこの騒ぎの中でしっかりと熟睡できてるお前が羨ましいんだぜ好香よ。いつまで続くんだ……

「好香ちゃんにしがみつかれてるのは羨ましいですが！それで動きが鈍っている今はまたとない好機!! 追撃のアイカユルメールで大人しくなってもらいますよゲハハハハハ!!!」

胸の谷間から例によって新たなアンチアイカシステムを取り出した。今回は見た目が丸い小さい紙？シール？みたいだな。

相手が思うように動けないのいいことに、わざと胸を見せつけながら取り出している。その顔は元ヒーローがしている顔なのか……？

煽られて幼子を背負った猛獣の殺気が魔獣にパワーアップしている。その形相はヒーローがしている顔なのか……？

そして俺には痴女も魔獣も止める力は持っていない。俺の部屋に今ヒーローはいないのだ。

「考えれば蛮族の動きをその身で抑えてくれる幼女なんて、天が私に与えてくれた天使ですよありますがとうございます実質私の好香ちゃん!!」

「させるかあっ!!」

投擲された謎アイテムについてか好香の所有権についてか分からない叫びと共に、愛香はトウアールの新兵器を払い落と——されずに右手に貼りついた。やはりシールか。

「うわっ手に力が……!?!」

「更におかわり!!」

と、シールを貼られた愛香の右手が力を失いだらりと下がった。トウアールは、愛香の動揺したその隙を逃さず左手にもシールを投げ貼り、両手の自由を奪うことに成功していた。

「これぞ電気刺激で筋肉を弛緩させ脱力させるアイカウルメール!!私の好香ちゃんまで背負った状態では、これ以上身動きできないでしょうゲハーハーハハハハ!!!」

アイカウルメールは肩こりの治療で売っているあれと似たようなものか。!!」

それでも愛香が動きを封じられたのは事実。まさかの劣勢だ。トウアールはもう悪の幹部じみたセリフと笑い声で勝ち誇っている。

さらりと好香の所有権まで主張している。

だが、天は悪の幹部を許さなかったのだろうか。それとも妹が無意識に姉の味方をしたのだろうか。

「ムニャ……くらえちいねー……すぴー……」

「あれ?!ちよつとこのタイミングで愛香さんを放さないで好香ちゃん!!」

どんな夢を見ているのか好香の右手が愛香を放した。そして一ヶ所を放すと流石にバランスが取れないようで、ズルズルと瞬く間に左手両足も愛香の胴から外してしまった。

寝言から察するに愛香に挑んでいたような気もするが、結果としてはトゥアールの懇願に反応することもなく、絶妙なタイミングで愛香を解放している。

「おつと危ない!」

まるで木から零れるカブトムシのように愛香の背中から落ちる好香をキャッチすることができてほつとする。近くにいてよかった。

そして俺が好香を受け止めたのと同時。メインの枷が外れた愛香が、一瞬で青い顔をしているトゥアールとの距離を潰した。

「いいわよく放した好香!くらえやトゥアール………!!!」

「ベンダー………!!!」

!!!

!!!

身体を捻ること、脱力した両手を鞭のように振り回してベシンバチンとトウアールを打ち付ける。決して広いとは言えない俺の自室で、人体が何度も宙に舞い壁と床を往復している。その度、壁と床に人型の凹みが出来ている。俺の部屋はどうなってしまうんだ……

人体鞭で人体ボール操る妙技の壁打ちは愛香の手からシールが剥がれるまで続いていた……

「おや……え……おん……ムニャ」

楽しい夢なのか、俺の腕の中で、笑顔と微かな寝言を呟いている好香が本当に羨ましい。

第14話

俺の部屋で（不本意にも）行われる女子のじゃれ合いの筈である惨劇は、沈黙したトゥールを愛香が連れ出すことで終了する。今回は展開が二転ほどしたが、結果そのものはいつも通りだった。

部屋の外にトゥールを転がした愛香が戻ってくる。

「それじゃあ私は帰るけど、ちゃんと戸締りしなさいよねそーじ」

そう言ってくるが、お前の手によって戸締りした上で破壊されるドアと窓は、これで幾つ目だと思ってるんだ愛香。

半ば諦めてしまったツツコミは心の内に留め、俺は腕の中でぐつすと寝ている好香を愛香に引き渡す。本人は何も気づかず熟睡しているが、早めに布団へ戻してやらないとな。

「え、あれ……?」

——そう、引き渡そうと思った。ところが、いつの間にか好香が俺のシャツを握りしめていて放さない。

「おーい好香……? 放してくれ、な? く……外れねえ!」

まじかこいつ。起こさないようにと、やんわり手を放させようとしたがまるで駄目だ。びくともしない。

愛香がしがみつかれたままだった理由を実感することになった。やっぱり素の身体スペックは同じ年の愛香と遜色ないぞこいつ。

愛香も引き剥がそうと、好香の脇に手を入れて引つ張るが結果は俺と同じ。そりや手加減はしてるだろうが愛香でもダメか……。

「何してんのよこのチビスケは。そーじを放しなさいってこら……この……っ！もー誰に似たのよこの馬鹿力は」

お前だよ愛香。

「ね、そーじ。そのシャツ破いちやっていいかな？」

「やめてくれ。なんでそんな力技に走るんだお前は」

妹を引つpegがすのを諦めた愛香の提案は、即座に却下だ。そこまでするほどの非常事態では無いだろう明らかに。

……それに今夜は、ドアと窓どころか部屋そのものが歪ませられている。ついでのように着衣まで引き裂かれたくない。俺の幼馴染は追い剥ぎかなんかかちくしょう……
蛮族だったな。

とはいえどうしたものか。てっとり早いのは、好香を一度、起こすことだが、さすが

に小学生起こすような時間じゃないんだよな。

「ううん……」

解決の一手を考えていると腕の中の好香がもぞりと動いた。しまった。気を付けていたつもりだったが、起こしてしまったかな？

「おいてかないでよ、ちいね……ムニャ」

「うお!!」

「あ」

呑気に考えていたら、好香の両足が俺の胴に回された。再びすやすやと寝息を立てる好香。

ちよつと待て。

起こしてなかったのはいいが、愛香の代わりに俺がホールドされたんじゃないのかこれ!!?

「んう……」

「いだだだだだだ!!?」

好香の寝息と俺の呻きが協奏した。俺を抱き枕にしたこのちびっ子、思いつきり締め上げてくる。やめろお前の力はちい^愛姉^香譲りだと言ってるだろうが！今度は俺の骨が軋む!!

同じ樹上生物でもコアラとゴリラくらいの差があるなどと思っていたが、これらもうでもないかもしれん。

「どうしてあたしとソーじの区別がつかないのかなこのチビスケは……っ。つて、子供の力にソーじも大袈裟じゃない？」

「は……!？」

区別がつかないのは、男女差を無視される程に体型が近いという悲しい現実が転がっているからでは、というツツコミを口に出す余裕は、今の俺にない。

それどころか、ヒュツと息が切れた。……原因は、ちびっ子の締め上げによるものか、その姉の、同じ剛力を体感したと思えない後半の発言のせいか。

この力だがみつかれて平然としていたのか愛香。
どうなってるんだお前たち姉妹。

恐ろしい。

耐えきれずに膝を折った俺はベッドに手をついた。

結果として、胸に張り付いてる好香の背中をベッドに接地させる形になったのだが、それが幸いして締め付けが緩んだ。

「いっつつ……た、助かった」

なるほど、体を支える為に無意識でも全力でしがみ付いてるから、ちゃんと横になる

と力を緩めるのか。当然と言えば当然だが……

呼吸は確保できたが、それでも好香は放してくれない。後の祭りだが、こうなるなら愛香の提案通りに、シャツを破っていた方が良かったんじゃないか。

「すぴー……」

俺のダメージなどまったく気付かず、小さい方の樹上生物は相変わらず気持ちよさそうに寝てくれている。

もはや好香を起こす以外に、状況を変える方法はない……のだが、こんな寝顔を見せられていると、ますます起こす気になれない。

これはもう仕方ないか……

「なあ愛香。今日はさ、好香は俺のベッドに寝かしておかないか？」

「そうね……ええ!？」

俺の提案に何気なく返しかけた愛香が驚きの声を上げた。それはまあ、驚くか。でも放してくれないならこれが一番よくないか。

「なんでよ、流石にもう起こせばいいでしょ!？」

「そうだけど……気が引けるんだよ。ここまで気持ちよさそうに寝てる相手だと」

「アンタもたいがい好香に甘くない!？」

手加減なしで好香を引っ手繰ろうとした愛香だったが、妹の寝顔に、うっと呻いて動

きを止めた。

要するに愛香と俺。二人揃って好香には甘いのだ。……もう一つ言えば、愛香にしがみついたままだったとしても、俺たちのいつも通りのバカ騒ぎがなければ、子供らしく就寝できている。という根本の原因は自分達だという自覚があるので、躊躇してしまうんだよ。

起きたら隣の家っていうのは、好香がちよつと驚くかもしれない。でも知らない部屋じゃないし、もつと小さい時には一緒に昼寝なんかもしてたし大丈夫だろう。

「好香くらいなら一緒に寝られるスペースはあるからさ。起こすのもかわいそうだろう？」

「そうだけど。うーん、好香だつてもう9歳……いやまだ9歳のチビスケか……だしいいのかな。そーじの家だし」

ぶつぶつと愛香が考え込みました。そうか。俺にしてみれば小さい子供でしかなかったが、やはり好香も女の子だし、ちよつと軽率な提案だったか？

「いいじゃないですかあ……」

「うおおお!?!」

「きやあ!?!」

突然、足元から聞こえた震える声に背筋を冷やされた。

見れば、ついさつきまで部屋を跳ね回らされた末に放逐されたはずの、よく知る銀髪が床を這いずつて来ていた。怖え。

「好香ちゃんに先を越されるとは全くの予想外でしたが、総二様と私で好香ちゃんを挟んで寝てくれれば今夜はもうそれで満足です……好香ちゃんの寝顔をペロペロするのも気付かれないように総二様と激しく動くのも夢じゃない最高の夜になりますからぐへへ……」

好香に反応して急速にリカバリーが始まっていたらしい。足元からゾンビのようにガクガクと立ち上がり始めている。垂れ下がった銀髪で表情が見えずに不気味に笑うネグリジエの女、すまんが普通に怖くて言葉を失う。

好香を抱えたまま、咄嗟にベッドへ飛び乗って距離を置けただけでも、我が身は褒められるのではないか。

「わかったわ。好香の代わりに私が挟んであげる」

「え、待ってください、蛮族サンドじゃ回復どころかマイナスうううううううううううう!!!」

恐れ戦いて言葉を失った俺とは対照的に、愛香は復活したゾンビトゥアールの頭部を両手で挟み込み、万力のように破碎にかかった。ゾンビは頭を潰すのが効果的だものな。ああ、終

わったと思っていた骨の軋む音と断末魔の悲鳴が再び俺の部屋に木霊している……

「そーじ。やっぱり好香のことお願い。あたしはもうこいつが目覚めないようにするから」

「ちよ、まだ回復しき……ないから……これ以上は……!」

呻くゾンビの足首を掴んだハンターが部屋から去っていく。あの様子なら今夜はもう復活できないだろう。

今度こそ静寂を取り戻した部屋には、疲れ切った俺と何も知らずに眠りこける好香だけが残された。

それにしても直接、起こされることこそ無かったとはいえ、これだけの声と打撃音で眠り続けていられる好香には、いつそ感心させさえる。

「お前もあの2人とは別の方向で凄いのかもな、はは……いててて」

苦笑していると、立ち上がっていたせいでまた好香の締め上げが強くなってきた。早く横にならないと、俺は俺で絞め落とされそうだ。できるなら俺も失神ではなく熟睡したい。

好香をくつつけたままベッドに転がった俺は、適度? 過剰? な疲れによつてこれ以上の思考する余裕など無くバタリと意識を手放すことができた……

「——か。好香」

んう……誰かが揺さぶってくるから、ぽやんと目が覚めてきた。

あーそつか、ちい姉かあ。起きていいから私はもーちよつと寝かせて……

「あさごはんできるまでまだねてるうう……」

「好香。お前にはちよつと早いかもだけど、起きて放してくれ。俺はそろそろ動かないやいけないんだよ」

体をよじって布団にもぐろうとしたのに、まだ声をかけて揺すられる。私は寝るんだつてば、ちい姉しつこいなあ……まるで総二兄みたいな声出しちゃつて。

……ん？総二兄の声だよ、いまの。

聞こえるはずなのない声が引つかかって、しぶしぶ目を開けた。

最初に見えたのは目の前にあるシャツの生地、それと……ペたんとした感触。ああ、ちい姉にしがみついて寝てたから起こされたんだ……それじゃ今の声は聞きまちがいかあ。

それで顔を上げていくと、寝る時はツインテールを解いてる、私とおんなじ黒い髪——じゃなくて赤い髪があつて。

「あれー？……ちい姉が総二兄になつてるう……？」

おかしいな。さっき聞きまちがえた声に合わせてちい姉が総二兄に見える。

「おう、おはよう。ちい姉じゃ無くてお隣の総二兄だぞ好香」

まだぼーつとしてる私を、総二兄が持ち上げて身体から離れた。

あれ？寝る前はちい姉の背中にぴったりくっついてたと思うんだけど、体も総二兄だ

……

ベッドから立ち上がった総二兄は、ぐいーつと伸びをしてる。

部屋を見回すと、ちい姉どころか部屋もベッドもちい姉の部屋じゃなかった。

「……なんで総二兄のお部屋にいるの？」

まちがいない、ここ総二兄のお部屋だ。

なんでお隣の家に私はいるんだろう？

……

……

……！

ちよつとずつはつきりしてきた頭でじょーきよーを整理してみると、1つの答えにたどりついた。

「ああ、それはお前が——」

「まさか総二兄……寝てるあいだに私をさらってツインテールにしよーと!？」

きよーがくの事実に、雷が落ちたよーなしよーげきを受けて一気に目が覚めた。総二兄つてば新しいツインテールにうえて、とうとうそんなことを……!

「そんなわけあるか!!お前は俺を何だと思ってるんだよ?」

総二兄がひてーしてくるけど、あわてるのがますますあやしい。ドラマでも犯人はおーじよーぎわが悪いしこれはやっぱり……!

どうしよう、ちい姉になんてせつめーしたら。

「いやがる私にきよーこー手段でツインテールにしたんでしょ!?うすい本みたいに!うすい本みたいだっ!」

「するか!いい加減しっかり起きろ馬鹿!!」

総二兄におとなしく罪をみとめてもらおうと思つたらチョップを落とされた。いたい。

あれ、頭押さえたらわかつたけどツインテールじゃないや私。それじゃあほんとに私の早とちり?

「あのな。ツインテールは無理矢理するものじゃないんだ。ツインテールは、ツインテールを好きな人がツインテールにして本当に輝くん。俺はそんなツインテールの輝きが大好きなんだよ。もちろん、どんな形であつても生まれたツインテールは祝福されるべきだけど、嫌がつてる妹を無理矢理にツインテールにするわけないだろ。そんな

ことしたって好香もツインテールも喜ばないんだから当たり前の事さ」

ツインテールを泣かせる真似は断じてしない、って断言された。

ツインテールが多くてよくわかんないけど、総二兄のいうツインテールはよくわかんない説得力があるなあ。

総二兄が私のいやがることしないのはほんとだし、やっぱり私の早とちりだったのか。

「うう、ごめんなさい」

「はあく、寝起きに勘弁してくれ。テレビの見過ぎだよ。うすい本?とかどこで覚えてくるんだ……」

総二兄が頭を押さえながらため息ついている。悪いことしちゃった。

「よく分らないけど、追いつめる時はてーばんのセリフの1つだって——」

「このロリコンがテメエだなあああああああああああ
あ——————ツツツツ!!!」

「がああああああああまだ推定無罪なのに暴力のR18Gにされるうううう

うううううう

!!!!!!

私の声をさえぎって、一階からちい姉とトウアールさんの叫び声が聞こえてきた。ちい姉も総二兄のお家に来てたんだ。

「あ、えつとね。追いつめる時のてーばんだって——」

「いやもういいどこで覚えたのか今わかったよ……」

総二兄は疲れたみたいにずると床にすわり込んだよ……」

うーん、下からドカンドカン殴る音がしてるあたり、トウアールさんが教えてくれたのって、みんながあんまり使わない美人ジョークだったのかな。

けつきよく、私が総二兄のお部屋で寝てたのは、ちい姉が私を連れてトウアールさんのげーげきに出かけたかららしい（連れてつたくせになんで置いて帰ったの！ってちい姉に言ったら、何も言わないでほった引つ張ってきた。なんで??）。

未春おばさんが「いいわよ、好香ちゃんもウチで朝ご飯食べちゃって」って言うてくれて、私は家に戻らないで（着替えとかランドセルはちい姉が持ってきてくれた）ちい姉といっしょに総二兄のお家で朝ごはんごちそうになることになりました。

ちい姉は家でもう朝ごはん食べたみたいなんだけど、総二兄のお家でもまた食べるのかあ。

リビングに行ったら用意してあったイスをかたづけ、私に向かって膝をぼんぼんし

てるトウアールさんがいた。顔はホータイぐるつぐる巻きでぜんぜん見えないんだけど、銀髪と白衣だしトウアールさんだよ。

「ふああ。ひらっひやいひよひはひちゃん」

「この置物どかすからここ座りなさい好香」

ちい姉がトウアールさんのホータイ顔を打ち抜いてイスから叩き落として、その空いたイスに私をすわらせてくれた。いいのかなあ……

「コヒュー……ちよつと愛香さん……コヒュー昨夜からずっと回復しきつてないんですよ……コヒュー非常回復する為に高純度の幼女成分（ロリタ成分）が必要なんです……コヒュー」

「次に好香にくだらないうこと吹き込んだら皮剥ぐわよ」

もう息づかいがおかしいトウアールさんにちい姉が怖いこと言ってる。トウアールさんいったい何したんだろう……

後ろでピクピクけいれんしてるトウアールさんは気になるけど。それはそれとして私は、未春おばさんが用意してくれた朝ごはんをほおぼる。おねーちゃんが作るごはんもおいしーけど、未春おばさんのごはんもすっごくおいしい。さすがは喫茶店マスター。

「簡単な朝食なのに好香ちゃんは美味しそうに食べてくれるから作り甲斐がある

わー」

「だってモゴほんとに未春おばさんのごはんおいしーんだもんモゴモゴ」

「ああコラ、口にいれたまま喋らないの。それとあまり動くんじゃないってば」

コップにオレンジジュース注いでくれる未春おばさんにピースしてたら、ちい姉に引っぱられて座ってる姿勢をなおされた。

今日はちい姉が髪をすいてくれてるの、えへへ。

ずつとツインテールにしてるだけあって、ちい姉も髪のお手入れ上手なんだよね。

普段のーきん100%なのにーゆーとこもずるいよねちい姉。いーでしよわたしのちい姉。

「ふふ、寝起きから騒いでくれたのに。お前は楽しそうだな好香」

「むぐ、それはあやまつたじゃん……総二兄のいじわるー。だって未春おばさんのはんもちい姉に髪ととのえてもらうのも好きだもん」

頬杖ついた総二兄が笑ってくる。ぬーん、寝起きにえん罪をかけたのはじじつだし強く出れない。

でも今は私のせいじゃないもん、ちい姉と未春おばさんが理由なんだってばー。

「ねえ、ちい姉も総二兄になんとか言つてよー」

「だから頭を動かすんじゃないの！そんな顔してムシャムシャ食べてるチビスケに

は、あたしだってそーじと同じ事しか言えないわよ」

振りむこうとしたら強引に前を向かされた。せつかくほめてるのに、私のあつかいが雑だよちい姉。

そーこーしてたら、テレビから流れる朝のニュース番組が次の話題に変わってた。お、ツインテイルズだ。昨日ってカメラが集まる前に帰ってたのに、それでもニュースにするんだ。

あ！今の変身した私だ！！テレビに映ってる！！

「わっ！ブラシかけてる途中で動くなって言うてるでしょ！！絡んでる髪の毛が抜けちゃうでしょうが！！」

自分が映ってる画面を見つけて思わず立ち上がったら、ちい姉に押さえつけられた。いったいなあ、イスでお尻打ったじゃない！

TVに映るなんて初めてだからちよつとドキドキしてきた。

なんかちい姉たちも静かになったと思つたら、じつとTVを見てる。そーかやつぱり新しい^わヒーロー^たのことが気になるんだね、ふふん。

ほら、テイルレツドはいーからもつと私のこと言つてよ。さつきからちらちらつとしか映つてないじゃんこのニュース。

(でもテイルブルーに抱っこされるとごしか映つてないなあ……もーちよつとかつ

こよく映ってればよかった。ティルブルーがあんなおどかさから……うぬぬ)

まだ話題がティルレッドだから変身した私がアップで映らない。おまけにさつきから見切れるのは、ティルブルーの腕の中で手足をバタバタさせるとこぼっかり。これってやっぱり、直前でブルーが私をおどかしたの原因でしょ。

ちい姉といいブルーといいなんで私のあつかいが雑なの!?

『ツインテイルズと一緒に映っている少女ですが——』

なかなか話題にしないニュースにモヤモヤしてたら、とうとう私がアップで映った。きたきた! ついに私の出番だ!

「……………」

あれ? 私だけ顔にモザイクかかってない? ねえ? ちよつと?

『ツインテイルズになりきったコスプレですかね』

『一般人の可能性があるので映像を加工してお送り——』

ちがうよ?! ツインテイルズと同じだってば! 新ヒーロー新ヒーロー!!

『見てください。こんな少女にまでティルブルーは凶暴な目を向けている』

『もしかしたらティルブルーが世間の目を誤魔化そうとティルレッドのファンを無理

「優しく子供を抱き上げてるティルブルーをどう曲解してるって話よね!!」

「「え?」」

思わず顔を見合わせた。

意味が分からないって顔でちい姉が私を見てるんだけど、それはこっちのセリフでしょ。ちい姉ニュースのどこ見てるの?」

「ティルブルーはまちがったこと言われてないでしょ? だって、どー見ても新ヒーローのかつこいい初とーじょーをジャマしてるよね?」

「いやいや。あれは腰抜かしてるちびっ子を助け上げてる優しいヒーローの姿じゃないの。あっちの小さいのこそ、ツインティルズに会いに来たコスプレに見えたって仕方ない映り方でしょ?」

なんか話が合わない。ちい姉のニュースのちゅーもく点おかしくない?

「あんたティルブルー好きなんでしょ? ブルーの扱い何とも思わないわけ?」

「ティルブルーは好きだけど、別にテレビでウソ言っただけじゃないじゃん。きよーぼーはきよーぼーでしょ。それより新しいヒーローの方を見るべきじゃないの?」

「違うでしょ。名前、も顔も分からない小さいのより、ティルブルーは優しい一面があるってアピールされてるシーンが正しく注目されるのがね……」

「どこ見てんのちい姉? テイルブルーのあれはムリヤリだっただけじゃない。ごーいんに

優しさアピールしてる暴れヒーローよりも、かっこいい新ヒーローをあうあうううう
「!?!?!」

「なあ、お前ホントににテイルブルーのファンか? ああ?」

話がヘーコー線のままつづいてたら、急にちい姉がほつぺた引っぱってきた。なんでそんな怒るの!?

「まあまあ愛香さん。テイルブルーが相変わらずの扱いだからって、好香ちゃんに八つ当たりするもんじゃないですよプープープー」

ちい姉にぐいぐいほつぺた伸ばされてたら、トウアールさんがさつとスーパーゴリラの魔の手から助けてくれた。

トウアールさんの腕の中にすっぽりおさめられた私は、そのまま膝の上にすわらされてる。

ついさつきまでホータイだらけだったはずなのに、きれーさつぱり治ってるなあトウアールさん。

「それにしても、好香はツインテイルズにあまり興味なさそうだったのに、あの新しい女の子はやけに気にするんだな」

ちい姉に引っぱられたほつぺたをむにむにとトウアールさんにさすられてたら、総二兄が意外そうな顔して聞いてきた。

「えー？だつてじぶ、じゃない新ヒーローつてゆーのは気になるよ。総二兄は気にならないの？」

危ない危ない。私つてゆーのはまだヒミツにしなきゃ。

こんな時にばれてもかつこよくないし、ちい姉にエレメライザーぼつしゆーされないようなさくをろーしてからじゃないと。

「いやツインテールは気にはなるけど、あの映像はヒーロー……か？」

「あー！総二兄までそーゆーこと言うくく!!」

私の言うことに総二兄は首をひねってる。

どーしてあの私がヒーローだつてわからないかなあ!? ツインテールの気配を感じるとか言ってるなら、画面に映つてない私のかつこよさだつて感じてよ!! まったくニブいんだから!!

そんなだからちい姉としんてんしないんだよ、もう!!

「ぶにぶにの膨れっ面になる幼女香ちゃんもとい好香ちゃん最高ですなふひひ」

「好香ちゃんのお気に入りには残念ですが、このニュースじゃ名前も行動も不明。その上でおつかないティールブルーに抱っこされるとこしか出てませんからねえ。何とも言えませんよ。好香ちゃんだつて、"かつこいい" んじゃなく謎すぎるから気になるのかもしれないよ？」

直前にぜんぜんちがうことをつぶやいてた気がするけど、私のほっぺたつついて遊びながら、トウアールさんがニュースをぶんせきしてくれる。それでも私は新ヒーローなんだから、このほーどーはなっとくできない。

「ぜったいヒーローだもん……」

おもしろくなくて、小さくつぶやいちやったのは聞こえなかつたみたい。

でも……ちい姉も総二兄も、未春おばさんまで、変身した私をヒーローって観てない感じがする。

トウアールさんの言うこともそのとおりなのかなあ。

ツインテイルズには、あえて名乗らない！って感じがかっこよく決められたと思ったのに。謎だらけのヒーローじゃニュースだともり上がらないのかな？

名前。名前かあ……

よし。次にすること決まったかも。

番外編・ちよつと昔の、とあるとある並行世界のこぼれ話 その2

——これは、とあるとある世界のダイジエスト。エレメライザー（属性：男性）が開発（生）される世界の、ほんの少し昔の零れ話。

ここは我らがトウアールのそつくりさん（赤他人）、天っ才幼女ツイーカ・RRの研究（ラボ）室。属性力（エレメラ）の研究の他にパティモのサポートを行うための基地でもある。

所在地は秘密。エレメリアンは元より一般人にも発見されないよう、遮断光量子（ブライトカーテン）という特殊ジャミングで秘匿されている此処に出入りするのは僅か3人。

ツイーカ、パティモ。そして——

「（注）品の品だけ幼女博士（ロリセンセイ）」

段ボールを幾つも担いでやって来た、赤いボディに緑眼の蛇型エレメリアン「コブラギルデイ」である。

「（注）、（注）くろーさま。その辺に置いておいて、ひび」

ツイーカは呼ばれた怪しい愛称でもコブラギルデイにも目立って反応することなく、手元のモニターに大量の文字を羅列する手を止めない。

返ってくる怪しい笑いは彼女の常だった。

一方のコブラギルデイも相手の態度に慣れた様子。何も言わず、指示通りに段ボールを空きスペースに配置している。

ツイーカが作業しているモニターの更に奥、研究室の壁一面に組み込まれた大モニターには、エレメリアンと戦闘中の属性騎士エレメナイトーパティモのリアルタイム映像が流れていた。

ちようどトカゲ型エレメリアンの首を両足で挟み、フランケンシュタイナーのように地面に叩きつけているところだ。

ツイーカ作の小型人工衛星「ロリーー」からの映像である。

「それにしてもなあ……確かに嬢ちゃんをヒーローに選んだのは俺だけ。が、まさか研究室まで造らされるとはねえ」

仕事を終えたコブラギルデイは、特殊合金製の研究室の壁を触りながら大げさにため息をつく。

「労りも少ないしなあ？とツイーカに振っても、返ってくるのは怪しい笑いだけだった」

戦闘の映像は気にしていない。侵略序盤のこの時期はどうやったってエレメナイトが勝つのだ。彼にしてみれば分かり切った結果を気にする必要も無い。

「ヒーローに超科学の拠点は必須。じ、自分でヒーロー選んだならそれくらいはして当然、ふひひ。その外見に免じて、研究室を地下にして地上で喫茶店マスターやらせるのは諦めてあげたんだから、か、感謝されてもいいくらい、くふふ」

コブラギルデイに視線を返すこともなくツイーカはまたも怪しく笑う。彼女に言わせれば、現状でも気を使った役割分担らしい。

そして彼女も戦闘の映像を特に気にしていない。自分が作った装備を扱うパティモ^{年上の友人}が、あの程度の相手に負ける要素は無い。心配に思考の容量を割く必要が無い。

もちろん戦闘中のエレメナイトの詳細データは別ウィンドウに表示して、不備がないか逐一チェックしているが。

「いやいや。部隊のメンバーやら出撃情報を教えるだけでもなかなかだぜ？この上、機材までよろまかしてるのバレたら、いよいよ物理的に首が飛ばされちまうって思わないかい？^{ロリセンセイ}幼女博士には科学の他に労働基準も勉強してもらえないかねえまったく」

「わ、私の首は飛ばないしね、ひひ。それに簡単に測ったあんたのスペックデータならこの程度で疲労ないでしょ、うへへ」

エレメリアン使いの荒いツイーカに、自分の首を触るジェスチャーをしながら愚痴る

コブラギルデイ。だが、当の幼女は作業に集中して相変わらず振り向かない。

「ひつでえなあ。エレメリアンは精神の疲労のがヤバいんだぜえ?」

使い潰す気満々です、とでも言うような言葉しか与えてこない幼女に、コブラギルデイは苦笑するしかなかった。

振り返れば——パティモがツイーカという協力者を得た数日後。

属性拡散の為の広告塔
ツイエンテールの戦士を選ぶという任務を果たしたはずのコブラギルデイが、「密かにアルティメギルを裏切ったエレメリアン」という触れ込みで2人に再度、接触した。

「アルティメギルを表立っては離反せず、部隊の情報を定期的に伝える内通者」という方法で手伝ってやる立場を作ろうとしたのだ。

それは意外とパティモが人目を避けて戦うタイプだったので、ツイエンテール属性の拡散本当の目的の為には、もっと目立って活躍してもらわねばならない故の軽いテコ入れのつもりだった。

アルティメギルの規模が知れたかったパティモ自作装備を自慢したいから戦士に目立ってほしいなんて追加の幼女もコブラギルデイを受け入れた。

上手い具合に潜り込んだ彼としては、少しでも属性拡散のペースが上がるようプロデュースしつつ、適当に情報を流すつもりだったのだが……

「こ、この先もやっていくんだから、まず、もつとしつかりしたエレメラ属性力の研究設備が欲

しいよね、うへへ。あんた達の方が科学技術は上なんだから、そつちで揃えた方がいい設備になるでしょ、ひひ」

などといきなり規模の巨大なおねだりをツイーカにされたのだった。

世界を守る協力者だと擬態した手前、最初から断るわけにもいかず。

アルティメギル基地の研究室^ボから交換済み中古パーツやら予備機材などを拝借して、せつせとツインテール戦士の基地という名目のツイーカ専用研究室を拵える羽目になったのである。――

（おまけにこの幼女博士ときたらガチモンの天才で恐れ入るぜ。プレゼントした設備も属性力変換技術もサクサクものにして、あつという間に属性騎士サマの誕生だよ。）

パティモを選んだ日から今日までのことを振り返って肩をすくめるコブラギルディ。

研究室が完成した後も、今日のように追加の機材や素材を山のように要求されている。最初こそパティモがまだ倒されないよう、ツインテール属性を拡散する為に目立つて活躍するようにと軽い投資気分だったが……

今も何やらプログラムを組んでいるらしい目の前の天才幼女は、自身の科学^{サイエンス}属性を存分に伸ばし、日を追うごとに装備を発展させパティモ―エレメナイトを強化している。

いよいよ所属部隊の一般兵では、完全に手に負えないレベルになっているのはどうし

たものか悩ましい所だった。

『エレメナイト光輪!!』

空気を読んだのか読んでないのか、大画面では丸鋸状のビームを投げたエレメナイトが、相手の首をすつ飛ばして爆散させた。

幸いなのは、まだ隊長格なら勝てるだろうレベルであり、装備が充実したこと（とツイーカと自分の情報拡散もあり）でエレメンテールが世間に目立ってきているから属性拡散という目的は果たせていると言えることなのだ。

「ふひひ、私の研究室ラボにこれだけ頻繁に顔出して基地にいないのに平気なのはさ、モケモケ役立以下たずか自由に動けるそれなりの立場、なんでしょ？裏切りそのものがバレなきや、首は繋がってるんじゃないの？うへへへ……」

いつの間にか、作業の手を止めて椅子ごと振り返ったツイーカが、いつもの淀んだ目でコブラギルデイを見つめて愉快そうに笑っていた。

この幼女、コブラギルデイの組織内での立場も予想した上で、首が飛ばない程度には使い倒す氣しかない。

「パティモの嬢ちゃんといい幼女博士といいきつつい女子どもだねえ。どっちが蛇だか判りやしねえ」

不気味な笑いと淀みながら光る眼という呪われそうな顔でジロジロと首を見つめられ、降参とばかりに両手を上げるコブラギルデイ。

実際、真の侵略作戦を実行する側の地位でもあるし、ツインテール戦士を目立たせる任務で此処にいるのだから首が飛びはしない。が、属性拡散の為に一般兵を生贄にしている事が明るみになると部隊に支障を来すという点で大つぴらには動けない。

ツーカーの予想は当たらずとも遠からずである。

コブラギルデイ自身、予想外の強敵になったエレメナイトにおたおたしている所属部隊も、協力者だと思つて研究室に出入りさせているパティモ達の様子も愉しんでいる。

しかし、ツーカーはツーカーで、コブラギルデイを研究対象、協力者の比率で視ている節が大いにあるのだ。態度に若干、引く時がある。

(嬢ちゃんもきつつい態度は変わんねえしなあ。おお怖い怖い、くくつ)

女子に警戒されるのは嗜好に正直すぎた変質者揃いのエレメリアンには日常。いつものことだとコブラギルデイは小さく笑った。

「ま、万が一ダメだった時はさ、どうにか体が爆散しないようにして研究室に送つて来てよ、ひび。コブラギルデイの身体でちゃんと研究してあげるから……えひひひひ」

「……こーれだから科学に魂を売った無邪気な少女はおつかねえ」

笑った直後に耐久値を超える強烈なのが来た。

いつでも解剖準備はできている、と体を撫でられてコブラギルデイは本気で引いた。

陰気に笑いながら舐めまわすように這う視線に背筋が寒くなる。少女がしていい顔じゃない。

本人曰く「理想は正義のマッドサイエンティスト」らしいが、「正義」を除けば既に到達しているのかもしれない。

「だいじょーぶ。私はまだそこまで魂売ってない、うふふ。ちゃんと悪意で言ってるから、^{ロリ}幼女を怖がること無いよ、きひひ」

（ゆくゆくは科学が私に魂を売るからね、ひひ。私が科学と幼女を統べるんだよ、ぐふふふふふ）

パティモが帰ってくるまで、ツイーカが異様な雰囲気でもコブラギルデイをじつとりと観察している。

「……また何してるんじやお前ら」

「おう、お疲れさん。幼女博士から切開機具^{オモテヤ}取り上げるの手伝ってくれや」

「ば、爆散しない程度で止めるし、麻酔だつて善処するのに、ちよつとくらい解剖させても損は無いと思うんだよね、きへへ……」

そして帰ってきたパティモが、怪しげな刃物を幾つも構えたツイーカとそれを縛り上げるコブラギルデイを見る。

とあるとある世界ではよく見る光景であった。

次元の狭間に停留しているアルティメギル基地。

ツイーカの研究室に資材を運び終え（解剖されかかつ）たコブラギルデイは当然ここに帰還する。

現在、彼は部隊長の私室にいた。

コブラギルデイ。表向きは部隊の下位エレメリアンだが、その実は侵略世界のツイーンテール戦士選定を担う隊長の側近である。

彼の目の前に座っているのは、蜂の姿をしたエレメリアン。

部隊長ミツバチギルデイ——組織の属性拡散作戦を積極的に受け入れ、側近以外は捨て駒として敢えて弱いエレメリアンを大勢抱え込んでこの部隊を組んだ、冷酷な将である。

今は最近、発売されたエレメナイト稼働フィギュアを弄って、呼びつけたコブラギルデイに見向きもしていない。

「なあ、コブラギルデイ。私の言いたいこと解っているな？」

だが発した声には、部隊の長であるだけの威圧が籠っていた。

「広告塔エレメナイトが強すぎるってか？ おいおい、そりゃ俺のせいじゃねえよ。悲しいねえ」

一方のコブラギルデイも、隊長の圧をどこ吹く風と受け流し、態度を崩さない。上司のパワハラで属性エレメトラップ玉に穴空きそう、などと胃を押さえる真似をして笑っている始末だ。

実際、彼は任務通りに「アルティメギルを裏切り人間についたエレメリアン」を装いツインテールの戦士を誕生させた。その際に与えた属性力変換の技術も必要最低限のレベル。加えて、協力者という顔で懐に入り、ある程度の動向を掴んでもいる。

コブラギルデイに落ち度は何もない。

だが、アルティメギル側の想定を超えてエレメナイトは力をつけている。

「技術を流した人間の仲間が天才だった、ってことまで責任もてないだろお。はっはっは」

未知の技術をモノにして発展させることが可能な天才が首突っ込んできた、などという反則じみたイベントが起きたのが、部隊のトラブルだっただけである。

そして部隊にとっては厄介事だが、自分には責任も負い目も感じていないコブラギルデイにとっては楽しいイベントであり、笑い飛ばしていられるのであった。

「予定よりは早いが……エレメナイトの属性力エレメトラを回収しようと思っている」

しかし、ミツバチギルデイの発言がその笑いを止める。

ミツバチギルデイがエレメナイトフィギュアを弄る手は止まらず、恥ずかしいポーズを再現している。

「ほほう、いいのかい？」

「部隊を空にするわけにもいくまいよ」

現状、ツインテール属性の拡散よりもエレメナイトの戦力強化の方が早い。このペースでは当て馬になる弱兵達がほぼ尽きてしまう。同時に部隊の主力でも手に負えない相手となっている可能性がある。

多少、奪取できるツインテール属性の総量は減ることになると、余裕をもって蹴散らせるうちに対処すべきだと部隊長は判断したのだ。

エレメナイトのフィギュアは、ガチャガチャで購入した触手を巻き付けてエロゲーの女騎士といった様相に装飾されている。

「こんな早く強くなつてるとか怖いだろ。タイミングミスッたら死んじやう」

「皮算用通りにならないとすぐビビるねえお前さんは」

という建前で、本音は現在の侵略ペースで自分の戦う番になった時のエレメナイトのレベルを単純計算して1人で腰抜かしたことが決め手だったりするのだが。

隠していてもフィギュアを動かしている手が震えているので、コブラギルデイはおお

よそ察して冷めた目だった。

「そんじゃあ、俺は嬢ちゃん達との話題を絞りますかね」

軽く首を回しながら次の行動を考えるコブラギルデイ。

内情に通じている自分が、部隊の主力が動くことを彼女たちに悟らせないようにそれとなく情報を制限すればいい。正直なところ、ツイーカ相手に機器のデータを弄るのは難しくなっているが、誤魔化すだけなら本業の口八丁でどうとでもなるだろう。

とはいえ、一緒にヒーロー作ってきた連中と別れるのはちよいと寂しいなあ、などとコブラギルデイは嘯いた。

「ふふ、ならばせいぜい世界の守護者が臨む決戦に相応しい場を用意してやるのだな」
コブラギルデイが作戦を了解したので、安心して威厳を回復したらしい。椅子を回し、振り返ったミツバチギルデイの手には「粘液でまみれた触手に絡まれるエレメナイトのフィギュア」が完成していた。

「……いい加減ケチらずにスライムの素材買うなりしろよ。自前の蜂蜜で仕上げるからすぐに蟻が集るんだぞお前さんのフィギュア」

ミツバチギルデイが、世界の守護者の末路の暗示だ……と言わんばかりにどや顔で見せてきた、会心のポーキングらしいフィギュアに対するコブラギルデイの反応は微妙なものだった。

というかベツタベタに蜂蜜塗れのフィギュアに全身で引いていた。

「何を言う！自分で作った方が微妙なテカリの表現ができるのだ！ほら、前祝いだ。遠慮せず持つていけ!!」

「いらねーよ！そんな蜂蜜塗りたくったモン！俺の部屋にまで蟻が来る！殺虫剤片手にこの部屋掃除してるアルテロイド何回見たと思ってるんだ!？」

虫寄せのようなフィギュアを押し付けられそうになり、コブラギルデイは全力で部屋から脱出した。

(ツイーカもミツバチギルデイもすつ飛んだのが上司になるのは勘弁してほしいねえ……やれやれ)

ともあれ、こうしてアルティメギルの本腰を入れたエレメナイトとの戦いが幕を開けたのだった。

——これは、とあるとある世界のダイジェスト。エレメライザー属性が男性が開発生される世界るの、ほんの少し昔の零れ話。とあるとある世界が本格的に侵攻される少し前の1シーン。

第15話 私、名前は何ですか？

「名前をキめよーと思いますー！」

『名前……変身時のコードネームかい？』

初等部の昼休み。

朝のニュースを見てからずーつと考えてたことをエレメリオンに伝えてみた。

だってあのニュース！新ヒーロー^{わたくし}をひがいしやAあつかいしてた上にあの後だって

さー！！

地上からじゃ誰が撃ったかわからないからって、

私^{わたし}のマグニフィセントバスター^{つわさ}までテイルレッドの新技みたいに言ってたんだよ！！

しつれーしちやうよね！

いくらツインテイルズが先輩ヒーローだからって、そこまでゆずる気は無いもん！！

もしかして、ちよくせつ見たテイルイエローなんかが意外とニュースとちがう感じ

だったのも、こーゆーことなのかな。うーん、テレビの闇を知ってしまった気分。

「こっちは、びしつとかっこいい名前で、バーンと新ヒーローってことを見せなきやいけ

ないと思うんだよね」

『ふむ。今後はツインテイルズと共闘することも想定すれば、コードネームを今のうちに決定しておくのもいいだろうね。』

エレメリオンもさんせーしてくれみたい。

そう、ツインテイルズにもまだ名乗ってないし、そのうちに考えなきやとは思ってたけど。テレビがこんなに しゅざい力がとぼしー時代だったなら自分からアピールしなきや。これは そーきゆうーにしなればいけない あんけん だったんだよ！

謎すぎて何も言えないって、トウアールさんの意見もさんこーにしたら、名前のこーかいは、早ければ早いほどいいはず。

「かつこよく とーじよーして！私を気にしてないちい姉や総二兄たちだってあつと
言わせてやるんだからー!!」

エレメライザーをにぎってる右手が怒りでふるふるする。

だって、ちい姉と総二兄どころか……学校来てみれば、クラスメイトだって誰も新ヒーローを話題にしてないんだもん。最っ悪なのだ！テイルブルーから目をそらしてて、いつしよに映ってた私に気付いても無いやつだっていたんだから!!

これはもう、ゆうよは無いじたいなんだよ!!

『そうか。変身した好香の勇ましい姿に似合うコードネームを名付けられたらいいね。』

指揮官・闇の処刑人ダークグラスパー。

彼女を筆頭に、

美の四心隊長・ビートルギルデイ。

故ドラッグルギルデイ部隊の参謀であり、その他この地で隊長を失った現・混成残存部隊のまとめ役となっている老エレミアン・スパロウギルデイ。

そしてデモニアギルデイという錚々たる顔ぶれであった。

集まった彼らが見ているモニターには——ロックチョウデリットと新たなツインテール戦士が映し出されている。

この情報を一般兵に伝達する前に、まずは上官のみで今後の対応を判断すべく集まっているのだ。

「未知数の新たな戦士……加えて、噂には聞き及んでおりましたが、スプレムステリットですか……」

スパロウギルデイの声には焦燥をとうに過ぎた疲れが滲んでいた。

現状のツインテイルズだけでも大きな障害となっているというのに、そこへ敵の増援。おまけに、現れば必ず台風の目となる暴走集団まで湧いて出てきたというのだ。頭を抱える厄介事ばかりが重なっていく彼の気疲れはどれ程のものだろうか。

「予想外とは言え、小さいのについてはどうとでもなるじやろ。あれはまだまだ場慣

れしとらんヒヨッコじゃ」

が、ダークグラスパーはスパロウギルデイの心配の半分は一笑に付す。最強の彼女にとって、新たなツインテール戦士は何ら脅威で無く。

彼女の眼鏡は、本来ロックチヨウデリットを葬るはずだった映像にある必殺の一撃は見事だが、それ以外はまだまだ不安定だと採点していた。

「問題にすべきはバカの集まり……鳥はわらわが始末したとはいえ、後続がいずれぞろぞろと集まってくるであろうな。じゃが、わらわも首領様の勅命の遂行にそろそろ旅立たねばならん」

彼女はスプレムスデリットのみに警戒を置いた。

その警戒対象でさえ自分がいれば問題ない、という自負はある。

が、その自分がアルティメギル首領の命令で、しばらく基地を留守にせねばならなく——勅命は数日前に下っているのにもかかわらず、部下の盛大な、涙の見送りを期待して未だに遠征していないという、後ろ髪を接着した上で腰が重すぎる状態ではあるのだが——闇の処刑人はスプレムスデリットに構っていられないのだ。

今も「ほれ、不安から引き止めるとかあるだろ？」とで言いたげな視線をチラチラと場の3人に送っている。

この場の最上位が彼女なのでツッコめる者はいない。

「承知しております。スプレムスデリット達の相手は、一般兵では荷が重い。御身が不在の間の迎撃は、私と片腕スタッグギルデイにお任せを」

不在となる間の対処を任せられるのは当然、彼女に次ぐ地位である美の四心隊長（ビィ・ティフル・ハート）。ダークグラスパーの無言の視線にビートルギルデイは迷わず応える。

おい引き止めないのか、というもう一種類の視線は巧みにスルーした。ビートルギルデイは技巧派なのだ。

「このような状況にあつて、やはり根本の戦力強化が必要。付きましては、スプレムスデリットについては伏せたまま、暫しの部隊の侵攻を休止し、兵の訓練に専念したく思うのです」

自身の考えを述べるビートルギルデイ。

ツインテイルズとスプレムスデリット。両者と三つ巴にでもなれば、手練れの隊長格であつても一筋縄ではいかない。四頂軍に連なる者達はまだしも、本来の一般兵ではひとたまりもないだろう。

こうなつては、指導力に長けたもう一人の副官アラクネギルデイが先日テイルレッドに倒されてしまったのはますます痛手だった。

だがそうも言っていない。脅威が判明している以上、全体戦力の底上げが必要なのだ。

「ふふ、どうですか。スプレムステリットは数が揃えば四頂の『剣』にも匹敵しましょう。少々の時をかけて一般兵を鍛えたところで、持ちのいい壁になるかどうかでは？」

スプレムステリット相手に雑魚を背伸びさせたところで無意味だ、とビートルギルデイの提案を鼻で笑うデモニアギルデイ。

……それは、スプレムステリットを『よく知っている』彼の自信と、見下している有象無象への興味の無さの表れ。

彼のサングラスの奥に光る目はロックチョウデリットよりももう一人の戦士に向いていた。

「悔るものではない。目立たぬだけで爪のある者、燻っているだけで思わぬ化け方をする者などいくらでもいる。磨きさえすれば、私がスプレムステリットを相手取ることになった際に、対ツインテイルズを任せられる者として現れるだろうさ」

「それではビートルギルデイ様のお手並みとしがたいエレミアン達の眠れる才を拝見させていただきましようかな。フッフッフ」

白い悪魔の嗤いに鎧の王者は動じない。

部下の伸びしろを疑っていない意思。なにより一般兵の言葉にいちいち騒ぎ立てるようではアルティメギルの頂点の一角に立つことなどできないのだ。

そう一般兵。

ただの一般兵であるデモニアギルデイの、上官への不遜な態度をスパロウギルデイが諫めることが無く。

そもそもまとめ役だけが集っているはずのこの会議に、なぜ彼が堂々と参加しているのか？不思議なことに誰一人違和感を覚えていなかった。

まるで光を遮られ、眼鏡が曇ってしまったかのように。

「それでは部隊の指揮はビートルギルデイに任す。兵を鍛えるも侵攻するも自由にやるがよい」

「はっ。では予定通り、スプレムステリットについてはまだ伏せておきます。事態を告げるのは、ある程度は鍛え上げてからに。スパロウギルデイよ、それまではお前からも極力、噂が漏れぬように働きかけてくれ」

改めてダークグラスパーより全権を譲渡されたビートルギルデイは早速、行動に移る。デモニアギルデイに部下の伸びしろを説いたが、それが先の話であるのも事実。

知る者の少ない厄介なはぐれ集団の襲来を伝えたとこで、今の部隊模様では浮足立って油断した部下たちが返り討ちに遭うのが目に見えている。

まずは心身を磨く鍛錬に集中させるべきと判断をしたのだ。

「わ、わかりました。ではそのように……」

スパロウギルデイもそれが判っているので異論は挟まない。

「それでは私はこのあたりで失礼させていただきますぞ」

おおよその方針を把握し、いち早く退室するデモニアギルデイを気にする者はまたしてもいなかった。

幹部勢の会合を後にし、通路を歩くデモニアギルデイーデモニアデリットはこれからを考え楽し気に笑っていた。

「さてさて。ビートルギルデイ殿の部隊育成はどの程度が間に合うものか……我らの一角が倒されたことは伝わっている。思っているよりも近々に誰ぞが来ますぞ？」

ロックチヨウデリットがツインテールの戦士に倒されたことは既に伝えた。興味を示した血の多いやつから順に現れる。もともと、血の気の少ないスプレムステリットなどいないのだが。

「のんびりしているとこの地も部隊も滅ぼす魔人が揃う。ツインテイルズ、属性勇者、アルティメギル……私を楽しませてほしいねえ？フフ」

白い悪魔は揃えたカードで始まるショーに思いを馳せてただ笑う。

こうしてどこの陣営も次の動きに向けた新たな準備を始めていた。

あつという間に午後の授業も終わって放課後。

いつしよに帰ろうって、友だちからさそわれたけど、残念ながら今日はパス。

なぜなら今の私にはしんこくな問題があるの。

なので図書室のすみっこでエレメライザーとお話してる。

「これだって名前がぜんっぜん思いつかない……！」

しんこくな問題はこれ。

ひじょーじたいにもほどがあるでしょ。せつかく授業中も寝ないでずっと名前を考

えてたのに。

「そもそもとして、ツインティルズとおそろいにできないのがさあ……！」

机にぐでんと広がってみても めーあんは浮かばない。

最初はさー、ティールブルー”みたいな色でかつこよくいけると思ってたんだよ……

でもね、そー思ってた変身した私を そーぞーしたら。

「ティールブルーと色がぶりすぎでしょ私……！」

ほぼ青と銀色だもん私。青と白のティールブルーと色が似すぎてた。

エレメリオンは、私がイメージしたからこの色になったってゆーけど、とにかく色で

名前つけるのはダメ。

かっこいいティルブルーが先にかつやくしてるんだから私のメージが埋もれちゃうかもしれない。

『ティルスカイブルーやティルシルバー等ではダメなのかい？』

「ティルブルー2号みたいでいや。シルバーも鎧がメインみたいでやだ」

『そうか……。』

エレメリオンがちよつと案を出してくるけどきやつか。

ティルブルーは好きだけど、セットあつかいで埋もれるわけにはいかないの！ただでさえティルブルーに捕まった、ひがいしやAみたいに思われてるんだから!!

ブルーとはちがうってゆー“さべつか”が必要なんだよ！

「もおお〜!!このままじゃ『お前たちになる名は無い!』ってツインティルズのピンチの時しか出られなくなっちゃう〜!!」

よそーされる、いただけないじたいに机の上でごろごろ転がっちゃう。

ヒーローのピンチにさつそーと現れる謎のヒーローもかっこいいけど、まずツインティルズが強いんだよめつたにピンチにならないの！そんなツインティルズを助ける謎のヒーローなんかしちやつたら私の出番とかほとんどなくなっちゃうでしょ!?

「ついついさわぎすぎて図書室から追い出された……しかたなく帰ることにしたんだけど、ほんとどんな名前にしよう？」

「かっこいい名前考えるってむつかしいんだなあ」

エレメリアンなんか毎日のように出ちやうんだから早く決めなきやいけないんだけど、あせるとよけーに思いつかないや。

『一人で考えて答えが出ないなら、誰かに相談してもいいんじゃないかい好香？』

「うー。そー簡単に言うけど、かっこいい名前なんて考えてくれそーなの総二兄くらいしかないよ……」

エレメリオンの意見にもいちりあるけど。でも、私が「かっこいい名前いっしょに考えて」って言ったら……

ちい姉はきつと笑って相手にしてくれない。

スーパーゴリラに名前なんかふよーかちい姉。私がスーパーゴリラって言ったなら怒るんだから、自分で名前くらいいつければいいのに。

おねーちゃんは手伝ってくれそう。

だけど、「かっこいい」っておねーちゃんのイメージじゃない。かわいい名前になっちゃいそうで不安。私はかっこいいヒーローの名前がいいの。

総二兄とトウアールさんはいけそう……なんだけど。

トウアールさん頭いいし、私に変身するってバレちやいそうでちよつとなあ。そしてら総二兄にもバレちやいそーだし。

お願いしたら　しょーたいをひみつにしてくれるかなあ？

……その前にみんなまだ学校に行ってる時間でないんだよね。くおお、頭をかかえるしかない。

「かつこいー名前が考えられて今すぐに　そーだんできる人……うむむ」

どこかにいないのかーそんなうってつけのじんぎいは……あ。

「いた」

思わず足が止まった。なんで気付かなかったんだろう。いるじゃない総二兄よりもうってつけな人！

『頼りになる心当たりが見つかったのかい？』

「うん！ぴったりなひと思い出した!!」

エレメリオンに返事しながら私は走り出した。そーとわかれば、とぼとぼ帰っていられないからね。

ぜんはいそげダツシユだダツシユ!!

ふつーならずつというはずなんだけど、意外と出かけてたりもするからまだゆだんできない。

「うりやあああああああ————！！！！」

ぜんりよくしつそーしてる間に家が見えてきた。でも今は帰ってきたんじゃないの。目的地はおとなりのお家！喫茶『アドレスエンツア』!! やったとびらにOpenの札かかつてる！

「あら？好香ちゃん？」

いきおいよくとびらを開けた私を、いつせーに振り返ったお客さんと未春おばさんおめあての人物がむかえてくれた。

そう、未春おばさんだよ。最近かつこいーことよく言ってるみたいだし、もしかしたら総二兄よりもそーゆーの得意かもしれない。

お家が喫茶店だからこーやって会える時の方が多いし、これは間違いない じんせん
でしょ、ふふん。

「おかえり好香ちゃん。んー、どうしたの？総二や愛香ちゃんに用ならまだ帰ってないのよ」

「あ、ただいま未春おばさん。えつとね、総二兄じゃなくて未春おばさんにその……」
未春おばさんは、お客さんの一人にコーヒを淹れながら首をかしげた。

しまった。未春おばさんがいたのはいいんだけど、思ったよりお客さん多くていそがしそう。どーしよ。

「店長^{マスター}。このレディはあんたの噂を頼つてここまで来たようだ。依頼内容くらいは聞いてやつてもいいんじゃないか？」

未春おばさんにいちばん近いカウンター席のおじさんが、大げさに腕組みしてかつこよさそーなこと言つてきた。

レディつて私？……なんか照れる。

「ココの噂を耳にするなんざ、それなりに事情があるつて証だ。だろ？」

今度は真つ白なスーツと帽子のおじさんが、帽子を深くかぶり直して目元をかくしながら、こつちにほほえんできた。おお、ドラマで見た探偵みたい。

……やつぱり、ちよつと見ない間にかつこい動きするお客さんが増えてる気がするなあこのお店。

「ふー、やれやれ。ノンビリと喫茶店マスターできると思つたら次の厄^タ介事^ネが飛んでくる。こんな小さいのに誰が教えたんだけ……」

未春おばさんもわざとらしーため息ついたら、さつとカウンターの奥から出てきた。そして流れるよーに私の手を引いてくれて、お店のはしつこの席に。

私を座らせて、その向かいに未春おばさんはニヤリと笑つて座つた。肘をついて顔の

前で手を組んで……これもなんかドラマの刑事みたいでかつこいい!

「それじゃあ、話を聞こうかお嬢ちゃん。——さて、おばさんにどんなご用事なの好香ちゃん?」

「あ、うん」

と、思ったら自然なよーすでいつもの未春おばさんにもどつちやつた。お仕事のとちゆうだったのに私の話を聞いてくれるみたい。

えと、これはもう そーだんしてもいいんだよね?

……でも、これだけすらすらかっこいいーやりとりができる未春おばさんなら、私の力になってくれるはず。ううん、私の目はたしかなはず!よーし。

「お願い未春おばさん!朝、テレビに出てた新しいツインテールのヒーローの名前いつしよに考えて!!」

第16話

「お願い未春おばさん！朝、テレビでに出てた新しいツインテールのヒーローの名前いつしよに考えて!!」

席から立ち上がってお願いする私に——未春おばさんは、ぽかんとしてる。

あれ？お客さんと話してるみたいに、かつこよくOKしてくれると思ったのに。

「新しいヒーローって、ニュースに出てた、テイルブルーに抱っこされてた子よね？」
うぐ。

未春おばさんにまでそーいう風に思われてるのか。やっぱりテイルブルーがすぐ放してくれなかったせいだ、くそう。

「そ、そーやって、学校でも誰も新ヒーローって思っていないの！だからね、ここはファインちごーの私がかっこいいー名前を広めて、イメージアップするべきだーって決意したんだよ!!」

まだ正体はバラせないけど、1ファンとして名前を考えて広める。これなら自然に名前を考えるの手伝ってもらえるし、あやしまれない。

どうだこのひっしよーの策は。ふふん。

「あらら、好香ちゃん。あの短いニュースだけで随分お気に入りになったのね」

「え、その、だって追加戦士だもんあれは。すぐにかっこいいところ見せてくれるはずだから！えーと、そう、これはね。せんこーとーしてやってつなの!!」

めずらしーものを見たって感じに未春おぼさんが私を見てくる。

べ、別に変じや無いでしょ、テイルレッドがかっこいいのと同じことじゃん！ちよつとTVに映りそこなっただけなんだから、ファンくらいいるんだよ!!

むむ、こんなことになるなら、前からツインテイルズのニュースとかチェックしておくんだった。

けど、何としてもここは、あやしまれずにせつとくしなないと。

「でも、名付けるのにおぼさんを選ぶなんて、目の付け所がいいのは確かね。ふっふっふ……いいでしょう！この未春將軍が新ゴッドクワイザーた戦士の名付け親になってやろう!!」

「おおー！」

やった。私の熱意が通じたみたい。

立ち上がった未春おぼさんは、その場でくるつと回りながらエプロン外すと、バサツとマントをつけた。かっこいい……！思わずはく手しちやった。

やっぱり未春おぼさんなら、変身した私にピッタリな名前だしてくれる!!

「それじゃあ。まず好香ちゃん的には、どんな名前が相応しいヒーローだと思うのか

ね？」

「えーとね。せっかくだからツインテイルズよりもスペシャル！って感じがよくてね。だから色じゃ無い方がいーかーなって。ほら、そーゆー見た目だったし？」

マントをぶわつと広げながら腕を組んで座った未春おばさんがしつもんしてくる。

そのしつもんを考える

私は、あのツインテイルズがもつとパワーアップする新ヒーローだからね。ゆくゆくはテイルブルーと同じかそれいじよーにかっこよくなるんだよ。見た目だけならもーすでにイチバンかっこいいかもしれない。

私は自分を きやつかんし できるからね、ふふん。

「なるほどなるほど。新たな戦士は既存メンバーと比べて特殊タイプも定番ね。けど、名付けるにはそれだけじゃ甘いぞ少女よ！」

未春おばさんは、私の顔の前で人さし指を立てて、ちちちつとふつた。ふふつと笑いながらやるポーズが決まって、かっこいい、たよりになる。

「どう特殊かも名前を連想する重要ポイント。例えば……力なら『ストロング』超能力なら『ミラクル』火や水とか属性で考えるなら光で『フラッシュ』……全てを超越した究極なら『アルティメット』とかね

「おおおおお……どれもかっこいいい……！」

すごい。たとえば、って言うてるのに、かっこいい名前をぼんぼん出てくる。さすがだ。

「もしも、青いテイルブルーの名前がテイル“レッド”だったりしたら、変な感じがするでしょう？名は体を表す……姿や能力とかに「似合った”スペシャルな名前”」じゃないと本人に名乗ってもらう前に、広まらずに知られない場合もあるのよ」

うむむむ……かっこいい名前ってゆーのも奥がふかい。これはしんちよーに考えるべきあんけんだった。ちゃんとメモしておこ。

未春おばさんにそーだんして　せーかい　だったね。

「うーん……鎧はおっきいし、マグニ、じゃない、空がぴかーつと光ったのだってテイルレッドじゃなくて、あのヒーローの必殺技だと思ふの。だからパワータイプ？なのかなあ……あ、でもかわいさもあつてしょ!?だから……」

「うんうん。そうやって一番アピールしたい要素を選んでいけば採用してもらえそうな名前が決まるわよ。好香ちゃんが思う、新ヒーローの一番の特徴ね」

そーやって2人で1時間くらいは話し合つてたかなあ。実に　ゆーいぎ　な時間。

「——これは中身の話になるからまだ判断できないけど。【大変そうな運命を背負つてるのに負けないで凄く明るい。】なんて性格のギャップも魅力になるのよ。ヒーロー

「で有名なところだと仮面ファイヤー号かしら」

「ふむふむ……せーかくも大事なんだね」

未春おばさんの　じゆぎよー　はほんとタメになる。

そー言われると、ティルイエローがTVとじつきいじや、何か　いんしよー　違ったのもギヤップだったのかな？ティルブルーは　もーじゆー　って　とくちよー　のいつてんとはって感じ？……本物のヒーローなのにびみよーにちがう気がする。次までに仮面ファイヤー号も見たほーがいいのかな。

私のとくちよーにせーかく……せーかくは、私なんだからかつこいいはずだし？ふふん。いちばんのとくちよーは……エレメリオン？

「それじゃあ未春おばさんそれじゃあね——」

「——あら」

もつと未春おばさんの意見を聞きたかったんだけど。

「それじゃ、じゃないわよチビスケ」

後ろからの声に　ちゆーだん　させられた。

ふりかえったら、そこにいたのは、ちい姉、総二兄、トウアールさん。

あれ、もう3人が帰ってくるよーな時間!? 時間だ……ゆーいぎな時間はすぐ終わっちゃう。

「未春おばさん仕事巾じゃないの。お店の邪魔しちゃダメでしょ!」

ちい姉ってば、ただいまも言わずに未春おばさんに向かって私の頭をおさえてきた。何すんの。

「何すんのちい姉! だって未春おばさんはお話聞いてくれるってーふぎゅ」

「言ってくれてもお仕事中は遠慮しなさいってこと! すいません、未春おばさん。ウチの妹がご迷惑を……」

はろんしたら、またすぐに頭をおさえられた。ふぐ、このスーパーゴリラめ。

私をおさえたまま、ちい姉は未春おばさんにあやまった。うう、もしかしてホントにちい姉があやまるくらいに未春おばさんのじやましてたの私?

「そんな頭下げなくていいのよ愛香ちゃん。突然に「喫茶店でワケあり少女の依頼を受ける裏の顔があるマスター」イベントが起こるのに比べたら営業なんかどうでもいいんだから」

「愛香と好香は気にしなくていいけど、母さんはどうでもよくないからな。お客さんを放置するな」

「大丈夫だってば。皆すっかりウチの味のコーヒーは自分で淹れられるようになって

るし、「マスターの裏の顔を知っていて少女の依頼を聞き流す常連」シチュを楽しんでるから」

「すっかり自分で、って何だよもおおおおおお!!!セルフで店の味再現されてるっ
てどうなってんだあああああ!!!」

ちい姉が未春おばさんにあやまつてたら、いつの間にか総二兄が えーぎよーたいどに頭かかえて叫びだしちゃった。いそがしーな総二兄も。

「それで？好香ちゃんは未春さんとどんなお話してたんですか？」

「トウアール、好香を調子づかせないですよ。どうせ大したことじゃないわよ」

「はー？これだからこれだから。妹が大人に訴える流行をないがしろにする雑さ。こ
ういうところからも蛮力にだけ磨きがかかるんですよ」

ちい姉の後ろから顔出したトウアールさんが、ワクワクした様子で聞いてくる。それ
なのちい姉は、このたいど。いーもん。頭のいいトウアールさんとちがって、ちい姉
には私のそーだいなプロジェクトは理解できないんだよーだ。

「それじゃーちい姉には教えてあげませんよーだ」

べーつとちい姉にしたを出してやった。元々ひみつの そーだん だったしね。

ちい姉のボディブローで私と同じ目線になったトウアールさんにだは教えてあげよ
うかなって、耳元に近づいたんだけど。

（やっぱりもーちよつとだまって、ちゃんと名前決まってから言うほーがいな。）

思いとどまった。名前が決まるまでドキドキして待ってもらうのもいーんだけど、新ヒーローがバーンと名乗るのを心のじゅんぴ無しで聞いてほしーなってゆーのもあつて……えへ。

「やっぱりトウアールさんにもヒ・ミ・ツ。もーちよつと待つててね」

しよーがないから、やっぱりひみつつてごまかした。ちい姉には何でもないって思われちゃうけどここはがまん。本番でトウアールさんといっしよにびっくりするがいーんだよ。

ちらつと未春おばさんを見たら、私にだけ分かるように小さくVサインしてくれた。そーだんないよーひみつにしてくれそう。今はだまつてるって私のはんだんはまがつてないんだね。

「はうううっ!!!」

そしたらトウアールさんが急にうめき声をあげて倒れた。ちい姉のボディブローが刺さったお腹じゃなくて胸をおさえてる。

「脳が溶ける少女の囁き……! 似通った容姿の蛮族と天使が交互に現れる温度差で心臓が……!!」

ぶつぶつ倒れてビクビクけーれんしてる。え、これ、平気なの!?

「トウアールさん?だ、だいじょうぶ……?」

「近づかないの。帰るわよ好香」

心配になってトウアールさんに手をのばそーとしたら、ちい姉に抱きあげられちゃった。それはうれしーけど、トウアールさんこのままでいーの?

けつきよく、私はそのままごーいんに連れ出されちゃった。もーちよつと未春おばさんのアドバイスを聞いたかったなあ。

あ。トウアールさんは、お店の中が遠くて見えなくなる直前に立ち上がってるシルエツトがあつたからホントにだいじょうぶそう。

ちい姉に連れて帰られてから、私は自分の部屋で、ずつと机に向かった。えんぴつ右手にノートとにらめっこすることどれくらいだろ。もちろん宿題とかじゃないよ。それよりもつと、じゅーよーなこと。闇子ちゃんおーえん用の眼鏡だつて そーちやくして「ちよつと頭がよくなった気がするモード」にもなつて本気だよ。

うん、でもまあ、ヒーローとしての宿題と言えばそーかも。

「よーし……決まつたあ~~~~!!」

そしてついにヒーローの宿題が終わった。すなわち、変身した私の名前——コードネー

ムが決まったんだよ!!どーだ、ふふん。

「話し合いのとちゅうで、ちい姉に連れてかれた時はどーしよーかと思っただけ。ふふん、やればできるんだよ私は!」

未春おばさんって あどばいざー をえたのはやつぱり大きかった。おばさんのヒントのおかげで学校じゃぜんぜん思いつかなかったのが、いつぱい考えつけた。むしろ、どれにしようかで迷っちゃったくらいだよ。

私はやればできる女子だからね。

『お疲れ様、好香。それでは、次から戦闘中はこのコードネームで呼ばばいいんだね。』
「うん。お待たせエレメリオン。これで、マグニフィセントエージェントのほんかくてきな活動ができるよ〜〜!」

『好香の準備が整ったのなら何よりだ。』

イスから飛び下りて、コードネーム考え中はずっと机の上においてたエレメライザーをつかんで、くるくるーと部屋を回っちゃう。

ひと仕事終えた かいほー感ってやつかな。それにコードネームをおひろめする時のことを そーぞー したら、もー楽しみでしよーがないんだもん、えへへ。

「……早く言いたくてうずうずしちゃうなあ。ちい姉にヒントだけでも……いやガマンガマン」

本番でイキナリ名乗りたいけど、思いついたからには早く言いたくもなってきた。とくに、変身した私にぜんぜん きょーみ 持ってなかつたちい姉なんかには、教えて、あつとおどろかせたい。

それはその、さつきトウアールさんにはひみつにしちやつたけど。今は早く言いたい気持ちも大きくなってきたの！

うゝ今しやべつちやうか予定通りに、さつそーと とーじよー した時に名乗るか迷ううう。

「ねえ、エレメリオンはどつちがいいと思う？」

『正体を隠したいなら、現時点で好香がコードネームを知っているのは不自然な事だ。伏せておいた方がいいと思うが。』

「やつぱりそうかな。でも、ちい姉のおどろく顔も早く見たいしなあく……うむむ」
エレメリオンの意見ももつとも。これはなかなか じゅーよー な二択だ。

ちい姉にコードネームかそのヒントだけでも教えてあげよーか考えこんでたら、ドアがノックされた。

「好香、入るわよ？」

ちい姉だ。

見つからないよーにエレメライザーをすばやく枕の下にかくして、と。ドア開けよーとしたら、ちい姉が顔を出してきた。いつもならいきなり開けないで！つて怒るところだけど、今回はナイスタイミングちい姉。どーしよーかちい姉の顔見ながら考えよ。

「どうせ遊んでるんだつたら、あんたも夕飯の準備手伝い……何笑つてんの？」

つごーよく来てくれたちい姉に、かんしゃ してたら顔に出てたみたい。むむ、理由はしよーじきに言えないし、てきとーに……

「え、それはそーだよ。わが家のスーパージョーゴリラがさー、よーやくドアをノックすることを覚えてくれたんだからいったあい!!」

それらしー理由を言ったのに、あごを指ではじかれて尻もちつかされた。ここまですることないじゃん、まんざらウソでもないんだから!

「もー……こーゆーとこでしよちい姉は……あれ?」

あごをさすつてたら、かけてたはずの眼鏡の感しよくがなくなってるのに気付いた。ちい姉を見たら、私を弾いたらしい指で眼鏡をつまんでる。いつの間に……

「あー私の闇子ちゃん眼鏡かえしてっ!!」

「ナマイキ言うからよ。口だけは達者になるんだから……あんたね、その内トウアールに影響されすぎた妹に、ちい姉がうっかり力加減ミスつてもしらないわよ?」

眼鏡はほいっと投げ返されたけど、ぞつとした。

なんてかわいいことゆーのちい姉。トウアールさんと同じことなんか私がされたら、無事にすむわけないじゃん……言っていいことと悪いことあるでしょ。

「ほら、下に行くわよ。夕飯の準備、手伝いなさいって」

引っくり返らせたちよー本人が、何事も無かったみたいに手をひっぱって無理矢理立たせてくる。うぬぬ、おもしろくない。

……よし、やっぱり、すぐには教えないしノーヒントにしてやろう。今ので、すぐおどろかすのよりも、こっそりちい姉にだけ教えてあげるなんてもつたいない、つて気持ちのが勝ったもん。ふんだ。

がんちゅーに無かったのが本物のヒーローだったっていきなりニュースで見て、せーぜーびつくりしちやえちい姉め。ふふん。

私を引っぱるちい姉の手からはなれて、先に階段を下りながらくるつと振り返ってちい姉にべーつと舌を出して笑った。

「ざんねんでしたー。ちい姉にはまだ分からないことがあるからねー。今日の私にはよゆーがあるんだよ、よゆーが。ふふん」

「はあ？今度はどんなアニメに影響されたのよ……？朝と夜でころっころ機嫌変えるチビスケなんだから」

「ふふーん、私のステージはね、ちい姉には、まだはやいんだよーだ」

「なんだか知らないけど、危ないんだからちゃんと足元見ながら階段降りなさい」
よくわかってないちい姉が首をかしげてるけど、私はひみつを持つてるちよつとした
ゆーえつ感にひたりながら、夕飯つくってくれてるおねーちゃんのお手伝いにキッチン
へはいったのです。

3人で夕飯を食べてると、おねーちゃんがこんなことを聞いてきた。

「2人ももう夏休みだけど、何か予定あるの？」

夏休みの予定……そうそう、こんな直前にいろいろあったから忘れそーだったけど、
明日は一学期の終業式。いよいよ夏休みが始まるんだよ。

「今のところ、あたしは特に予定ないわ。部活って言ってもまあ……一応、文化部？だ
しね」

あごに指をあてながら、ちい姉は予定なしだった。

それよりも自分の部活をふしぎそーにしてる感じ。ツインテール部なんてよくわか
んないクラブみたいだしね。どーゆー活動してるのかさっぱりそーぞー できない。

総二兄の考えることも、たまによくわかんないや……いや、ツインテールについてだ
といつもよくわかんないね。

で、私の方の予定はってゆーと。

「私も別にないかなー。友達と遊ぶ約束もまだしてないし……あ」
私も特に無し……だと思つてただけど、気付いちやた。夏休み、夏休みなんだよねえ。

「うふ、うふふふ……」

じゅーよーな予定ができてた。この分だと、きつと夏休みにコードネームをおひろめすることに。つまり夏休みの話題どくせんの一大予定じゃん!!

やつぱり話し合いのないよーひみつにしてせーかいだった。だって、夏休み前に私たちにえーきよーされて、ちい姉たちまで名前考えて、もしかぶつちやつたら面白みがなくなつちやうからね。ちい姉たちには新ヒーローの名前予想なんて はっそーがないままで夏休みをむかえてもらおう、うん。

こーゆーのはイキナリ名乗る方がインパクトがあるんだよ。

「好香……?」

「なんなのよ急に。気味悪いわね……」

思わず笑つちやつた私をおねーちゃん達がふしぎそーに見てる。けど、残念だね。まだひみつなんだから、とくにちい姉にはね。

「なんでもないよ。できる女子にはね、ひみつがつきものなんだよ、ふふん」

それでも? まーちよつとくらいは? ひみつの二オイだけは、ただよわせてあげよーか

なー、つてくるに決めた。

……そうしたら、おねーちゃんたちが顔見合わせて笑ったんだけど何で？

「なーに言ってるんだか。ああ、なるほど。さっきのも大方、未春おばさんにでも入れ知恵されたんでしょ？」

「あら、本当にいつの間にか秘密が似合う女の子になったのかもしれないわよ？ ねー好香？ うふふ」

「2人ともなによその顔ー!? 私をあまく見てたらびつくりするんだからねー!!」

ちい姉は「未春おばさんも好香で遊ぶの程々にしてくれないと……」とか言ってるし、おねーちゃんはなんか頭なでてるしなによろ!!

くーるに決めたはずなのに、思ってたのとちがう反応されたのがなつとくいかない。

夕飯のあと、部屋に戻った私はまたいろいろ考えることになった。

「もー！ おねーちゃん達つてば私にひみつがある女子になつたつてゆーの、ぜんぜん信じてないでしょ!!」

くそう、こーなつたら、いざれ正体明かした時の為になんとしてもコードネーム名乗りはかつこよく決めてやるんだから！ エレメンライザーをにぎりしめて、気合を入れ直さなきゃね。

「次に しゅつどー しなきやいけない時は気合入れていくからね、エレメリオン！」
『勿論だ好香。悪に負けない為にも、その気合は重要だよ。』

私の決意に伝えてくれるのはエレメリオンだけだよ、たのもしい。夏休み早々の新とーじよー、2人で目にも見せてあげよう。

『それじゃあこの調子で、学校の宿題も進めてはどうか？最近、幾つも宿題をもらっていたと思うのだが。』

「……………」

エレメリオン、その発言は今の決意に水を差してくるやつだよ。当たり前のようにふれてきたけど、それは夏休み直前の小学生にいつちやタブーなやつなんかから。

「あのねエレメリオン。今あるのは『夏休みの宿題』だから、終業式すんでからでいいの」

ぱたぱたと手をふってエレメリオンの考えは ひてー する。そう、昨日でも今日でも、わたされる宿題はとーぜん夏休み用。だから、今日はまだ何もしなくていいの！夏休みは終業式おわってからなの！！はいこれでこのお話はおしまい!!!

『しかし好香は、長期休みの終了直前になってお姉さん達に手伝ってもらっているだろう？少しでも進めておいた方がいいんじゃないかい？』

「え、それは……いいの！（おねーちゃんとちい姉と）私が本気だせばらくしよーなん

だから!!」

よそーがいのしてきに言葉がつまりそうになった。

まさか私の宿題じじよーを知られていたとは……！けど、みとめちやうと、エレメリオンまじめそーだからこの先も宿題について言われかねない。なんとしてでもごまかさないと。

「それにつ、今日はほら、もつとだいじな……そう！コードネーム決めなんて、ヒーローとしての宿題をやったわけでしょ。学校の宿題ができなくてもしかたのないことだよ！ふかこーりよくってやつでしょ!」

『いや。マグニフィセントエージェントの使命も大事だが好香の生活も大事なことだ。勉強まで疎かにさせるわけにはいかない。』

うぐ、やつぱりまじめな　しょーぶん　してるエレメリオン……変身させるときの押しは強いのに。

私のために言ってくれてるのは分かる……でも今日は宿題なんてする気分になれないから、ぜつたいにやだ!!

……こーなったら。

「ふふん、あまく見ないですよ。私はマグニフィセントエージェントなんだから。去年までの私とちがうの！夏休みの宿題くらい、どーにでもなるから今日はきゅーけいする

んだよ!!」

『そうなのかい？好香がちゃんとできるなら構わないんだけど……』

「だいじょぶなの！」

いきおいで、たんかきつちやった。

これでもう、夏休み中に宿題おわらせられなかった時は、エレメリオンにまでしかられるかもしれない、ドーしよ……。

ううん、まだ夏休みは始まってもないんだからダイジョーブだいじょぶ！夏休みになったら本気だせばいいんだから。闇子ちゃん眼鏡だつてあるもん。

それに、今年はおねーちゃんとかい姉の他にもトウアールさんつてさいきよーの助つとが期待できるんだからね。心配することないない！

だから今はマグニフィセントエージェントの出番にそなえることの方をゆーせんできさるの！

——それなのさあ。

こーやってヒーローとしてのじゅんぴをととのえていた私は、夏休みの予定がないと言つてたちい姉が初日からせんげんてつかいするとは思ひもしなかつたのです。

第17話

1学期の終業式がおわった。

つまり……たった今から夏休み！いえーい！！

だけど夏休みスタートしてすぐ、私はまっすぐ家に帰った。それは友達とちよつと遊んで帰ってもいーんだけど……遊んで帰れたかったけど。

私にもいろいろと　りゅー　があるの！

「たっだいまー！」

「おかえり好香……随分と大荷物ねえ」

リビングにいたおねーちゃんが私を見て笑ってる。

うー、そうだよ。今日まで教室に置きっぱなしにした荷物がいっぱい、両手も前もふさがってるの。わかったでしょ、これが理由。こんなじょーたいで遊べるわけないでしょ！！

てゆーか、おねーちゃん。すつとスマホ出してこんな重そーび　してるカッコ撮るの止めてよ。

「去年も言ったでしょう。夏休みの前にちよつとずつ持つて帰らないからそうなるのよ」

「だつてめんどーだつたんだもん。それにきつと いでん ってやつだもーん。どーせおねーちゃんだつて、初等部の時は同じことしてたんではよ？」

「ハズレ。おねーちゃんは計画的に持ち帰つてました」

「う……じゃ、じゃー私はおねーちゃんじゃなくてちい姉のいでん……」

「はい残念でした。愛香おねーちゃんも考えて持ち帰つてたわよ」

おねーちゃんの小言を言い返したかったのに、全部ふさがれた。

なんてこと。おねーちゃんはまだしも、ちい姉はぜつたい私と同じタイプだと思つてたのにい。

ウソだと思いたいけど、おねーちゃんのちい姉 じょーほー が正しいのは間違いないし……くそう。

「ほらほら部屋に荷物置いて、手洗いうがいをちゃんとなさい」

「はーい」

着がえて部屋から出たら、ちようど階段上がつてきたちい姉とぼったり会つた。ちい姉も帰つてきたんだ。

「おかえり、ちい姉！ついに夏休みだよ夏休み!!」

「ん。ただいま好香」

……なんか変だなちい姉。元気ない……とはちがうかな。ちよつとそわそわ？ふわふわ？してる？いちおーはいつも通りのふりしてるみたいだけど、私の目はごまかせないよ。ふふん。

よし、ちよつとためしてみよう。

「ゴリラらしくないよーちい姉」

ボソツと言ってみたけどはんのーしないで素通りされちゃった。おねーちゃんのことまで階段ダツシユする準備してたのに。

いつもなら最低でも「だったら、リクエスト通り泣かしてあげようか？」くらい言うってくるスーパーゴリラなのに。これはやっぱり何かあったなちい姉、むむむ。

気になるから自分の部屋にむかうちい姉について行ってみようとしたら、私のとなり、スツと影がでてきた。

おねーちゃんかな？

と、思ったんだけど。となりを見上げたら、いたのはトウアールさんだった。

「あれ、トウアール——んむ」

トウアールさんが、ひとさしゆびを口に当てて、しーつとナイシヨのジェスチャーを

「するから、あわてて両手で口をふさいだ。」

私が静かにするのを、かくにん。したトウアールさんはにつこり笑って、ちい姉に気付かれないよーにそっーつと、いっしょに部屋にはいつていつちやっつた。

うーん、スパイみたいなこともできちゃうんだトウアールさん。かつこいい……

「でもだいいじよーぶかなトウアールさん？」

ただこれはこれで、ちい姉のようすは気になるけど、こつそり部屋について行つたトウアールさんも心配になるんだよね。ちい姉が、しよーきに戻つたあとで怒らないといーんだけど。

『好香。やはり彼女とは、一度話がしてみたい。』

トウアールさんとちい姉が消えたドアを見てたら、ポケットのエレ^エレ^レメリ^メライ^リザー^ザから意外な声が。

「エレメリオン？トウアールさんがどーかしたの？」

エレメリオンがトウアールさんを気にするなんて。ちい姉たちにはごあいさつしたとか言つてたけど、トウアールさんは？

『詳しいことは少し長くなるから、また今度にしよう。だが私の推察が正しければ、彼女は我々の力になってくれるかもしれない。』

うーん？トウアールさん頭いいから、お手伝いしてもらえるかも、つてこと？

ちい姉に たいこー していろいろ発明してらしいトウアールさん。そのトウアールさんが、仮面ファイヤーや超戦隊みたいに私たちにアイテム作ってくれる博士に？

「……いいかも」

そーぞーしたら、けっこーいいイメージ。トウアールさんめちや頼りになりそう！

「うんうん。わかった！新ヒーローのおひろめしたら、トウアールさんにエレメライザー見せてみる！」

『ありがとう。好香の準備ができてからで構わないよ。』

トウアールさんに話すと総二兄にもバレちゃったりしないかなって、思ってたけど、博士になってくれるなら、ひみつの仲間だもんね。絶対ナイショにしてくれるはず。

「これはますますしっかり新ヒーローデビューしなきゃいけないぞー！」

『ああ。頑張ろう好香。』

夏休みすぐに新メンバーのめどがなくなると、これはいい夏休みライフになるよ
ちよー かも！えへへ。

「あら、愛香と一緒にじゃないの？好香」

「んー、なんかね、ちい姉トウアール^おさんが来てるから」

リビングに戻ってきた私が、ひとりなことに首をかしげるおねーちゃん。このようすじゃ、トウアールさんには気づいてなかったみたい。

これはつまり、トウアールさんはスパイだけじゃなくて忍者みたいに気配も消せる？さすが。

「だ〜から〜。私はちい姉がいない間におねーちゃんをひとりじめするのっ」

ソファにすわってるおねーちゃんに飛びつく、えへへ。胸に飛びこんで、おねーちゃんがちよつとびつくりしてる。だって、ちい姉も大好きだけど、おねーちゃんだって大好きだもん私。

最近ほら、^{エレメリアン}へんしつしゃがらみのイベントめじろ押しだったから、ちい姉のほうが心強かったってゆーかさ……

「ひとり占めされちゃった。それならお姉ちゃんは、好香ポイントを充電させてもらえるのかしら?」

「いいよー! ぞんぶんにじゅーでんしてよね、おねーちゃん!」

おねーちゃんは、私をひぎの上にのせると腕を回してぎゅーつと抱きしめてくれる。そのまま持たれかかると、背中にあたるかんしよくがやわらかくて温かい。いいでしょ私のおねーちゃん。

「ふふ、好香はいつも愛香一筋だもの。むしろ今は、お姉ちゃんの方が好香をひとり占めかなあー?」

「ええ〜? おねーちゃんだつて大好きだもん。ちい姉ひとすじつて、そんなこと無いつてば」

「ほんとにい〜?」

にこにこ笑いながら、おねーちゃんが顔を近づけてくる。しよーじきに言っちゃいなさい、なんて楽しそうにしてる。

ちよつと、ゆだんしたらおねーちゃんはこれなんだから。

「もー、おねーちゃんは ゆだん するとすぐイジワルゆーよね。てい」

からかってくるおねーちゃんにはこうだ。のぞきこんでくるおねーちゃんのほつぺをつついてやる。

「あらら、でもね仕返しできるのは愛香おねーちゃんだけじゃないのよ? それっ」

「きやー」

おねーちゃんは、今よりもぎゅーつと私を抱きよせて頬ずりしてくる、くすぐつたい。やつたなあもう。私だつて負けないんだから。

おねーちゃんと遊んでたら、ズバンズバンつて感じのすごい音がして、天井がビリビ

りふるえ出した。地震!?

「きゃっ!」

「ひゃ!?!」

思わず、おねーちゃんといっしょに天井を見上げた。

まだドツカンドカン音が続いて、私とおねーちゃんがソファから浮きそうなくらいにしょーげきがガビリビリくる。

「愛香つたら元氣ねえ」

「元氣つてゆーかゴリラじゃんスーパーゴリラ」

おねーちゃんが苦笑いして、私はあきれたよーにため息。

地震かと思ったけど、天井—2階からビリビリくる。しょーげき。つてことはちい姉なんだよね。さつきは、そわそわしてると思ったら今度は何やつてるんだろ。

え、まさかトウアールさんがやられてる音じゃないよねこれ……?」

「……トウアールさんだいじょぶかな」

「意外と心配性なのね好香。愛香がお友達相手に乱暴なんてしないわよ」

おねーちゃんは私の考えすぎだつてクスクス笑う。けど、私は何回もそーゆー現場を見てるんだからね。笑いごとじゃないんだよ。

トウアールさんはね、ちい姉の女子力マシスワーにたえられちゃうお友ライバルだから、ちい姉が総

二兄よりも手かげんしない相手なんだよおねーちゃん。

しばらくするとウソみたいに静かになった。

ちい姉がやりすぎて、トウアールさんがたえきれなくなつたとかじゃないとーんだけど……

そーいのつてたら「ごああああ枕が遠心力で鉄の硬度を!」なんてトウアールさんの声が聞こえてきた。よかった、だいじょーぶそう。さすがトウアールさん。

トウアールさんのさけび声が聞こえてからちよつとしたら、ちい姉がリビングに入ってきた。

ちい姉だけか。トウアールさんいないや。

「お友達、もう帰っちゃったの?」

「ん。今日は、遊びに来てたわけじゃないから」

帰つたつてゆーか、たたき出したんじゃないのかなーつて、おねーちゃんたちの会話を聞いてて思う。ちい姉は窓からトウアールさんを放り投げてもおかしくないからね。トウアールさんも、へーきで着地してそーなんだけど。

でも、ひと暴れたせいかな? いつものちい姉にもどつてる気がする。

それでも念のためにかくにんしてみよっかな。

キッチン行って牛乳飲んでるちい姉に聞こえないくらいの声でぼそつとつぶやいてみる。いつものちい姉ならこれだって気付くはずだし

「いまさら牛乳とかムダな努力でしょ」

「こらチビスケ」

すぐ反応してギロツとこつちにらんできた怖つ。

だから、おねーちゃんの腕を引いて、かくれるようにぎゅーつとくつついた。ふふん、これでどーだ。

それ見たちい姉は、ため息つきながらソファにすわった。ふふん、おねーちゃんは味方だもん。

「あらあら。好香を怖がらせちゃかわいそうよ愛香」

「どう見たって生意気な顔しかしてないわよそのチビスケ」

うん、やっぱりいつものちい姉にもどってる。

「好香と一緒にビツクリしてたのよ。二階からディーゼルハンマー打ち込むみたいな音が聞こえてきたから」

「なによそれ、大袈裟なんだから」

キックでコンクリート壊せるくせに、どこがおおげさだと思えるんだろ。じかくしないと、そのうち家をくずれさせちゃうんじゃないのスーパーゴリラ。

「ちい姉はさー。自分がゴリラじゃなくて、スーパーゴリラだつてことを　じかくしたほうがいいよ。そーだよねー？おねーちゃん」

おねーちゃんの言葉に苦笑いしてるちい姉に、真実を伝える。私のいうことにおねーちゃんが苦笑いしてるけど、ちゃんとちい姉に言った方がいーんだよ。スーパーゴリラを野放しは、あぶないんだから。

そー思つておねーちゃんを見上げてたら、となりからにゅつと両手を伸ばしてきたちい姉が、私の顔をはさんだ。え、何？

「はいはい。帰つてから、ちい姉に暴言これで3度目ですねー好香ちゃーん」

「いたいたいいたたたた!!!」

笑いながらほっぺたりよーほーひっばつてきた！笑つてるくせに、力いれすぎ!!
それに3度目つて、トウアールさんには気付かなかったのに何で私が部屋の前で言ったことだけおぼえてんの!!?

いたいたい!

「ほらこれよ。お姉ちゃんが大袈裟に言うからこのチビスケが調子に乗るんじゃないの?」

「ふふ、私のせい?そうそう、二人が帰つてくる前に未春おぼさんのところでコーヒー飲んできたけど、最近は不思議なお客さん増えたわね?」

「あゝ、うん……」

ちよつと！ちい姉になんとか言つてよおねーちゃん！ほつぺ引つ張つたまま話すの止めて!!未春おぼさんのことは後でいーでしょ!?

ほら私のじよーたいよく見て!おねーちゃんのひぎの上で抱っこされたままで動けなくて、ちい姉から逃げられないんだから助けてよ!!

いたいたい!

「大丈夫?周りの女の子にモテるでしょう、総くん」

だいじよーぶじやないのは私!総二兄がかっこよくなつてるとか今はいーから……いたたた!総二兄の話題になつたからつてよけーに力いれないでよちい姉!スーパーゴリラ!!

「いひやいいひやい!いひやいつへふああ!!」

「え、あーごめん、強く引つ張りすぎたわ」

私の涙声に気付いて、よーやくちい姉はほつぺを放してくれた。うう、いったああいい……あとが残つたらどーすんのよ、ちい姉のばかあ。

「ちい姉なんかさつきとコクハクして振られちゃえばーか……」

「お姉ちゃんもごめん、応援してくれてるのにつて、なんだとこいつう……!!」

「べー」

にらんでくるけど、そんなの知らないもん。ふんだ。

「そんなこと言っちゃダメよ好香」

「だつてえ……」

おねーちゃんがこまった顔で私に注意してくる。そんなこと言つたつて、ちい姉がらんぼーだからだもん。

……それはそーと、なんでスマホかまえながら私見るのおねーちゃん。

「総くんに振られたら愛香おねーちゃん泣いちゃうわよ？ いいの？」

う。それ言つてくるのズルい。

ちい姉は、元気でかつこいー方がにあうし、そーゆーちい姉が好きだもん。

今は、おねーちゃんの言葉で変な顔してるけど。

「それはやだ……」

「そうよね。ほんとは好香だつて愛香おねーちゃんのこと、応援してるんだものね」

「うん。ちい姉も総二兄も好きだもん……」

な、なんか恥ずかしくなってきた。うう、顔があつい。

思わず手でふたをしたら、頭の上から「あ、隠さないで好香」つて声とスマホのシャツ

ター音がパシャパシャした。

……なんでおねーちゃんはすぐにスマホ出してくるの。よけー恥ずかしくなっちゃうからやめてよおもお〜。

「な、なによこつちまで照れるじゃない。お姉ちゃんも好香をノせないでつてば!!」
顔赤くしたちい姉が、ボフツとソファの上に寝ころがった。なんでちい姉が照れるの？だから、照れるくらいならさっさとコクハクしちやえつてゆーのに。

「それに、愛香おねーちゃんが振られちゃったら、お姉ちゃんずつとツイントールにできなくなつちゃう」

おねーちゃんは、指先で私の髪をつまんで、ちい姉に向かってふりふりと振る。

そっか、『ちい姉と総二兄がコイビトになるまでツイントールにしない』つて約束してるんだっけ、おねーちゃん。

「そうだ。好香が見たいつて言うなら、お姉ちゃんツイントールにしてみようか?」

じよーだんぼくおねーちゃんが言うけど、私が好きなツイントールはちい姉（とティルブルー）だけだからね。

……待つて、でも、ちよーつと気になる。うん、ちよーつとただだからね?

おねーちゃんのツイントールつてピンとこないけど、おねーちゃんのツイントールでしよ。もしかしたらちい姉のツイントールみたいに好きなやつかも。どうしよ。

「え?!駄目だつてば!!」

でもツインテールのおねーちゃんをイメージする間もなく、ちい姉ががばつと起き上がって、おねーちゃんを止めにくた。そんな本気であわてなくてもいいと思うんだけどなあ。

「大丈夫よ。約束はちゃん覚えてるから」

ペロつと舌を出して笑うおねーちゃん。ほら、ちい姉からかつてるだけだ。

「愛香おねーちゃんが許してくれないみたいだから、ごめんね好香」

なんて、笑いながら頭を撫でてくる。そんなこと言つて、ちい姉があわてるの最初からわかつてたでしょ、おねーちゃん。

それにしても、どーやったらノーダメージでちい姉からかえるようになるんだろ。強い。

「私もまだ見たいって言つてないじゃん。それにちい姉泣いちやいそうだし、見れなくてもいいよ」

「約束つてほのことじゃ……チビスケはうるさい、泣かないわよっ」

むむ、ちい姉がほつとした顔するから、私もしよーじきに言つたのに。なつとくかない。おねーちゃんと態度がちがうじゃん。

「ふふ、だつて、とつても可愛くて忘れられないもの。今の好香くらの愛香が『おねえちゃんがツインテールにしたら、そーじとられちゃうからやだあ』つて」

「なにそれ！ちい姉そんなだったの!？」

なつかしそーにおねーちゃんが話す私の知らないちい姉。

こっちの方がおねーちゃんのツインテールよりびっくりした。なにそのちい姉、め

ちやめちや気になる。サタンプリンセス小魔王姫じゃなかったの。

ちよー見たい。

「気になる好香？未春おばさんがその時の写真を撮ってくれて、お姉ちゃんの宝物よ。今度、見せてあげる」

「やったあ！約束だからね！忘れちやダメだよおねーちゃん!!あー今すぐ見たーい!!」

「あの可愛い愛香は、好香の宝物にもなっちゃいそうね」

写真とか、さっすが未春おばさん。わかってるう。ちよつと そーぞー できないちい姉、見るのめちやめちや楽しみ。

やっぱり待ちきれないかも。今度なんて言わないで今すぐ見せてよおねーちゃん。

「勝手にそんな約束しないでよ!」

「わっ」

さつきよりも顔真っ赤にして立ち上がったちい姉に、おねーちゃんのひざの上からひったくられた。

未春おばさんはほんとにっ……、なんてぶつぶつ言いながら、ちい姉は私をひぎの上に乗せてソファにもどった。

また私の顔を引いて、真上からむすつとした赤い顔で見下ろしてくる。

「あたしの目が黒いうちは、そんな写真モノ絶つっ対に見せないからね」

「ええー！なんでなんでケチー！！」

「な・ん・で・も・よ！！」

ちい姉がまたおーぼーなこと言ってきた！おねーちゃんに写真見せてもらうくらい、どーつてことないじゃん！！そんなだからまだ初等部に小魔王サタンプリンセス姫の伝説が残ってるんだよぼーか。

「むー。別にちい姉にたのんでないもん。おねーちゃんに見せてもらうんだから」

ふん。いーもん。おねーちゃんが持つてる写真なんだから、おねーちゃんに直接お願ひするもん。

だけど、おねーちゃんのひぎにもどろうと思つたのに、ちい姉がっしり私の身体をつかまえて放してくれない。

むう、そんなに私に見せたくないの。

「だつたら、ちい姉ココでそのお願い、もーいつかおねーちゃんにやってみてよ！！」
だつたら写真はあきらめてあげるから、ちい姉が じつえん してみてよ。この だ

きよー案ならいいでしょ。

「あら、いいアイデアね好香！」

おねーちゃんも手を合わせて喜んで。どーだナイスアイデアでしょー。ほら、はやくやってよちい姉はやくー。

「そんな子供の頃の恥ずかしいことできるかつ！お姉ちゃんまで好香に乗っからないの!!」

「えー」

「えーじゃない!!あたしの姉と妹は、こんな時だけ足並み揃えてくるんだから……」
声をそろえる私とおねーちゃんに、ちい姉は疲れたよーにまたソファに転がった。つかまったままの私は、ちい姉の抱き枕みたいになっちゃう。

ちい姉といっしょだしこれはこれで。

「あたしよりもさ。そういうお姉ちゃんは彼氏作らないの？」

「今は愛香が心配でそれどころじゃないもの。愛香と総くんが恋人同士になってから本気出しちゃうわ」

ちい姉の質問に、おねーちゃんはよゆうの答え。でもたしかに、おねーちゃんならゆうー通りになってもふしぎじゃないって感じするもんね。

こーゆーのが、大人のよゆーってやつなのかな。

おねーちゃんに比べるとちい姉にはそんなのないなあ。写真ひとつでとれてるのに「あたしよりもき」とか言えないでしょちい姉は。

「ちい姉はおねーちゃんの心配してる場合じゃないでしょ。しつかりしないと総二兄つかまえられないよ」

「あんたは生意気。恋愛のれの字も知らないチビスケは黙ってな」

ぺちんっとおでこはたかれた。せっかく、じよげんしてるのに しつれー だぞちい姉め。自分だってレンアイの前にコクハクもまだのくせに。

「あら、分らないわよ？好香だって、気になる男の子がいたりするんじゃない？」

「私？そーだなあ……うーん」

「ぶぶ、このチビスケに？あるわけないって……え、もしかして、いるの？」
私のこと？おねーちゃん達がじいっと見つめてくる。

いいよ。ふぶん。私はちい姉とはちがつてね……と、いーたいけど。気になる男の子かあ……うーん。ぱつとすぐには浮かばないなあ。

だって、ちい姉よりかっこいい男子とかいないもんね。せめてちい姉の足元くらいのレベルになれないと、かっこいいとは思わないだよ私は。

気になるって言えば……エレメリオンだけ。エレメリオンは男子とかそーゆーん

じゃなくて、よくわかんない生き物？妖精？だし。かつこいいけど。

そーなると。

「やっぱりいかなあ」

私の答えにおねーちゃん達は顔見合わせて苦笑いしてる。しよーじきに言ったのになによ。

「ほら、こんなのじゃない。そんなんで『秘密のある女』とか10年早いよねえ」

「こんなのつてどーゆー意味!？」

ちい姉が、私を持ち上げておねーちゃんの目の前につきだしてイジイワルに笑う。

ぐぬぬ、ひみつならあるんだからね！いつかばらした時に腰ぬかしても知らないんだから!!

後ろのちい姉の言い草にふくれてたら、おねーちゃんが頭なでてきた。

「ふふ、好香はこれからってことだものね。好香に好きな子ができた時は、お姉ちゃん達ちやあんと応援するから教えてね」

さすが、おねーちゃんは　いーこと言う。ちい姉はおねーちゃんを見習うべきなんだよ。

でも、おねーちゃんの　おーえん　は心強そうだけど、その時のちい姉って、私をおーえん　てる　よゆー　があるのかなあ？

そー思つてちい姉をじーつと見つめたら、またおでこはたかれた。

「私なんにも言つてないのにー」

「顔見てれば生意気なこと考えてるのはわかるわよ」

「でも、本当に早いよね。好香みたいに頭撫で撫でしてあげてたあの小つちやな総くんが、もう私より背が高くなつちやつて……」

「うん……そうだよね。あたしたち、もう子供じゃないんだよね……」

私をなでなでしながらおねーちゃんが言ったことに、ちい姉がなんかまじめな顔してきた。

で、なんか決心してみたみたいで、私を下ろすとソファから立ち上がった。

よくわかんないけど、こーゆー時はやつぱりちい姉も私よりずっと大人だなーって感じがする。

「別の頭を撫で撫でしてあげなきや」

「お姉ちゃん、何か言つた？」

「2人が早く恋人になれますようにって、お祈り」

そんなちい姉を見て、おねーちゃんがほそつとつぶやいた。ちい姉はよく聞こえなかつたみたいだけど、べつの頭つてなんだろう？どーゆーおいのり??

よくわかんなくて首をかしげてたら、おねーちゃんが気付いたみたいで、笑って――
「そうね、好香が大きくなったらわかるかな？」

――教えてくれなかった。耳元で「それまではヒ・ミ・ツ」だって。けち。
だったらいーよ。それじゃ、私もとーぶん ひみつ は言わないからね。

「それより、好香は愛香おねーちゃんを応援しなくていいの？」

「あー、その言い方はズルイおねーちゃん！私だってちい姉のこと、いつもおーえんしてるの知ってるくせにー!!」

私の知らないおいのりしたからって とくいげ になってるでしょー。私がちい姉のことおーえんしないはずないでしょー！

「そうだ。昨日はああ言ったけど、あたしも部活で合宿行くことになったの」

「あら。じゃあ早速のチャンスじゃない」

「チャンスって、もうっ。でも、まあ、うん……」
は？

今、すごいこと言わなかったちい姉。

ちい姉のこと、おーえんしてる。おーえんしてるけど、ちよつと待って。おねーちゃんはおふつーに話してるけど待って。

「ちい姉どつか行くの……?」

「え?だから合宿——え、と、部活で何日か泊まりで練習するのよ」
何日って何?何日って!?

「い、いつ?!」

「日時はまだ決まってるけど。何、どうしたの?大丈夫よ、お姉ちゃんいるんだし。好香一人でお留守番とかになったりしないから」

「そうよ。ちゃんとお姉ちゃんがいるわ」

「そーゆーことじゃなくて!!夏休みなのにちい姉いないの!?!いつもよりいっしょにいられると思ってたのに!!」

「新ヒーローのとーじょーだっけ見てもらうつもりだったのに……ちい姉が、ちい姉がいないとか、こんなの夏休み最大の事件じゃない……!!!!!!」

第18話

夏休み一日目の朝。

そう、夏休みだからいつもよりゆつくり寝てられる、ベッドから出なくてもいい朝。時計を見たなら……夏休みじゃ無かったら2時間目はじまつてそんな時間だった。

「うう……ねむい」

でも私はまだ眠くて、ベッドから出る気になれない。だって、昨日はぜんぜん眠れなかったんだもん。

理由？

「合宿つてなによ、ちい姉のばかあ……」

そんなの、ちい姉が夏休みに家にいないとかゆーからよ!! 何考えてんのちい姉!!

思ってもなかったじたいに、頭がこんらんして、エレメリオンとお話することもできなかつたしちつとも寝付けなかつたんだからね!!

ほつりと呟いちゃうと、ちい姉がいなくなっちゃうことハッキリ意識しちゃつてさびしくなる。

だから! 昨日の、なんでもないよーな態度で合宿行くとか言い出したちい姉を思い出

したら、腹が立ってきた。なによなによ私の気持ちもけーかくも知らないで！

がぼつと布団をかぶつて、怒りをぶつけるよーに足をばたつかせる。

私がいくら蹴つても、ぽふぽふとベッドは受け止めるだけ。ちい姉みたいにベッドが割れそーになったりはしないよ。

「もういいや。起きよ……」

ベッドを蹴つてるうちにだんだん目がさえてきた。寝てもいーんだけどね夏休みだもん。でも今は、ベッドにいても合宿行くとかいーだしたちい姉しか頭に浮かんでこないもん……

ふらふらーと立ち上がって部屋から出て洗面所にむかった。

「こーなつたら、ちい姉が出かける日までに何とかして新ヒーローの とーじよーするしかないかなあ……？」

なんか足がもつれるけど階段を下りながら、まだちよつとぼーつとする頭でこれからの よてー を考える。

夏休みの間に、かっこいー私を見せつけるつもりだったけど、かんじんのちい姉がいないじゃスケジュールの ちよーせー が ひつよー になるから。

合宿先でもニュースとかで見るかもしれないけど、それだとちい姉がちゃんとびつく

りしてるかが、私にわからないでしょ。

私はちい姉をびつくりさせてやりたいの！

一番は、ちい姉が家にいる間に私とゆうー新ヒーローの出演があることなんだけど。だからって、エレメリアンが早く出てこいってゆうーのはちよつとちがうと思うし。

「でも、エレメリアンがないのに変身するのも変かなあ……うーん」

でもヒーローだけがしゅつどーしてるってゆうーのも変な気がする。パトロール？でもキューティピュアもピーストマンも街を回るのに変身してないし……やっぱり変身は怪人が出た時にするものだよ。いやいやでも今回はちい姉に見せるのが間に合わないかもってゆうー ひじょーじたい だし……でもだからって。

寝起きの頭じやいいアイデア浮かばない。うう、これもちい姉のせいだ。

リビングのドアを開けたら、おねーちゃんとちい姉が何かお話してた。

「おはよー、おねーちゃん、ちい姉」

「おはよう好香。あらあら、夏休みになった途端にお寝坊さんね」

「おはよ、ってうわ。なんて格好してんのよこの寝坊助は……」

声かけたらおねーちゃんは笑うし、ちい姉はちよつとびつくりしてる。いーじゃん、それが夏休みなんだから。で、ちい姉のはんのーは何……ああパジャマのズボンが

ずり下がってたのか。歩きにくいと思った。

「さつきから足がもつれると思っただらこれかあ。でも夏休みだしいつかあ……」

「よくないわよだらしない。ほんつとにもー、休みになった途端、ダメな方にスイッチ切り替えちやつて」

おーげさのため息ついたちい姉が、「どーしよつかあのチビスケは」なんておねーちゃんに言ってる。

むむ、自分だつてさつそくどつかお出かけしそうなカッコでバッグ持つてるじゃん。夏休みだからつて気が早いんじゃないの？

……え？

……お出かけ？

「……う？何、どうかした好香？」

いやな予感がして、ちい姉のカッコをじいーつと見つめちやつてたら、私の視線に気づいたちい姉が首をかしげた。

そのとなりにいるおねーちゃんは、私の様子に、はつとしたような顔してちい姉の方に勢いよく振り向いてた。なんだろ？

でも今はおねーちゃんのことよりちい姉だよ。まさか……ね。

さつき決まったって……夏休みの最初から出かけることないじゃん!!なに怒ってるってそんなの、そんな……!え、まさか合宿って夏休みずつと……!!?

「うう、ううううう……ちい姉のばか……」

「は!?!ちよ、ちよつと好k——」

もういろいろ我慢できなくなつてリビングを飛び出しちゃった。

「は!?!ちよ、ちよつと好香——なんなのよあいつは」

呼び止める間もなく、リビングを飛び出していった好香に、手を伸ばしたまま固まる愛香。

寝ぼけ顔で降りてきたと思つたら半泣きで逆戻りしていく妹。訳が分からず見送るしかなかった。

「あーあ、愛香がいきなり泊まり合宿で出かけるなんて言うからよ」

同じく、階段を駆け上がっていく好香を見た恋香は、しまったなあ、という様子で少しばかり咎めるような視線を愛香に送る。

「ええ?いきなりって、他にどう言えばいいのよ……」

恋香の視線に心外だと目を丸くする愛香。

確かに出発は急遽になったが、元々の予定を伝えただけであんなに騒がれても困る、

としか言えない。まして泣かれるようなことを言ったつもりは無い。

「去年の修学旅行の時も大変だったのよ。でもあれで少しは慣れたのかなあ、と思ってただけど。今度は「夏休み初日から愛香がいない」って心の準備がなかったのねえ」
去年……の出来事を懐かしむように苦笑する恋香。

そして愛香も姉の語るエピソードを思い出して、うげ、と息を詰まらせた。

去年。つまりは中学生最後の年には当然、愛香も修学旅行があつた。

一週間程度、愛香が家にいないと知った時の好香は、それはもう大変だったのだ。

当時、愛香は一緒に行く、と言いはる妹を「修学旅行に興味がある」だけと思い、適当にあしらって出発した。

結果として、それは失敗だった。

総二と進展できなかったこと以外は概ね楽しんだ修学旅行から帰ってみれば、砲弾のように突撃した好香にボディへの頭突きか抱きついたのか分からないことをされたのが初め。妹はそこからしばらくくっついて離れてくれなかった。数日間、何を言っても離れないチビスケに辟易としたものだ。

しかし、自分がいない間、まるで電池が切れたように放心している好香の映像を恋香に見せられると、ちくちくと心が痛むわけで。無下に引つpegすのも躊躇われる……という地味にハードな修学旅行明けになったのだった。

もつとも恋香にとっては、ちい姉欠乏症の好香、文句を言いながらも妹に最後まで付き合う愛香、の両方を嬉々として摂取したり映像保存して堪能できた充実の日々だったのかもしれないが。

「あ〜〜……そうだった。構ったら煩いし構わないとめんどくさいんだからもおおく……」

当時の気疲れが掘り起こされ、頭を抑える愛香。

そして出発がほぼ当日発表の形になった今回。言われてみれば、下手をすると前よりもぐずぐずと凹んだり、その後には貼りついてくるかもしれないのが容易に想像できた。と言うか今しがたりビングを飛び出した様子からすれば、このままではほぼ確定事項。想像するだけで疲れる。ため息がこぼれた。

加えて今はツインテイルズの活動もあることを考えると、ずっと構ってもいられない。なによりめんどくさい。

結果として貼りついてくる時間が増えるのだろう。また気が滅入る。

(好香の辛気臭いの顔なんて見たくも無いっていうのに……)

それ以上に、ちよろちよろと動き回って笑ってるのが、あの生意気な妹には似合っているという気持ちもある。

つまりは、妹がしよぼくれるのを分かって放置する選択肢は愛香にも無いのである。

「出かける前にご機嫌とっておいた方がいいんじゃない?」

「はあく。しよくうがないなあ、末っ子サマをおだててきーまーすー。あたしがいい間はお姉ちゃんが何とかしてよ?」

出発前のとんだ一時間に頭を振る愛香。帰ってからの面倒は少しでも減らしたいので、恋香にも合宿中のお守りを念押しした。

「大丈夫よ。私はどんな好香でもイケるもの」

「お姉ちゃんは他人事だと思つてえ……」

穏やかな笑みに見かけたいい笑顔で親指を立てる恋香に、愛香は眉がハの字にならざるを得なかった。

このできた長女は、三女についてはその百面相を楽しんでいる節がある。またその録画を優先して、こちらの気疲れは考慮せず最低限のフォローしかしてない好香を渡される気がする。こういう場合は今一つ信用ができなかった。

実際の所、愛香の自覚が薄いだけで、恋香は「振り回される愛香」についても楽しんでる。当てにできなくて当然なのである。

「ほんつともー。ほら来てやったわよチビスケー」

リビングを出て好香の部屋に向かった愛香は気怠そうにドアを開けた。

ノックはしてない。どうせ、さっきの様子だと拗ねて無視するのは分かり切っている。
る。

「あれ？」

想像と違う光景に愛香はパチリと瞬き。

てつきり布団にくるまってベッドで拗ねていると思っていた好香の姿が無かった。

「またあたしの部屋に入ってるわねあいつめ」

と、いうことは例によって自分の部屋だろうと悟る愛香。

不機嫌にさせた相手の部屋で拗ねるとかどういいうつもりだ、小さい仕返しのもりか？
なんて、妹の発想を推察して肩を小さく竦めた。

しかし、改めて自室のドアを開けると、そこにも好香はいなかった。

「え？あたしの部屋でもないの？」

物音はしてないので、知らない間に玄関から出たということも無いはず。いつもと違うパターンに首を傾げた愛香。

と、その目に開かれた窓が映った。

最近は何日のように、隣家の総二の部屋に飛び入りする通路になっていて、窓なのか扉なのか役割が怪しかったりするそれ。

ついでに、その窓から見える総二の部屋の窓も開いていた。

「んん……？」

好^妹香の居場所に察しがつき、愛香の表情がちよつぱり「怒ったちい姉」になった。

——数分前に戻って。

「ちい姉のばかばか!!」

リビングを飛び出して一直線に自分の部屋に走った。

ちい姉がなんか呼んだ気がするけど知らないもん!

ベッドに飛び込もうってドアノブを掴んで……あることに気付いたの。

「いきなり今日から合宿って……」

そのよてーって誰が決めたんだろ?

合宿……部活……じゃあそーゆーの決めるのって ぶちよー かな。ちい姉の部

活ってツインテール部? だし ぶちよー って言ったら……

「むむむむむ……!」

ちい姉が出かけちゃう原因がわかった。わかったらその相手に腹が立つてきた。

こーしちやいられないこーなったら じかだんぱん してやる!

自分の部屋のドアノブから手を放して、ちい姉の部屋のドアを開けた。

窓から見えるおとなりの窓は——よし、開いてる!

私は、窓枠によじ登って、おとなりの一総二兄の部屋の窓に飛びこんだ。
「てえいつー!」

窓から総二兄の部屋に飛び込んだら、ぼふつとベッドに落ちた。

がぼつと顔上げたらびっくりしてる総二兄が目の前に。総二兄みつけた!!

「好香!?何してんだ危ないだー」

「そーじにーでしよーーー!!!ちい姉をいきなり連れてくのはーーー!!!」

総二兄がなんか言い終る前につめ寄った。だって、こーぎ するのは私だもん! 総二兄はだまって聞くの!!

「なんで夏休みの最初の日から合宿にしちゃうの総二兄のばかーーー!!!」

総二兄の胸元をぎゅつとつかんで文句を言ってる。なによ! がつくんがつくん揺れてないで なつとく のいく答えを言つてよ! 無いなら合宿なんか反対だもん 反対!!

「ちよ、いきなりなんだ……それより揺らすなつ、お前の力で引つ張つたらシャツが破れる破れる!!」

「シャツよりちい姉でしょー!! 私のちい姉とのよーてーーいいいーーー!!!」

「おわっ!!」

ゆさぶつてたら、総二兄がバランスくずして引っくりかえった。

よし、逃がさないように上に乗っちゃえ!

総二兄のお腹にぺたんとして座った私は、まだ何も言わない総二兄を見下ろした。しばらくくれよーだったってそーはいかないんだからね!

「これで逃げられないからね。さあどーゆーことかせつめーをぶつ?」

「いてて……ちよつと待って。説明してほしいのは俺だよこの小型猛獣め……!」

総二兄のじんもんを続けよーとしたら、両手伸ばしてきて顔をはさまれた。振りはらおうとしたけど、しつかりつかまれてて顔が動かせない。ぐむむ。

「まずは落ち着いて順を追ってだな……いや、その前にちゃんと服を着ろ。家の外に出てくるかっこじゃないだろ!」

総二兄は私を見て呆れたように言ってくる。

ああそつか。起きた時のかっこのままあわててきたから、パジャマの下が脱げて片足に引つかかったままになってた。

つてそんなのどーでもいいし!!

「それどころじゃないでしょ総二兄!!」

「こっちの台詞だ!それどころだよ!!」

うぐ。なんで総二兄の方がさげぶの。でも今ちゃんとはきなおそうしたら総二兄

の上からどかなきやいけないし、事はちい姉の今後についてだからホントにそれどころじゃ……

「だって急いでたし……総二兄にげない?」

「逃げない逃げない。ごちやごちや言う前に服を着るのが先だ馬鹿。はああ……愛香も恋香さんもズボンも穿かずに走り回るチビを放って何してんだよ……」

下じきになつて総二兄が頭を抱えて　せーだい　にため息をついてる。

何よ。私がおんなにあわてなきやいけないのは、総二兄が夏休みそーそーにちい姉を連れて行こーとするのが原因なんだからね。

「何してるっていーたいのはこっちだもん。わかつてるの?」

「だから口答えの前に!はしたないから身なりを直せ!!」

口をとがらせたら、私の下じきになったままの総二兄が床をたたいてさげんだ。これじゃ叱られてるみたいじゃん、怒ってるのは私の方なのにい。

「トウアールストライク!!」

「うおおお!!?」

「ひゃあ?!」

総二兄の上からおりよーとしたら、イキナリ部屋のドアが蹴り開けられた。

間一髪で総二兄は飛び起きて、頭に当たりそうだったドアをスレスレで避けた。

その総二兄にのしかかっていた私は、とーぜんいきおいで引つくり返るはずだったんだけど、そーならないようにしつかり総二兄に抱きとめられてた。

ドアを蹴り開けたのは……トウアールさんだった。

トウアールさん、すごいあわててたみたいで息を切らしてる。でもキツクでドア開けるとか、トウアールさんもちい姉みたいなことできるんだ。

「ぜーぜー……何気なくダブルレットにカメラ中継したらまさかの光景。いくら好香ちゃんでもこれはダメです!!ダメ!!」

キツと眉をつり上げたトウアールさんが私を指差してさげんだ。え?私!?

「え、その、あの」

びくつと体がふるえた。

トウアールさんがこんなに怒るなんて、かつこを気にせず飛び出してきたの、そんなにいけなかったかな……

でもでも、ちよつとぼんつだけでおとなりの家になぐりこんだくらいで大したことは

……

あれ?ちよつと れーせー になると、そーとーダメなかつこしてる気がしてきた。確かにトウアールさんにまで見られてると、はずかしくなってきたかも……

「ほら。トウアールだってこんなに怒るんだ。好香はもうちよつと——」

考えたらまたさびしくなつてきちゃったせいで、俯いて声があまり出なかつたけど。なんで私はちい姉といっしょにいられないの？どーしてもちい姉が行くなら私もついていきたい。

会話を止めた2人が、キョトンとして私を見つめる。変なこと言つたかな？

「ええ？好香もしかして一緒に――」

「――っ!!なるほど好香ちゃんは、私に総二様と一緒に誘われたかつたからそんなかつこだつたんですねじゆるる」

「トウアールなんて？」

総二兄もトウアールさんもちよつとは分かつてくれたみたいなんだけど。総二兄の方は、なんかトウアールさんの方を見て固まっちゃつた。

「そういうことでしたか。いやこれは怒つたトウアールさんが大人げなかつたですね。総二様と極上好香ちゃんの幼女のハッピーセットなんて大歓迎ですよもちろんグフフ」

「え！それじゃあ私もいいの!？」

「ちよつと待つてくれ話が噛み合つてる気がしない」

トウアールさんが私も来るのOKだつて！

ちい姉といっしょにいられるなら家でも合宿でも私はぜんっぜんかまわないから。むしろちい姉とお出かけできるんだと思つたら合宿の方が……えへへ。あ、それならお

ねーちゃんもいつしよに來れないかなあ。

でも総二兄はひよーじよーが固まったままストップかけてくる……ダメなの？

「大丈夫ですよ総二様。もうすぐ出発時間ですし、今はちよつと好香ちゃんをつまむだけでおひひ……」

「待て待てやっぱり噛み合っていないだろ大丈夫に思える顔じゃねえよ!!」

「総二兄、私じゃダメなの？」

「そういうことじゃなくてな!?! ややこしいからちよつと待つてくれるか好香!」

トウアールさんと総二兄がまた揉めだした。がんばって総二兄をせつとくしてほしいなトウアールさん。

これでなんとかちい姉といっしよにいられるようにならないかなあ……

話が終わるの待つてたら、トウアールさんが笑顔で私を見た。わあ、ちよつとドキツとしちやうくらいキレイな笑顔。やっぱりトウアールさん美人。

「絶対、誘つてあげますから!今はちよつとペロペロするだけで我慢してくださいね好香ちゃん!!」

「え?」

なんか白衣を脱いだトウアールさんが抱きしめてきた。けつきよく、私は合宿いっしよに行けるのかな?

トウアールさんに期待していいのかな。

「トウアールさんにお願ひしてもいいの？」

「ふへへ、そうですねトウアールさんにお任せですよ。まずはその可愛いばんつを脱い

—」

「させるかクソポケロリコン痴女おおおおおおおおお!!!」

「幼女から誘われて同意の上だったはずなのに!!!!!!
いい!!!!!!」

「ええ?ええ!」

「おおああああ壁ええええええええええ!!!!!!」

トウアールさんがだんだん笑顔をびくびく震えさせながら顔を近づけてきたと思っ
たら、いきなり吹っ飛んで壁をやぶって向こうの部屋の壁に突きささった……

ななななななに!!!??

じよーきよーがさつぱりわからなくなって目をぱちぱちさせてたら、誰かがぼん、と
肩に手を乗せた。

総二兄、じゃないや。壁の穴を見てヒザをついてる。

「ふうー……好香」

「あううう……なにすんのちい……いたああいいい……」
だめ。痛すぎて文句言うどころじゃない。目もちかちかしてきた。
!!!」

ちい姉なんでもぶつの。なんでなんで……いたいよおおう……

「ほんつともお……。出かける直前だつてゆーのに、ウチのチビスケがごめんね
そーじ……」

「いや、それよりも壁とかがその、な……おう」

痛すぎて部屋をころんころん転がってる私を放つておいてちい姉と総二兄は何して
んのよばかあ……いたいいたい……
!!!!!!

第19話

「うわあああん!! ちい姉がイキナリぶつたあああ~~~~!! 私なんにもしてないの
に~~~~~ひどいいいい~~~~~!!!」

「うるさい! あんたよくそんなこと言えるわね!!」

姉のゲンコツにわんわん泣く妹と説教する姉。それと部屋をぶち抜いた先の壁に突き刺さっている白衣の美少女。

部屋の主である俺は、この状況をどうればいいんだ……

と、頭を抱えているところへ、インターホンの音が聞こえた。

「ああ……なんなんだよ、もう。ん? 今のは、慧理那たちも来ちまったか……」
願わくば、これが状況を好転させる福音であつてくれ。

俺——観東総二の今の心境を一言で表すならば。

困った。

これに尽きる。

俺の部屋への乱入に次ぐ乱入の大騒ぎから数分。

現在は場所をリビングに移し、登場人物は俺を含め六名となっていた。まずは俺。

そして壁に突き刺さったりカバリーを終えてピンピンしているトウアール。

更に、慧理那と彼女のメイドで護衛兼ツインテール部顧問の桜川先生。

もともと合宿の出発時間が迫っていたので、こっちの騒動が収まるよりも二人が来るのが早かった。

で、この四名の視線の先にいるのが残る二名。

「あんたはもう……朝から何回、ため息つかなきゃいけないのよ」

「だってだって……ぐす」

仁王立ちで騒動の発端妹を見下ろす愛香ちい姉と、その怒るちい姉を涙目で見上げている騒動の発端好香。

騒動の中心たる姉妹である。

「だから！あたしは学校の部活！その合宿なの！あんたがついて来れるわけないでしよ!!」

「そ、それでもっ、な、夏休みにちい姉がいなくてかやだあああ~~~~~」

「あああ~~~~もおおお~~~~!!」

リビングに移ってから、愛香と好香の間で同じようなやり取りが繰り返されていた。今ので何度目だったかな……

好香は泣いているが、愛香も聞き分けてくれない妹に頭を抱えていた。泣く子と何とやらには勝てないと言うが、この通り、泣いてる好香には愛香でも押し切れないものがあるんだよなあ。

聞き分けてくれない妹にお手上げになった愛香の、好香の鳴き声に負けず劣らずの叫び声が上がった。

そう。俺たちツインテール部——つまり、ツインテイルズは夏休みに強化合宿を行うことにしたのだ。

それが出発直前に「愛香を行かせまいとする好香」なんて思わぬトラブルに見舞われるとは。

「ついてつちやダメならちい姉が行かないでよおろろろろろ!!!」

「そんなのできるわけないでしょ……どうしたら諦めてくれるのよ」

さつき愛香に小突かれた（というのレベルの音では無かったが小突いたということであつてほしい）痛みで泣いたのが引き金だったんだらうな。「ちい姉と一緒にいたい」と不満を吐き出す好香は、愛香にしがみついて離れそうにない。

いよいよ腰にしがみついてまでわんわん泣く妹をどうすることもできず、愛香の方は

疲れた様子で声が小さくなってきた。

「うーむ。津辺のやつ、これほど妹に執心されているのか」

桜川先生は、全力で泣き落としにかかっている好香をいっそ感心した様子で眺めている。

「感心しないで知恵を貸してくださいよ。仮にも教師だし、こういう場合の子供に上手いこと言いくるめられる案とかありませんか？」

「無茶を言うな。私の本業はお嬢様の護衛だし、教師と言っても担当はお前たち高校生だからな。これが津辺と双子の弟くらいなら婚姻届を渡して執心の対象を私に変えられるんだが、あんな女兒ではな……むしろあの粘り方は参考になるといふか。うむ、どうだろう観束。お前が婚姻届にサインをしなければ津辺の妹を止めないと強気に懇願してみるといふのは？」

「どうだろう、じゃない！この流れで当然のように婚姻届を持ち出さないでください！！」

縫れるなら藁でもいい現状なので、教師というだけで我ながら無茶振りを桜川先生にしたと思った。が、3倍返しくらいの無茶振りに襲われた。

このメイドさんが婚期を逃すまいと婚姻届を常載している人なのは慣れてしまったけど、日進月歩で婚姻届を押し売りするスキルに磨きがかかっている。子供の駄々から

も技を見出さないでいただきたい。それ世間一般では、懇願でなく脅迫って言いませんかね。

ともかく。ずっと好香を知っている俺だって、ここまでとはちよつと予想外だったというか。

これまで愛香が学校行事なんかで外泊になる時は当然、俺も同様のスケジュールだった。その間の好香の様子は、後日に恋香さんの録画を見せてもらったりしてたんだが、その映像よりも大人しくなるどころかパワーアップしている気がする。

……いや、違うな。思い返せば恋香さんのアルバム映像でも成長する程にパワーアップしていた気がする。

両親が海外出張になった時はすんなり見送ってたと思うんだけどなあ好香。相手が愛香だとも嫌がるのか。

「正直、慧理那が外泊許可もらうのが一番の問題だと思ってたからな。こんなことになるとは……」

「わたくしも我が家が合宿の問題だとばかり思っていましたわ。ですが、どうしましょう……好香ちゃんのあの様子だと、初対面のわたくしは勿論、観東君が論しても聞き入れてくれるでしょうか？」

「そうなんだよなあ……」

俺と慧理那は困り顔を見合わせた。

慧理那は家の格式が高い、いわゆるお嬢様だ。なので部活の合宿とはいえ外泊許可が下りるのかという不安があり、そこが事前の最難関だと思っていた。

結果としては、思っていたよりもすんなり許可が下り何の憂いもなくなったのだが。

「好香だつてそのうち修学旅行とか行つたりするんだからね？ あたしは付いていけないのよ？」

「しゅーがくりよこーは夏休みにはないもん」

憂いは無くなったと思つただけどなあ。

愛香にしがみついたまま、説得からぶいっと顔を背ける好香。まったく、落とし穴は何処にあるか分からないものだ。

慧理那の言う通り、好香特効の愛香でさえ説得に苦戦している現状を見れば俺たちに何ができるのか。

この合宿がただの部活なら、最終手段としては好香も連れて行ってやる、というのも出来なくはなかった（それもギリギリだと思うが）。しかし、俺たちの部活はツイインテイルズ活動の方便であり、今回はヒーローとしての強化合宿。

加えて——合宿場所はなんと異世界なのだ。

とてもじゃないが好香を同伴させるのは無理だ。何としてでも諦めてもらうしかな

い。

「いつつも生意気なくせにこういう時だけ変に素直なんだからあ……もうちよつと意地張つて『ちい姉がいなくても何ともないよ』とかないの？」

「……ちい姉が夏休みにいない方がやだ」

「これなんだからああ……」

……諦めてもらうしかないんだけどなあ。

愛香はしゃがんで好香を抱きしめながらお手上げとばかりに天を仰いだ。そして、ちらりとこちらを振り向くと、援護射撃をしろとアイコンタクトを取ってきた。

すまん愛香。援護したいのはやまやまだが、今の好香にどう言えば効果的なのかがまじで分からん。

「はいはいはい！ 幼女に別れを惜しまれ泣きつかれるなんて良シチュは恐怖で泣き叫ばせる蛮族には似合わないと思います!!」

愛香の援護要請にここぞとばかりトゥアールが名乗りを上げ、豪快に背中から撃ち抜いてきた。

今まで静かだったのは、泣きつく好香を邪悪な目で凝視して涎を零し、泣きつかれる愛香をこの世ならざる怪異を見てしまった目で慄く、という忙しない二面相していたからなのだが、ついに抑えが利かなくなつたのか。

「好香に涎をつけるんじゃねえええええええ!!」

「天使の好香ちゃんは女神のトウアールさんが涙をペロペロしてあげまおぎやあああああああ全身がべろべろになる恐怖ううううう!!」

だが背中から撃つてもその壁は頑丈すぎた。

人体構造を無視した、にゆるんとしか形容できない流体じみた動きで好香に絡みつこうとしたトウアールを、愛香は好香を抱きしめたまま片手掴みで鞭のように振り回していた。

風圧と恐怖で歪む美少女だったはずの顔が縦横無尽に軌跡を描いている……

どーしてこーなったのか。

ちい姉の合宿について総二兄にじかだんぼんしに行ったら、追っかけてきたちい姉にぶたれて。そしたらなんかもちい姉に行つてほしくないってことしか考えられなくなっちゃって、ちい姉にくつついてる以外になにもできなくなつたんだよね。

だつてしよーがないでしょ!

なんかちい姉怒るし、夏休みにいないくらい大したことないみたいに言うんだもん!!
なんでちい姉いなくなる上に怒られなきやいけないの!?! つてなつたら、どーしよーもなくなつたんだもん。

「ちい姉どーしても行っちゃうの……?」

「深刻な顔やめなさいよ生き別れてわけでもないでしょうが」

「ぶああああああああああああああああああああ」

「そうかなあ……」

「そうよ!夏休みの合宿だって言ってるでしょうが!!」

「ぶああああああああああああああああああ」

私の頭をぼんぼんってなでてくれるちい姉は、怒った顔からすっかり困った顔になってる。うー、私のわがままかもしれない。でもわかってるけどそれでも。

「ぶああああああああああああああああああ」

……ちい姉いつまでトウアールさん振り回してるんだろう。だんだん叫び声が気になつてくるんだけど。

あ、そうだ。

「トウアールさんは大かんげーって言ってくれたの……それでもいつしよに行っちゃダメ?」

総二兄のお部屋では、ちい姉がイキナリぶつてきたから言いそびれちゃったんだけど、トウアールさんOKしてくれたんだよね。どうかな?

「はあ?……それ多分そういうことじゃないわね」

「床の埃もはたくべきよねえ!!」

その代わりにちい姉のお留守番を てーあん してくれたトウアールさんだつたけど、思いつき振り下ろされて床を人型に凹ませた。

総二兄が「ウチのリビング……」ってつぶやいてるのが聞こえたし、ちい姉もーちよつと気をつかつた方がいいのかもよ。

ちい姉がトウアールさんを手放叩きつけてして、味方が誰もいないことがはつきりしちゃった。

私はちい姉の背中に戻した手に力を入れて、見上げることとしかできない。ちい姉はむつかしー顔して私を見てた。うう、ちい姉またキツイこと言ったり引っぺがしたりしたら私は泣いちやうんだからね!私がちい姉から離れられると思わないでよ!!

ちい姉はちらつとだけ総二兄を見て、すぐ私に視線を戻した。私を見るちい姉は、……?なんかちよつと顔紅くしてる?

「これ以上は時間が勿体ないし……く……こんなの言いたくなかったのに」

今度はぶつぶつ言いだした。私を見る目がちよつとキツくなつた。な、なによ。今そんな顔されたら私は泣くんだからね!?

そー身構えたら、両手でぎゅつと私を抱きしめてくれて。

「好香さあ。あたしを応援してくれるんじゃないの?」

総二兄に聞こえないように、私の耳にそーとささやいた。

「あたしだけ合宿に行けなかったら、と、トゥアールに負けちゃうかもしれないけどそれでもいいの?」

ぼそぼそと言ってくるちい姉。ひどい、なんでそんなこと言うの。そんな、そんなの

……

「ええ!?!それ言うのずるーいいいちい姉!!そんなこと言ったら私、私……!」

「ええい騒ぐな!あんたがいつまでも駄々こねるからでしょ!あたしだってこんなしょーもない説得言いたくなかったわよ!」

わ、私の気持ちを　りよー　しょーだなんて　ひきよー　だぞちい姉!本気でちい姉を　おーえん　してるのわかってるくせに!!スーパーゴリラのくせにこーゆー時だけなんでそんなこと言えるのひどい!!

ほら、自分だつて言つててぶるぶるしてて、怒つてるのかはずかしーのかわからないじゃん!!

でもでも、そー言われたらこまる。ちい姉とはいっしょにいたいけど、コクハクも上手くいってほしーもん。トゥアールさん　きよーてき　だし、ハンデついたらちい姉だとちよつと……

「うう、ちい姉なさけないしぬけがけされたら逆転むつかしいもんね……」

「……」このチビスケ。自分でダシにしたけど、あんたが生意気にそう思つてるのは腹

立つわね」

うぐ。

抱きしめてくれるちい姉の腕の力がちよつと苦しくなった。自分で言ったクセになんで。ちい姉だつてわがままじゃん。

ちい姉をおーえんしたら会えなくなる。

ちい姉と夏休みいっしょにいたらおーえんできない。

つらい……きゅーきよくのせんたく……!

「ううううう……ちい姉おーえんしたいけど夏休みずつとちい姉に会えないのもやだあ」

どっちも選びたくて決だんなんてできない。

……ほんと私のわがままだけどき。ちい姉のおーえんしたいんだから、私がお留守番するしかないんだけどき。

わかつてるけど……それでも夏休みにちい姉なしとか無理だもん!!やだ!!
「おや?好香ちゃんつてば、もしかして勘違いしてるんじゃないですか?」

ひじよーな二択に身動きが取れなくなつてたら、いつの間にか私に合わせてしやがんでくれてたトウアールさんが。もしかして、とひとさし指をぴつと立てて見せた。

ほんの一瞬前まで、床の凹みにピッタリめり込んでたのに復活はやいなあ。

「夏休みの合宿、って別に夏休みを全部使うわけじゃありませんよ？」

え。

え？

「……………そうなの？」

さらつと、すごい　じゅーよー　なこと言われて頭が真つ白になった。え？え？

トウアールさんが、やっぱりつて感じで私を見てニコニコしてる…………あ、この顔知ってる。私をからかった時のおねーちゃんと同じ顔だ。な、なによう!!

「はあ!!そんな勘違いしてたわけ!!八月の一週目には帰ってくるわよ」

うそ、思ってたよりずっと短い。

だ、だからって、ちい姉はかわいいそうだと思つて損した、みたいな顔してるのになによう!!

ちい姉もトウアールさんもなによその顔!だって私そんなの聞いてなかったもん!!

「か、かんちがいとかじゃないもん!だってだって、ちい姉いつ帰るとか言わなかったもん!!」

「なーにその膨れつ面は。お姉ちゃんには教えた…………あんたはぐーすか寝てたり、聞きもしないでそーじの家に飛び込んだりしたんでしょ。このお騒がせチビスケめ」

私のじごくじとくみたいな態度になるちい姉にむすつとしたら、おでこを指でぐりぐりつつかれた。

「そもそも夏休み目一杯ツインテールについて部活することなんてあると思うの?」
ないね。たしかにそれはない。

総二兄が「本格的に研究したら夏休みじゃ足りないぞ」とか言ってるけど、それはない。そこは、れーせーじゃなかった、うん。

でもちい姉が夏休みにお泊りなんて、急に言われたられーせーなはんだんができる人なんかいないでしょ。むう。

「助かったわトウアール」

「もう少し可愛い泣き好香ちゃんを見ていたくもあつたんですけどねー。流石にかわいそうですし、そろそろ出発時間ですから」

「悪かったわね妹が手間を……ん? あんたいつかから好香の勘違いに気付いてたの?」
「いやー正直に言ってしまうと二人がループ口論してる途中から、ひよつとして……?」
?と思つてました。でも、泣き好香ちゃんってご褒美とあわよくば愛香さんが合宿キャンセルなんて千載一遇のワンチャンだったんで! 結果、自分のヘタレ具合で幼女に訴えかける自虐蛮族が見れたんでまあいいかなつて思いましたグフフっふおあばあ!!!」

ひえっ。私そっちのけで話しだしたと思つたら、ちい姉に顎を殴られたトウアールさんが一回転して倒れちゃった。

「まったく……何はともあれ、私がないのはほんのちよつとだけだつて好香もわかつたんだし、もう大丈夫よね」

つかれた一つて息を吐いて軽く伸びをするちい姉。くるつと向きを変えて、私から離れて総二兄のとこへ行こうとしてる。

え、ちよつと待つてよ。一步進んだちい姉のシャツをあわててつかんだ。

「ん? どうしたの?」

振り返つたちい姉がふしぎそうに見てくる。どうしたのつて。

「夏休みずつとじゃなかったけど……八月までちい姉がないのも長いと思う」

うん。思つてたよりも短かつただけでじゅーぶん長いよ。ちい姉が帰つてくるまで待つてられるか……自信ない。てゅーかムリ。八月までちい姉いないとかやだ!!

「え?」

「え?」

ガツクリと肩を落としたちい姉。なんで落ち込むの。

落ち込みたいのはちい姉とどーなるかがせとぎわの私だよ私。

「今のは聞き分けの無い妹がようやく納得してくれたつて流れだつたでしょうがこん

のチビスケはあああああああ~~~~~!!!!!!」

「はえ!? あうあうあうあうあうだつてだつてなつて~~~~~!!」

ちい姉がぱつと目の前から消えたと思つたら、大声出して頬つぺた引つ張つてきた!!
いたいいたいいたい!! 流れとか言われたつてしよーがないじゃん! 私はちい姉が
いつしよじゃないとさびしーんだもん!!